

ISACfA 《インフィニット・ストラトスAnd Counting for Answer》

傭兵No41

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、とある閉ざされた世界から、なんの因果かISの世界へと転生を果たした者達の、物語り《for Answer》——

※WARNING※

この作品には独自解釈・稚拙な文章に文体・初投稿・キャラ崩壊・原作ブレイク・アンチなど含まれるかもしれません。それらの事に嫌悪感を感じる方は、ブラウザバックをお勧めします。

それでもよろしいと言う方：お目汚しかと存じますが、どうぞ生暖かい目で見守り下さい。

そして——願わくば、お楽しみ頂ければ幸いです。

目次

chapter00	Prologue	
プロローグ	——	1
プロローグ	—chapter2—	5
プロローグ	—chapter for answer—	9
chapter01	生まれ変わって	
mission1	どうしてこうなった？ ～IS学園初日～	22
mission2	どうしてこうなった？ ～美しき過去～	28
mission3	どうしてこうなった？ ～微笑ましい過去～	37
mission4	どうしてこうなった？ ～嗚呼、忌々しき黒歴史	
mission5	IS学園入学、再会と新たな出逢い	46
mission6	代表候補生、そしてクラス代表	56
mission7	新たな生活、ルームメイトは誰？	66
Extra mission01	あなたの名前は何？	80
mission8	幼馴染みと気になるIS	96
mission9	打倒、代表候補生！絆と一夏と秘密の特訓計画	106
mission10	クラス代表決定戦 ～白と藤～	120
!?	——	137

chapter 00—Prologue プロローグ

アルテリア・クラニウム中枢

暗く細い通路を、二機のネクストが

ブースターを吹かし進んでいく。

細い通路（あくまで二機のネクストが並んで通るにはだが）を進むのは真鍮色のネクスト—レイテルパラツシュと暗い藍色で塗装された俺のAALIIYAH—ナイトレイド。暫くするとレイテルパラツシュが足を止めた。どうかしたのか？と、考え始めたところで直ぐに通信、発信元は—レイテルパラツシュからだ。

「もうすぐクラニウム中枢だ。貴方には。感謝している…嬉しかったよ」

彼女は…ウイン・D・ファンション。同業者であり、今回の依頼主だ。わざわざそんなこと言わなくても良いだろうに…そう思いながらも彼女の実直な性格を思うと、自然と表情が柔らかくなる。

「…別に気にしなくて良いですよ。俺も、企業連やり口は気に食わなかったし。問題ないです」

史上最悪と言っているいい反動戦力、ORCA旅団に対する企業連の行動は…黙認。開戦当初から暫くは躍起になつて排除に掛かったものだが…ここに来て、いきなりの黙認だ。しかもカリードを通して全リンクスにまで徹底させる念の入りよう…ORCAと企業連の間で何かしらの取引があったこと位は容易に想像できる。

…ヘッドが出る。

「金に目の眩んだ企業の馬鹿連中や、俺達みたいに好きに命の切り売りやつてる大馬鹿どもは、戦つて戦つて戦つて…そんなもつて好きに死ねばいい。」

どうせ、好きで命削って戦ってるんだ。悔いなんて無いだろ。

ま、戦うしか能が無いってのもあるかもしれないけど、俺の場合。だが、そうじゃない奴等は？

…報われないだろ。巻き込まれて犠牲になっただってんじや。

「それに…感謝なら逆にこっちがしたいくらいですよ」

『大した管理者だ。偉そうに、非戦闘員を守る、そんな格好すらつけれないか』

ローデイさんから聞いた、ウインさんが吐き捨てた言葉。余程企業のやり口が気に食わなかつたんだろう。

彼女らしいといえば彼女らしいが…独立傭兵の俺と違い、彼女は企業お抱えのリンクスで、インテリオル・ユニン…いや、ランク1なき今実質カロードの現行最高戦力と言ってもいい。そんな彼女が企業からの通達を無視して、ここにいる。企業への造反と捉えられかねない、この行動。

それがどういう意味をもつのか…馬鹿な俺だっけさすがに理解できる。

だからこそ、信用できるし、感謝したい。パートナーに俺を選んでくれたことに。

信用できる独立傭兵なら俺よりもランクが上位で経験が豊富な上にウインさんにぞっこんな、ロイさんだっけ良かった筈だ。…てか、あの人の場合、依頼がなくてもウインさんが出るって話を聞けば、何も言わなくても駆けつけそうだけど。

「何て言っただって、あの美人で腕が立つことで有名なウイン・D・ファインション直々にデートのお誘い…断ったらロイさんに睨まれそうだ」
流星に素直に伝えるのは若干気恥ずかしいから、おどけてて伝えた。一応言っておくが、嘘はいつてない。の、だが…。

「……………」

あれ？え？

返事が…冗談で言ったんだけど…何も言われないと滑ったみたいで…って言うか、ひよつとして怒ってる？

「…フツ」

俺の動揺してる雰囲気通信越しに感じたのか、彼女は満足そうに笑うとまた進み始めた。慌てて俺もその後に着いていく。

やがて、視界が開けると俺達を待ち構えていたように佇む、二機のネクストがいた。対照的な黒と白の二機。

黒いネクストは逆間接で、武装から、空戦メインの中近距離の射撃型だと予想できる。

白いネクストは…俺と同じAALYAHベースで、レーザーブレードと背面に装備した追加ブースター。超近接戦闘特化型だろう。油断すれば…恐らく、一気に装甲を持っていかれるだろう。しかもあのレーザーブレード…やっぱMOONLIGHTじゃねえか!?

ヤバい、悪夢が…ラインアークでの悪夢が…と、兎に角油断できない相手だ。

だが。

それでも。特に、俺の意識は黒い逆間接に意識が向いていた。あれには…ORCA旅団長、マクシミリアン・テルミドールが搭乗している筈だ。

黒いネクストに俺が意識を向けていると…オープンチャンネルで俺のナイトレイドとレイテルパラッシュに通信が入る。

「お前たち…やはり、腐っては生きられぬか」

どうやら、ウインさんだけでなく、俺が来る事も予想通りだったらしい。

…まあ、ここ暫くで変に名前が売れたからなあ…俺も。スピリット・オブ・マザーウィルを破壊したり、ラインアークでランク1のオツツダルヴァさん…いや、オツツダルヴァと協同したり…あの時は厳しかったなあ。何せ、ホワイト・グリントをオツツダルヴァと協力して倒したと思ったら、オツツダルヴァのステイシスもあの赤いAALIIYAHにメインブースターを壊されて沈んだからなあ…。

…何より彼女の赤いAALIIYAHベースは怖かった。ガチで。話が逸れてしまったが、有名になったことに加えて、何度か協同したこともあるんだ。俺が来る事を予測出来ても不思議じゃない。

ラインアークでの下らない演出で、彼女と一騎打ちするはめになって俺が味わったあの恐怖。その借りも含めて…ここで返す。

覚悟しろ、テルミドール。

…いや、オツツダルヴァ。

プロローグ―chapter 2―

「これで、ようやくクローズ・プランも最終段階か」

崩れ落ちるアンサラを尻目にそう呟く。全く、あんなものを作り出して企業の連中は何を考えてるのか…理解出来ない。もとい理解したくもない。それだけORCAを恐れているんだろうケド…それで、更に地上を汚染するしか能の無いデカブツを造り上げるとか。いや、確かにあの戦闘力は脅威ではある…それ以上に、周囲に与える汚染が尋常でじゃない。全く、度がたいなあ…企業の連中も。挙げ句には、そこまでして造り上げたアンサラも私に落とされる始末。良い気味だ。

まあ、けど。これでようやく企業の能無し共も静観に移るだろう。テルミドールとメルツエルが何かしら企んでいる様だった。…全く、あの時はアイツら良い顔してたからな。

企業の能無し共にはお悔やみ申し上げる。ざまあみろ。

ガレージに着いて粗方機体の修理と補給を済ませ、何日か経った後だった。そのメールが届いたのは。

送り主はメルツエル。ORCA旅団自慢の参謀殿だ。

「なんだ…メルツエルから…？ 珍しい…てか、アイツはヴァオーとBIGBOXに向かって落とされたんじゃないやなかったっけ？ 生きてたのか…？」

そう、確かあの喧しい事としぶとい事が取り柄の単純馬鹿をパートナーに、私とほぼ同じタイミングで出撃してBIGBOXに向かった。そこで、ウイン・D・ファンシヨンと何かと因縁のある、あの青いAALIYAHを迎え撃ち、BIGBOXを墓標に果てた筈だが。あのクール…と言うか、行きすぎて機械人形と揶揄される男に遺書な

んて書くような殊勝な心掛けがあるとは思えない。

…まあ、あの何処までも行きすぎた智謀と冷徹さの奥には何か熱いものを隠していたけど。ま、それが無きや人なんてのは着いてこない…アイツのそんなところはそれなりに気に入ってたし。

取り敢えず、メールを確認してみよう。まずはそれからだ。

『カラードのリンクス。マクシミリアン・テルミドールだ』

…あれ？

メルツエルからのメールじゃないの？

おかしい。

おかしいところが多すぎる。何でわざわざメルツエルがこんなメールを？

テルミドールが頼んだのか…いや、それはない。回りくどいし、そもそも死地に向かった人間に頼むとか、確実性に欠ける。

そして、次に気になるのはテルミドールの口調だ。

いつも通りのメールの筈…だけど、何処かおかしい。コイツ、普段はもつとこう、芝居がかったような…少なくとも、こんな神妙に話す様なヤツでは無い筈だが。

取り敢えず、疑問に思いながらも続きに耳を傾ける。

『君がこれを聞いているのであれば、私はすでに死亡している。恐らくは、アルテリア・クラニウムに倒れたのだろう』

…は？

今この馬鹿…いや、大馬鹿野郎何て言った？

『メルツエルも、BIGBOXから生きて戻れまい。ORCAは、君一人になったということだ』

……………。

良くできた冗談だな。笑えないが。

『頼む。私に替わり、クラニウムを制圧してくれ。』

クラニウムが停止すれば、クレイドルは最後の支えを失い、全ての人は大地に帰る。衛星軌道掃射砲はクレイドルを支えたエネルギーを得て、アサルト・セルを精算し宇宙への途を切り開くだろう。

全てを君に託す。

全ての人類と、共に戦ったORCAの戦士達のために』

ははは…そうか、そう言うことか。メルツエルのお節介焼きめ。B I G B O Xで果てる前にタイマーをセットして今日届くようにしたわけか。ははは、コイツめ、生前にこんなお茶目な面をもつと発揮してれば、もつと親しまれただろうに。信用は絶大だったし、勿体ないことをしたものだ。まあ、最も。あの、単純馬鹿なヴァオーは単純馬鹿なりにメルツエルのこんな面にも気付いてたのかもしれないケド。私は御免だが。あの暑苦しい単純馬鹿に懷かれて付きまとわれるのは。鬱陶しいことこの上無いだろ。

……………。

ははは…しかしコイツら…

……………

ホントに…

この……………。

「大馬鹿野郎共がつ!!」

知らず知らずのうちについ盛大に怒声を放ってしまったが、しようがない事だと思う。

…私も、もうヴァオーの事を単純馬鹿とは言えないか？

つい目の前の端末を全力で叩き潰してしまったじゃないか。私は端末をこれしか持ってないんだけどな。何処に損害賠償請求を叩き付けるか。

そうだ。テルミドールと真改からぼったくろう。

「待ってろよ……この大馬鹿ども……！」

不幸なトラブルでお亡くなりになった自分の端末を放置して、凄まじい怒気を放ちながら私は格納庫に続く通路を駆ける。ガレージに着くと、あの人の残したパーツで組んだ自分の機体に急いで飛び込み、機体を起動させる。システムチェックは飛びながらやれば良い。

：隔壁が開くまで待っていられるか。右肩に装備した軽量グレネードを隔壁にぶちこみ、即座にQBを起動させ、左腕に装備したMONLIGHTで隔壁を斬り開き、そのままOBを起動。茶褐色の汚染された空を、OBの翼を広げて進む。

その姿は。

まるで血に濡れながらも羽ばたく鳥の如く。

「最後に敗れる…それが定めか。だが、心しておけ。お前たちの懦弱な発想が、人類を壊死させるのだと…！」

レイレナード系のパーツで組まれた黒い逆間接の機体——アンスングから、流れるテルミドールの無念…そして、憤りに満ちた、最期の呪詛。

向けられたのは中破した状態のレイテルパラッシュとナイトレイド。

「人類など…何処にもいないさ、オツツダルヴァ…」

「人類なんて、大層なモノに目が行き過ぎたんだよ…アンタ」

そう答える二人の言葉が持つ意味は、大体同じ意味を持つのだろう。

「ふん、人類の前に、そこに生きる人々を、思う、か…まあ、良い」

息も切れ切れにテルミドールと呼ばれた男はそう呟く。既に機体は完全に停止している。呟いた言葉は誰にも届いていない。

そして、直にマクシミリアン・テルミドールとしてその人生を終えるだろう。

「人を、軽く見た報い…それは、私にこそ相応しいのだから。だが…」

全てを託す事になった少女の事を思い出す。彼女は彼とは違い、ヒトを甘く見てはいない。その上、人類の行く末など、どうでも良さそうに語っていたのを思い出す。

『は？ ORCAに入った理由？ なに、アンタ馬鹿なの？ 間拔けなの？ 死ぬの？ 普通、誘った後に聞いてくるかね？ まあイイケド。』

私は、汚染を払げる金儲け主義な上に何かと直ぐに保身に走る企業の能無し連中も、汚染から逃げながら呑気に空を飛んで汚染を降り蒔いてる脳ミソお花畑な連中も、汚染に怯えて縮こまつてる地上の連中も気に食わないだけ。ラインアークは見所あると思っただけどねー。ありやもうダメだわ。

ドイツもコイツも救われない。闘うことから逃げてさー。闘わなきゃ明日なんて掴めないってのに。まあ、自分の憤り晴らす為に適当に依頼受けてた私も私だけどねー。

と、話が逸れちゃったかね？ まー、楽しそうだったから、かな。：オイオイ、何でそこで微妙な顔をするかね。これでも褒めてるんだけど。僅かな数のリンクスで企業に反旗翻すとか、良い度胸してるじゃん？ まあ、まずはそんなとこかな』

——まずは？

『そ、まずは。クローズ・プランだっけ、ORCAが目指してるのは。それを聞いたたら余計に心踊っちゃってさ。宇宙への道を切り開くとか。馬鹿見たいって言うか…気付いてる？』

アンタら人類の黄金の時代のため、とか御大層な事を抜かしてるけど、語ってる時はまるで、夢に恋するガキ見たいに目を輝かしちゃってさー♪ そう言う馬鹿は嫌いじゃないよ』

——ば、馬鹿？

『あははは、心外だって顔してるねー。ま、でも私も満更じゃないよ。宇宙への道を切り開くってのは。だって、絶対楽しいよ。宇宙へ行けるってなったら——キット・闘いになる。ドイツもコイツも、躍起に

なつて宇宙へいこうとするでしょ。本気になつてね。それが楽しみ
でしょうがない』

——もしかしたら、争つてる余裕なんて無いかもしれないぞ？ む
しろ、クレイドルを地上に還すことで、人類は甚大なダメージを負う
事になるだろう…。それでも、君は…。

『ハア？ 今さら何を言つてるのかね、この馬鹿テルミは。そりや、確
かに少くない人は死ぬだろうし、闘う覚悟すら持つてない、持つてない
様な…ガキが死ぬのは、まあ、後味悪いケドさ…それも踏まえて、そ
れでも行動起こしてるんだろ、私達は。それに、まあまあ割かし生き
残るでしょ。何だかんだで。人つて意外としぶとくて生き汚ないし。
苛酷な環境に放り込まれて、それでもしぶとく生き残つた連中から、
また面白いヤツも出てくるでしょ。…そ、それに』

——それに？

『乗り掛かった船だし。途中下車とかあり得ないし。ま、まあ、それな
りに感謝してるし？ アンタらには…今まで殆ど独りでやつて来
たつて言うか…まあ…アンタらの事はそれなりに気に入つてるし』
『ほう？ これは珍しいモノが見れたな。お前がそんなことを言うとは。
…私の見識もまだまだということか』

『ハッハー！ ハッハハッハーッ！ オメエ意外と可愛らしいところ
もあるじゃねえか！ まあ、コイツの言う通り今さらだぜ、テルミ
ドオオオオール！』

『うるさい、この単純馬鹿！ メルツエルもニヤニヤしながらこつち
見るな！』

『おうおう、柄にもなく照れておるわ。お前さんのような小娘に、膨
れっ面など似合わんよ。どれ、飴玉でもやるからとつとと機嫌を直す
がよいよ』

『フッフ、飴玉とは…侮られたものだな、お前も。銀翁、飴玉よりも頭

の一つでも撫でてやったらどうだ？ キットその方が』

『このクソジジイ、子供扱いするんじゃないやねー！ ジュリアスも調子に乗るな！』

『フフ：彼女も彼らにかかっては形無しということでしょう。全く、彼女のギャップも恐ろしい』

『まあ、たまにはこんなのも、悪くないかもしれないなあ。なかなか良いぜ、首輪付き』

『彼女の戦闘狂ぶりにも飽きてきたところだ。ちょうど良い』

『よろしい。それでは今日はスイーツカーニバルと洒落こみましょう！』

『だあああああああああああまああまあ！ くそ、黙れ黙れ黙れエー……！ こうなったらお前ら全員シユミレーターで纏めて黙らしてやる！』

『……くく、愉快……』

『『『『『『『真改が喋った!? しかも笑ってる、だと……!!』』』』』』』』』

——…君は何のために闘っている？

『うるせえ、この馬鹿阿呆脳細胞死滅テルミが！ テメエのせいで大変な事になったでしょうが…全く。私のため。ただ、私が生きる今のために。他に理由なんかあるわきや無いでしょ。私が闘う理由を、私以外の誰かになんて、くれてやるもんか…ぶっっちゃけ、アンタもそうでしょ？ テルミドール。さて、質問は終了？ 満足した？

じゃあ、満足したところで…ちよつとシユミレーターで
プ・チ・殺・し・確・定・ね
オハナシシヨウカ♪』

(ああ、彼女なら…きつと叶えてくれるだろう。切り開いてくれるだろう。宇宙への道を、人類の未来を。ORCAの…夢を)

不安はない。不服もない。不足など、彼女にあらうものか、と…消え行く意識のなかでテルミドールは思う。

何故なら。

(もはや、彼女が、彼女こそが、ORCAだ。ORCAであり…)「リンクス、その名は…彼女に、こそ、相応し、い…」

そして、テルミドールの意識は闇に沈んだ。

「テルミドオオオオオール！ 真カアアアアイ！」

「ッ！ やっぱり来たか…」

「…そうか…貴様も、人類のためには人の死を厭わないか。ならば自分で、死を実践して見せろ！ テルミドールと同じようにな！」

突然、クラニアム中枢に響く声。

外部スピーカーから放たれた言葉を追うように、赤い鳥が翼をしまいくラニアム中枢に降り立つ。

ラインアーク防衛戦にて撃破されたホワイト・グリント、そして同ミッションにて手酷いダメージを受けたかつての愛機のパーツ。その二つを流用し構成された深紅のホワイトグリント。

名をグリント・リヴァイヴ。

「…そっかあ。結局、テルミドールも真改も先に逝っちゃったか。そっかそっか。私を待てばよかったのに。大馬鹿だよなー、二人とも」

来たときが嘘のような静かな態度。嵐の前を思わせる静けさ。

「ああ、んで、何だっけ？ 『死を実演して見せろ、テルミドールと同じように』だっけ？ 残念。そりゃ、無理だ」

言葉と共にグリント・リヴァイヴに構えを取らせ、QB。グリント・リヴァイヴがいた位置を双発型ハイレーザーキャノンのレーザーが焼く。続いて、移動したグリント・リヴァイヴの後を追うようにナイ

トレイドが接近、右背部に装備された四連装チェーガンと左手のオーメル制アサルトライフル、肩のスラッグ弾を発射する特殊兵装の一斉射。

(チツ！ 流石に避けきれ無いか…なら)

戦闘に特化した思考は高速で判断を下し、回避するよりも前進、ナイトレイドの横を被弾覚悟で通り抜ける。

「ツ！…まずは…!!」

決して少なくは無いダメージを負いながらも、放たれた凶弾の嵐を抜ける事に成功する。彼女の狙いは…。

「まずはオマエからだ！ウイン・D・ファンション！」

更にQBを起動。レーザーライフルとパルスガンで迎撃してくるが無視。MOONLIGHT起動。左腕を振りかぶると同時に菱形のレーザーブレード発信装置から色鮮やかな紫光の刃が形成される。一閃。

ブレードが命中し、レイテルパラツシュの装甲を大幅に抉り獲る。

「釣りは入らないよ！」

ブレードを受けて動きが硬直しているレイテルパラツシュに軽量グレネードを叩き込みつつ、レイテルパラツシュの側面に移動する様にQB。そこからMOONLIGHTでもう一閃。

「ツ！外した!?!」

「あまり私とレイテルパラツシュを舐めるな、小娘！」

レイテルパラツシュは後退しつつQT、背部に装備したハイレーザーキャノンの砲身をグリント・リヴァイヴに向けている。狙われたグリント・リヴァイヴは直ぐ様横にスライドする様にQBを起動させ回避…。

「俺の事も忘れないでくれよ、赤いの！」

「くツ…ああ！ もう！」

回避した先に吸い込まれる様に進む、殺意持った鋼の豪雨。流石にこれは直撃、PAを大幅に減衰させ、グリント・リヴァイヴの装甲に惨たらしい傷を残す。鋭い殺気と共にそれを叩き付けたのはナイトレイド。

「オマエの後だ！ これでも喰らつとけ！」

左背部のスラッグガン、右背部の軽量グレネードをナイトレイドに向けて大雑把な狙いをつけ連射。

「要らね…おぶっ!？」

グレネードを回避…したのは良かったが、回避したところにスラッグ弾を全身に諸に浴びて硬直。そこにグレネード弾の追加を受けて、衝撃から完全に機体が硬直。無防備な状態で攻撃を喰らい続ける。

(グレネードは弾切れか…)

ナイトレイドは後回しにする予定だったが、ここを好機と見て、グレネードをパージして右腕の大容量マシンガンに切り替え、ナイトレイドの中心に時計回りに移動しながら斉射を続ける。

「それ以上はやらせん！」

ナイトレイドの周囲を回る様に斉射を続けるグリント・リヴァイヴの横合いから、ハイレザーキャノンの直撃。グリント・リヴァイヴに甚大なダメージを与える。続けざまに好機と見たのか、レーザーの軌道を追うようにレイテルパラッシュが接近。ブレードで斬りかかる…だが。

「そんな浅い踏み込みで当たるかつ！ こちとら、真改とタイマン張ったことだってあんだよ！ 舐めるなあ！」

高度を上げるだけでそれをあつさりと回避し、その背後にマシンガンの銃弾を浴びせかけつつ、背部スラッグガンを収納、QBで接近して斬りかかる。

「アイツの踏み込みは…もつと深くて、もつと鋭い！ 私よりも！」

本来ならあるはずの手応えが無かった時に、ウインは自らの失敗を悟った。彼を見捨てて、冷静にレーザーキャノンやライフル等で削つていけば勝てた…いや、勝てる見込みもあつたかもしれない。

だが。

(自分で巻き込んでおきながら、彼を犠牲に生き残る…そんなこと、出来るものか)

それに、彼ならば。彼ならばきつと勝てるだろう。

何故なら、彼もラインアークの生き残りで、何処の企業にも属さないままに曲がらず、気高く、強く。それでいて、何者にも縛られない、今最も自由なリンクス。

そして、ウイン自身がいつしか弟の様に思っていた彼なら。

だが、それでもウインが一つだけ悔やむことがあるとすれば。

「すまない…結局、あなた任せだ…」

レーザーブレードの軌跡が、レイテルパラツシユの胴をなぞり…そこから上下に分かたれたレイテルパラツシユはその機能を停止させる。

(…スラッグガンはもう使えないか)

ハイレーザーキャノンの直撃を浴びたスラッグガンは、溶解して辛うじて原形を止めている程度。このままではデッドウェイトにしかなり得ないパージする。

続いて、左腕を露払いする様に振って、調子を確認する。

(結構無理させたけど、まだ行けそう)

「で？ いつまでそこで呆けてんの？ 敵討ちするってんなら付き合
うけど…闘う気が無いなら帰れ」

「…ク、クク…」

「…？ なに、シヨック過ぎて壊れた？」

「アハ、アハハハハハ！ あー、悪い。でも、そう言う事か。…俺も相
当壊れてるなあ…ああ、シヨックだったよ。ウインさんが逝つたの
に、涙一つ流せない俺にさ…なあ、アンタ。アンタは俺が憎くないの
か？」

「え？ アンタ馬鹿なの？ 憎くないわけ無いじゃん」

「今、仇獲るチャンスだったろ？」

「ああ、そう言う事？ だって仕方無いでしょ。アイツらはリンクスで
ORCAだし。私は闘わないヤツに興味ないし」

「そうか。なら、俺はリンクスだ」

グレネードの直撃で使い物にならない四連装チェーンガンを一
ジ。両手に持ったアサルトライフルAR—O700とMR—R10
2を構える。

「依頼は…完遂する」

「そう。なら、私は最後のORCA」

右手のMOTORCOBRAを構え、左腕はコアの後ろに隠すように半身になる。

「クローズ・プランは成就させる！」

二つの機体が爆ぜた。

ナイトレイドは距離を維持して、マシンガンの斜線から逃れる様に左へ。

グリント・リヴァイヴはそれを追うようにジグザグの軌道を描きながら前へ。

交わる銃弾と銃弾。これまでの激戦により二体はどちらも満身創痍。地道な削り合いならばナイトレイドに利

があるもの、グリント・リヴァイヴはその機動性にモノを言わせて懐に入り込めれば、至近での一撃必殺がある。

故に、どちらも互角であり、戦況は拮抗。

ただし、ともすれば些細な事から一気にどちらかに傾く事も否めない。

「思えば…アンタとは何かと因縁があったねえ！」

「始めて会ったのはラインアーク襲撃ミッションだったか!？」

「あの時はノーマルの余りの歯応えのなさにガツカリした！」

「俺は楽なミッションでホツとしたけど…なツ！」

ナイトレイドにグリント・リヴァイヴに接近、左腕を振りかぶる。

ナイトレイドはそれに合わせて左手に持ったアサルトライフルAR—O700を叩きつけ、後方に…ではなく、前方に向かってQBを発動し、その水力と機体重量全てを使って、グリント・リヴァイヴのその動きを止める。

「嘘言うなー！」

「オマエと一緒にするんじゃないよ、このツ！バトルジャンキー戦闘狂がツ！」

グリント・リヴァイヴの胴に蹴りを叩き込み、QBを使い距離を離す。

「ツ！ 似た者同士でしょ、マーセナリイ傭兵！」

「それからもアンタの噂は聞いた。カプラカンを墮としたんだってな！」

両手のアサルトライフルから放たれる、正確で激しい濃密な火線を張る。流石にそれは避けるきる事が叶わないのかある程度被弾している。

そう、ある程度。避けられないものは無理に避けず、致命となるものだけはキツチリと避けて。

その技量の高さに舌を巻く。

「そう言うアンタはマザーウイルを墮としたんだってねえ！ 私がカプラカン潰したのと殆ど同じタイミングで！」

なるべく無駄な回避を行わず、最短距離を駆ける。先程はライフルで防がれた。

ならば、と。

マシンガンを乱射しながら接近、マシンガンを振りかぶる。

流石のこれには面食らったのか、ヘッドパーツに直撃、ナイトレイドはその体勢を崩す。

「貫ったア！」

絶好の好機。

レーザーブレードの刺突をコクピットに向けて――

「まだだ！」

アサルトライフル二つを重ねて犠牲にして、その凶刃をすんでの所で阻む。その隙にQBも併用して全力で後退。

「またッ！でも!!」

ナイトレイドを追いかけて前進、もう一太刀――！

「甘い！」

後退しながら、肩に装備した散弾を打ち出す特殊兵装を起動。この兵装はロックオン出来ず、機体の真正面にしか弾をばら蒔けない。だが、今はかえって好都合だ。

「しまッー！」

咄嗟にマシンガンを盾に、QBも使って後退する。

盾にしたマシンガンのお陰で被害は微々たるものだが、マシンガン

はもう使え無いだろう。

グリント・リヴァイヴは使えなくなったマシンガンを放り捨て、ハンガーから小型のレーザーブレードを装備する。

見れば、ナイトレイドもハンガーからハンドガンを二丁取り出して装備している。

「…覚えてる？最後に会ったとき？」

「ああ、ラインアーク攻防戦の時だろ？あの時は俺はオツツダルヴァの僚機で」

「私はホワイト・グリントの僚機」

「あの時もこんな感じだったな」

「あの時はお互い、武器全部使えなくなって引き分けだったね」

グリント・リヴァイヴは前傾し、両手を翼のように拡げ。

「ああ、あの時はマジでビビった。怖かった。ソイツは今も変わらない」

ナイトレイドは重心を下げ、何時でも後退できるように。されどその銃身はグリント・リヴァイヴを捉えている。

「へえ…光栄だね。実は、私も怖くて仕方がない。今すぐ逃げ出したいくらいには」

「逃げてくれれば楽なんだけどな」

「また心にもない…」

「……………」

「恐いなあ…」

「ああ、怖い、ね…」

「それ以上に、負けるのが!!」

そして、場は再び動き出す。

グリント・リヴァイヴは今ままで最も鋭く、速い動きで翻弄しつつ距離を詰める。

「ドイツもコイツも！闘う事から逃げて！明日を掴もうともしないで！今日をなあなあで生きてる奴等が、気に食わない！」

グリント・リヴァイヴのブレードをQBを併用したバックステップ

で回避。肩部兵装起動——右方向へのQBで避けられる。

「戦えない人間が、戦いに巻き込まれるのを嫌う。それを気に食わないって言うのか、オマエはああああ！」

「狂ってるんだよー！」

「オマエも！俺^私も！この世界も!!」

QTを使い、横に逃げたグリント・リヴァイヴに銃口を向け、ダブルトリガー。グリント・リヴァイヴはQBで加速、左腕をコアの前で折り畳み、MOONLIGHTを盾にして真っ直ぐにナイトレイドへ突撃してくる。QBで後退しながら肩部兵装を起動——その時、彼の耳に届いた音。

まるで呼吸をするような、独特の起動音。

「オーバーロード・ブースト!?!」

ナイトレイドのモニターに映るのは、その翼を拡げ、被弾して甚大な損傷を負いながらも、決して止まらず、なお加速しながら近付いてくる——グリント^紅・リヴァイヴ^鳥。

「う、お、ああああああああアア！」

彼女は獣の様な咆哮を上げながら、残った右腕の軽量ブレードを全推力と機体重量の全てをのせて突き出す。

それは、ナイトレイドのコアに吸い込まれる様に命中し——

「わ、た、しの、勝ちだああああああア！」

「俺の…負けだ」

突き出されたレーザーブレードはコア表面の装甲を貪り喰う様に融解させながら進み、彼の最後の言葉ごと飲み込んでいった。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ…」

最後のOBを使った突撃はかなりの大博打だった。避けられたらそれまで。ぶっちゃけ特攻に近い。現に、グリント・リヴァイヴはナイトレイドを倒した後も勢いは止まらず、壁に激突して跳ね返され、2・3バウンドして漸く停止した。

我ながらよく生きてるものだと思う。生きてるって素晴らしい。

「うっ、ゲホッゲホッゲホッゲエッ！」
例え、あと少しの時間だとしても――。

「はあ、はあ、はあ……これで」

言うことを聞かない体を引きずって、どうにか全アルテリア送電施設のエネルギーを衛星軌道掃射砲、エーレンベルクへの供給が完了した。

流星はメルツエル印のシステムソフト、後は発射シークエンス完了まで勝手にやってくれる。…てか、あの衝撃で壊れないって、何気に凄いな。何製なんだ、か――

「ツッゲホッゲホッゲホッ、ゴボツ！」

口を抑えていた手の隙間から赤い雫が零れ、ビチャビチャと汚い音を鳴らしながら地面に落ちる。そろそろ、本格的にダメかな。

――まだ、まだあと少しだけ。

てか、さつきから何度も出してんだから、そろそろ出しきって、品切になってくれてもいいと思う。わりと苦しいし。痛いのは嫌いなんだよ。

『発射シークエンス完了。発射シークエンス完了…人類に、黄金の時代を』

ククク、アハハハ！

なあんだ、アイツにもこんなお茶目な所がちゃんとあるじゃないか…分かりにくいっての。そういうのもつとだしや良かったのに。

あー、なんだか眠くなってきた。

もう寝てもいいよね？

「おやすみ――」

それが、彼女がこの世界に残した、最後の言葉だった。

chapter 01—生まれ変わって

mission 1 どうしてこうなった？ ～ I S 学園初日 ～

…何でこんなことになった。

ああ、正直に言おう。最初は男の俺が I S を動かせるって聞いて心踊ったさ。だって、この世界で最高の兵器——要はあっちで言うネクスト見たいなものに乗れるって聞いて、心が踊らないわけない。

二つ前の席でキョドってる一夏も最初はそうだった筈だ。

ところが、今はあたふたオドオドして気が気じゃないって感じた。そうなるのも無理は無い。だって、クラスどころか全校探したって男は一夏と俺だけだ。

なんつーか、もう視線が痛い。動物園のパンダってのはこんな気分なのか…。ああ、ちなみに俺は動物園に行った時、パンダ以外にも色んな動物をジロジロ穴が開くくらい見たさ。だって、生前は生きた動物とかあんまり居なかったし。

「織斑くん。織斑一夏くんっ！」

「は、はいっ!？」

おいおい…確かにこの状況はキツイだろうが、先生の話くらいちゃんと聞けよ…涙目になってるじゃないか。ここにあの人が居たら、絶対殴られてるぞ、オマエ。

「あつ、あのっ！ 大声出してご免なさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

この人、本当に教師…てか、年上なんだろうか。やけに腰が低い…と言うか、弱気なだけなんだろうか？

まあ、素晴らしいモノをお持ちなのは認めるが。確かにあれは同年代には…って、考えてると目の前に座ってる女の子がこっちをイイ笑顔で振り返った…止めてくれ。その笑顔が怖くて堪らない。てか、心

でも読んだのかオマエ。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当？　本当ですか？　本当ですね？　や、約束ですよ。絶対ですよー！」

そこまで念を押さなくても……手まで取っちゃって、まあ……。しかし、一夏も良く悪目立ちするよなあ。そういう星の元にでも産まれたのか、コイツ。

お、一夏が立ってようやく自己紹介するみたいだな。……目が合ったが、俺は助けてやれないぞ。自己紹介くらい自力でどうにかしてくれ。頼むからそんな捨てられた子犬みたいな目でこっちを見るな。オマエのせいでまたこっちにも視線が戻ってきただろうが！

しかも……なんか、さつきより視線が熱い気がするのは気のせいかな？

「えー……、えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

いや、流星にそれはないだろ。うん、無い。

クラス中から『え？　それで終わりじゃないよね？』とか『もつと色々喋ってよ』的な視線が集中してるぞ、オマエに。俺の前に座ってるヤツなんかプルプル震えて笑いを堪えてるぞ。せめて趣味くらい言え。

お？　いきなり深呼吸してどうした？　やる気になったか？

「以上です」

ガタツ！　うわあ……クラスの殆どのやつがずっこけてるじゃねえか。

……いや、凄いな。やっぱオマエ大物だわ。感動した。前の奴なんか体が痙攣してるぞ。笑いこらえるの必死で。そのうち、笑い死ぬんじゃないかって位震えてるぞ。やっぱスゲーわ。オマエ。コイツをここまで追い詰めるとは。

「あ、あの……」

あーあ、なんかさつきより涙声になってるじゃないか……可哀想に。

と、思っていると目の前を高速で通りすぎる影が……って、あれ？　あの人は？

パアン！ 良い音がなったなあ。いや、それよりも。

「げえっ！ 信長!?!」

「ちーちゃん!」

「千冬さん!」

パアン!スカッ!スカッ!

「誰が弟六天魔王か! あと烏丸、学校では織斑先生と呼べ:良いな?」

いや、避けられたからってそんなに殺意剥き出しにしくなくても:まわりの子が脅えてますよ?

あー、しかし失敗したなあ。まわりからヒソヒソ『あの子たち:千冬様とどういう関係なのかしら?』とか何とか聞こえてくるし:災難だなあ。

「あ、織斑先生。もう、会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

おー、珍しく優しい声だ。あの半分でも一夏に向けてやったら良いのに。出来が悪い子ほど可愛いってヤツなんだろうか。しかし、一夏の奴も運が良いやら悪いやら。これで千冬さんと毎日会えるぞ。良かったな。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

えーと、山田先生の態度が:さつきと全然:いや、まさかね。はにかんだけど。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことは良く聴き、良く理解しろ。出来ないう者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いな」

うん、千冬さんが教えてくれるなら不安は無いな。何に関して教えるのかつてを理解してる。しかし:だ。

「キャーキャーキャー! 千冬様、本物の千冬様よ!」

「ずっとファンでした!」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです! 北九州から!」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

おい……こんな生徒ばつかで大丈夫なのか、IS学園……自分たちが何を扱うかちゃんと分かっているのかね……？

見れば、千冬さんも鬱陶しそうだ。まあ、無理もない。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

流石千冬さんだ。歯に衣着せぬ物言い、こう言う時は率直に言った方がいい。後で何か起こっては遅いわけだし。これだけ言われれば、流石に——と、思っていた時期が俺にもありました。

「きゃあああああつ！ お姉様！……もっと叱って！……罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

いや、もう色々ダメかも知れない、このクラス。

あと、最後の娘。悪い事は言わない。病院言ってこい。

しかし、まあ……ここまで周りがアレだと逆に落ち着いてくる。いや、もう呆れてモノも言えない的な意味で。

「で？ 挨拶もろくに出来ないのか、お前は？」

「いや、千冬姉。俺は——」

おい、まて一夏。それはさつき俺達が——。

と、考えている間に千冬さんの手は既に動いていた。痛そうだな、アレ。

パァン！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

見るからにシヨンボリしてるな、一夏の奴。まあ、些か理不尽に思えなくもないが……。

「え………？ 織斑くんって、あの千冬様の弟………？」

「ああっ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

この状況を見ると……千冬さんの気持ちも解らないでもない。人気だなあ……千冬さん。恐らく、みんな千冬さんの勇姿に憧れているんだ

ろうが：千冬さんはアイドルとかじゃ無いんだが。まあ、千冬さんだし、皆の認識の甘さもおいおい改善していつてくれるだろう。そうじゃなと身が持たない。：主に俺と一夏の身が。

「はあ：まあ良い。時間もあまり無い。自己紹介を続ける。次：烏丸」

俺の苗字が呼ばれたが：立たずに座っている。確かに俺の名字が呼ばれたが、呼ばれたのは俺じゃない。

このクラスには俺以外にも、烏丸と言う名字のヤツはもう一人いる。

：しかし、千冬さん。気持ちは分かるけど、俺の名字をそんなに嫌そうな顔で呼ばないで下さい。

目の前の席のソイツは、立ち上がるとゆつくりと一度教室を見回して、ニイツつと好戦的な笑顔を浮かべた。

「烏丸からすま織歌おるか。アライアンスのテストパイロット。特技は闘う事。趣味は闘う事と料理。好きなモノは闘う事と闘ってるヤツと食べること。嫌いなものは闘わないヤツ。以上」

クラス一同唾然としている。それはそうだろう：こんな自己紹介じゃ。ある意味、一夏以上にインパクトがある。てか、本当にオマエは生前から変わらないな！

「ああ、そうだ。烏丸はこのクラスにもう一人居るから、織歌って呼んで」

言い残した事を言い終わると、どかっと言う音を立てて織歌は席についた。

あーあ：山田先生がまたおろおろしてるよ。無理もないか。千冬さんも頭を押さえてるし。呼ばれて無いが：仕方ない。時間も押してるみたいだし、手早く俺の自己紹介を終わらせて次に回してしまおう。

「えー…。今の自己紹介にあった、もう一人の烏丸です。名前は絆きずな。紛らわしいので、俺も名前で呼んでください。呼び方は任せます。趣味は料理と体を動かすこと。ISを動かせた事を最大限活用できたらと思います。皆さん、一年間よろしくお願いします」

拝啓。カラードに所属するリンクスと仲介人の皆様、お元気でしょうか？

私は、ネクストのコクピットで蒸発したと思ったら、気がついたらこの世界で第二の人生を得ることとなりました。挙げ句、よりにもよって…ええ、よりにもよって、私を殺した張本人である、ORCAのリンクスが双子の妹です。何を言っているか理解に苦しむ事と思いますが、私はこちらでも元気に暮らしております――。

mission2 どうしてこうなった？く美しき
過去く

——眩しい。

意識を失ってから最初に思った事はそれだった。

眩し過ぎて目も開けられない。それどころか、体が思うように動か
せない。

意識もあまりハッキリしない。曖昧で、霞がかかっているような。

——私は、誰だ？

鈍重な意識の中、必死になって自分の事、何者であるかを思い出そ
うとする。

『…おるか？』

その時、聞き覚えのある単語が聞こえてきた。

おるか——ORCA。

史上最大の反動勢力、ORCA旅団。

そうだ、私は最後のORCA——

それを思い出した途端、自分が何者であったか急速に思い出して
いく。と、同時に、ある事実をも思い出す。

自分は、死んだはずでは無かったのか——？

自分の体の事は自分が一番良く分かる——とまでは言わないが、あ
の時の私の体の状態は、深い医学知識を持っていない私でも、い
つ死んでもおかしくないという重傷だった筈だ。少なく見積もって
も複数箇所複雑骨折に内蔵破裂はしていただろう。

なら、何で私は生きてる——？

相変わらず目は開けれれない上に、何故か体は思うように動かない
挙げ句、ひどく疲労しているように感じる。

それでも、今自分が置かれている状況を把握しようと、使える感覚
を総動員して慎重に現状を確認する。

…人の気配？

それも一人や二人では無く、複数。

ただ、それでも何となく、自分の周りに複数の人の気配があるのが分かった。

…捕まったのか、私は。

捕まった挙げ句、生かされている——それは、私にとって屈辱ではない。

冗談じゃない。

動きの鈍い頭を総動員して、脱出の算段を考えようとしたところで、また声が聞こえてきた。

『そう——おるか。歌を織るって書いて、織歌。この子にピッタリな——良い名前だと思わない？ 絆が皆と友達になって、その中で織歌が歌を織って絆を深めて——フフ、ちよつと恥ずかしいかしら？』

『いや、綺麗な、良い名前じゃないか。うん、きつと将来は君に似た、綺麗で——優しくて思いやりのある、歌の好きな素敵 な子になるよ。うん、君は今日から——織歌だ』

織——歌？

それが——私の名前？

え？ それってどういう…

絆ってダレ？

『ほら——織歌、パパですよ。フフフ、ほら、絆。妹の織歌ちゃんだよ。織歌ちゃん、こっちは織歌ちゃんのお兄ちゃん絆だよ』

お兄ちゃん…？

え、意味が…アレ、眠たく、なって…

『ウフフ、まだ分かる分けないでしょ？ …あら、二人ともオネムみたい。ほーら、よしよし。…あいむしんかーとうとうとうとうく』

綺麗な…優しい歌声…

だけど…

『…相変わらず君の歌声は綺麗だけど、子守唄にそのチョイスは流石の僕もどうかと思うよ？』

それから幾月、幾年の年月が経った。

私：私こと、烏丸　織歌は五歳になった。絆と呼ばれる少年も私と同じように。

私たちは俗に言う双子——それも、世にも数例の事案しか報告されていない、一卵性双生児の異性双生児と言うらしい。何でも、親がターナー症候群がどうだのXY染色体がXXYがどうこうだの：うん、正直良くわかってない。まあ、私たちに関しては珍しい事例の双子だと理解してればそれで十分だと思う。私たちは問題なく健康に育っているし、両親も至って健康。問題が無いなら、そんなこと気にするだけ無駄でしょ。

さて、前述にもある通り——私は別の世界から、この世界へと転生を果たした：らしい。

らしいと言うのは、どういう事になってるのか、未だに良く解らないから。

自分である程度動けるようになってからは、父親のパソコンを黙って使って色々調べた。勿論、気付かれないように。

『国家解体戦争』『リンクス戦争』『リンクス』『ネクスト』『ACC』『コジマ粒子』『クレイドル』『ORCA旅団』——どの単語も、私がよく知った意味でのHITはゼロ。

それでようやく、私はまるで別の世界に来てしまった事を、今更ながら理解して、認めた。

この世界での暮らしに——自分の両親を『お母さん』『お父さん』と呼ぶことにまるで抵抗を感じなくなるくらいに——馴れてから、ふと、こう思った事もある。

この記憶は、全て私の妄想では無いか——と。

だが、その理性が出そうとする結論を、私の心が、魂が否定をする。思い出そうとすれば、何時でもありありと鮮明に思い出せる。

汚染され、悉くの命が消えかけている空と大地。

その空を巨大な鋼に搭乗し、羽ばたく自分を。

赤々と紅蓮の炎が燃え盛り、鼻に付く焼け焦げる鋼の匂い、まるで

咽るような、戦場独特の空気。

その中で闘争の高揚感に身を任せ、神経を研ぎ澄まし、立ち向かってくる悉くを打ち倒し、討ち滅ぼし。鋼の残骸の上で、生の実感に、勝利の愉悦に浸る自分を。

最後のORCAとして戦い抜いた自分を——それが嘘である筈が無いと、偽りなものである筈が無いと私の在り方が、私の本能が、何よりかつての私自身が否定する。

だから私は肯定する。あの世界を。あの世界で生きた、私自身を。

まあ、こんな年齢でこんな事を考えられる時点で普通におかしな事だし。当然、両親にもキズナにも言うつもりなんて更々無い。…この年齢じゃ無くても、邪気眼とか中二病呼ばわりされるのは勘弁して欲しい。と、言うか、こんなおかしな事宣ったら、まず心配してくるだろうな、あのお人好しの両親とキズナは。それでもって、お脳の病院直行コース確定だろう。自分の娘がそんなことを言い出したら、きつとアンタだってそうする。私だってそうする——って、話がそれた。えーと…何？ 大分落ち着いてるって？

あゝ、まあ確かに生まれ落ちた時から暫くは戸惑った。何せ、私は元の世界じゃ十六才くらいの美少女（ここ重要）…だった筈だ。だった筈…と言うのも、物心着いたときは既に両親何て居なかったし、何よりあんな世界じゃ親の居ない子どもなんて、日々を生きるだけで手一杯。今日が何日で、何日生き残れたか、なーんてイチイチ数えていられるか。

また話がそれたね。

まあ、そんな美少女の私が、気付いたらこんなちんちくりんになってるんだ。戸惑いもするって。けどまあ…素材は十分過ぎるくらいイイツ！と思う。

客観的に見ると…大体こんな感じ。

色素の薄い白い肌

鳥の濡れ羽色な、艶やかな黒髪

整った目鼻立ちに、ちよつとキツメのつり目

赤み掛かった、ルビーの様な光彩

うん、これは今はチンチクリンだけど、将来が楽し——え？

そう言う事じゃ無い……って？

うーん……まあしようがなじゃん？

別世界に来て転生しちゃったんだし。どうしようも出来ないし。

……ふと思っただけけど、転移が先なのか転生が先なのか……どっちなんだろ？

まあ、どちらにせよどうしようも無いんだし、そしたら堪能するか無いでしょ？

汚染されてない空。美味しい御飯。見て触れて嗅いで聞いて味わって、感じる何もかもが新鮮でしようがない。これを堪能しないってなったらバチがあたる。

闘いが無いってのは退屈だけど、これはこれで良いかもしれない。

何よりも——

「織歌、キズナー。御飯よー、手を洗ってらっしゃーい」

優しい両親。

「はーい！」

「じゃあ、行こうか。オルカ」

「うん。そうしよ、キズナ」

お人好しで面倒見の良い、優しいキズナ^絆。

こんなのも、悪くない。

因みに、私は絆の事を兄と呼ぶつもりはない——私よりほんの少しだけ先に取り上げられた程度で、兄と認めるものか、認められるか。

何より——私の芯の部分が、何故かキズナを兄と呼ぶことを、全力で拒否している。——何でだろうね？

ま、取り敢えず。

ORCAの皆——

「織歌は、元気にやってるよ」

「織歌は、元気にやってるよ」

オルカはたまにこういうことがある。空を——遠くを見つめて、こ
うやって悲しそうに何かを呟く。そういう時のオルカは決まって年
不相応に大人びていて、どこか——儂くて。放って置いたら何処かに
消えてしまいそうで。

だから僕は——俺は、

「オルカ。なにブーツとしてるの？ 御飯冷めちゃうから、早く行こ
う？」

と、何だかんだ理由をつけては手を繋いで、歩き出すんだ。何を考
えているのかは分からないが、オルカが迷子にならないように。

全く、オルカは手のかかる——可愛いヤツだ、とは思う。普段はは
しやぎ回って元気な癖に、ちよつとした拍子にこんな顔をしたり——
全く、見えて飽きない。こう言うのを放って置けないと言うのだろう
か…？

しかし、何故かオルカの事は妹としてと言うか…オルカに対して兄
貴ぶる気にはなれない。兄妹と思えないと言うか…なんと言うか。

因みに断っておくが、俺は！ 断じて！ ロリコンやシスコンじゃ
ない。断じて違う。その気は無い。

ただ、なんと言ったら良いのか…俺が俺であるための根つこの部
分。無意識に近い部分が全力で警告をして拒絶してくる…とでも言
えばいいのだろうか？

こいつが俺の兄妹とか…うん、何だろう。今ものすごい悪寒が背筋
に走った。

可愛いヤツなんだけど…何でだ？

そう疑問に思いながらも手を洗って、テーブルに座る。

「あいむしんかくとうとうとうとく♪ フッフ、お待ちどうさま。
さ、いただきますしましょ？」

母さんが調子良さそうに歌いながら、料理をテーブルの上に置く。

…いや、前々から思ったけど母さんの選曲、ちよつと片寄りすぎじゃ
ないか？

しかも、チヨイスがちよつとずれてると言うか：いや、まあ。うん、母さんの歌声は綺麗で落ち着くから好きなんだけど。

今日のお昼は大皿に山のように盛られたスパゲッティ——カルボナーラだ。湯気を立てて美味しそうだ。

見れば、オルカは待つてましたとばかりに目を閉じて両手を合わせている。待たせちゃいけないな。俺も——

「ウフフ、それじゃ二人とも。はい」

「「いただきますー！」」

すると、俺とオルカはほぼ同時、猛スピードで大皿に乗っているターゲットにロックオン。奪い合う様に：いや、表現が適切じゃなかった。完全に奪い合って、自分の皿にこれでもかとカルボナーラを取り分ける。

別に、俺もオルカも普段ろくに食べて無いつて言う訳じゃない。

ただ、俺の場合。

生前の記憶がある俺としては、天然食材の料理なんて決して手を出せない高級料理で、とんでもないご馳走だつてことだ。こんな旨いものを遠慮するなんて、材料と前世のご同輩に対する冒瀆だ。特にエイさんなんか：アレ？

エイさんの境遇思い出したら：何だろう、やけに塩の味がする。悲しい塩の味が。

ああ、ダメだ。思い出したら泣けてきた。気分を変えよう。俺は食べる手を少し止めて、母さんを見る。

母さんは自分が食べる分だけ、皿に取り分けて食べながら、自分の作った料理にがつつく俺とオルカを、時おり手を止めては楽しそうに眺めている。

母さん：か。

最初は戸惑ったこの言葉も、今ではすっかり馴染んだように思う。何せ、生前の俺は両親の顔を知らない。気付いた時にはアスピナのラボにいて、ネクストを動かす訓練をしていたから。まあ、ネクストに乗れる様になったら色々細工をして、ラボを壊滅させて脱走したけどさ。それから、暫くは潜伏しつつアスピナからかっぱらったネクスト

を、足がつかないよう裏ルートで売っぱらって中古のAALYAHを買って、リンクスになったわけだけど。

あのアスピナのラボの事ははつきり言っているいい思い出なんて無いけど、リンクスになって良かったと思ってる。尊敬できる人にも一杯出会えたし。

自分を兄の様にしたってくれた、年若い令嬢。

粗製と言われながらも、経験と技術でそれを補った古参オリジナルの傭兵。

高貴なる者の務めを体現したかのような在り方をする、誇り高い騎士。

独立傭兵でありながら、その実力を高く評価された、便りになる兄貴分。

堅牢な装甲と、一撃必殺の大鑑巨砲。決して揺るがない大樹のような社長。

何かと共同する事が多かった、やけに自分を気に入ってくれていた女傑。

貧困に喘ぎながらも、自分にできる精一杯の援護してくれた女性。よくつるんでいた、自信過剰なお調子者と、向いていないと思いがらもリンクスをであろうとした、愛すべきバカたち。

そして——
決して自分を曲げず、自分の矜持を守り通した誇り高い、俺が姉のように慕っていた——

あの世界であったことも、まんざら悪い事ばかりじゃない。

だから、俺は絶対忘れない。妄想だとも思わない。

それが唯一、この世界に生まれ変わってしまった俺にできる、あの人たちへの恩返しで、俺の決めた俺の在り方だから。

だから——

今は食べよう。母さんの料理を。味わって、食べよう。あの人たちの分まで。

それで——今度こそ。今度こそ完遂しよう。

この世界は今のところ平和だけど…何があっても完遂しよう。

俺が、俺で、俺に依頼したミッションくらいは。

ただ、やっぱり依頼したミッションの中にオルカの名前は入ってない…なんか、俺が実はかなり薄情な人間では無いのかと勘ぐってしまった。

いくら考えても答は出てこない。

「…なんでだろ?」

「ん? どうかしたの、キズナ? 食べないなら貰って良い?」

オルカ、まだ食べるのか…そんな小さい体の何処にそんなに入るんだろう?

オルカは食い意地張ってるなあ…俺と違って。全く、可愛いヤツめ。

「ああ、ゴメンゴメン。ちよつと考え事してて…勿論食べるよ」

「…変なキズナ」

「…ウフフフ」

「…どうしたの、母さん?」

「いえ、ね…なんか二人を見てたら兄妹って言うよりなんだか…小さな新婚さん見たいで。ウフフフ…でも、ダメよ?」

「何が!? それでもって何処が!? こんな食い意地張ってるのこっちがゴメンだよ!」

オルカが俺のお嫁さん…何だろ、背筋に物凄い寒気が…。見ればオルカも肩を抱いて身を震わせてる。

全く、変な所で似てるよなあ、俺たち。

mission3 どうしてこうなった？　微笑ましい過去　

さて、それから数カ月の月日が流れ――

俺達は小学校に入学した。

新たな年、新たな環境。

学校なんて言う初めて経験する集団生活。心のなかは期待と不安で半々：いや、不安の方が大きかった。

だって、考えても見てほしい。回りは同年代の子供ばかり――対して、こつちは見た目は同年齢だが、精神年齢はそろそろ二十歳になつても不思議じゃない。

何より俺の場合、俺の人生、生前合わせても学校生活どころか、学生であった試しもない。

それで不安と期待、どちらが大きいか聞かれたら、誰だって不安に思はずだ。

だが――

実際に入学してみたならなんて事なく、クラスとも早々に打ち解けて友達も増えた。

織斑一夏とは入学初日に意気投合し、俺もオルカもすぐに仲良くなれた。一夏に両親は居ないが、そんな現実をもとせず、真っ直ぐで裏表の無い良いヤツだ。実質、クラスでの一夏の受けは悪くない。

これには一夏の姉――千冬さんの影響が大きいだろう。

千冬さんは唯一の肉親である一夏を、学生の身でありながら引き取り、一夏が曲がらない様にその細腕で懸命に育てている。

その姿に俺も素直に尊敬している。

……まあ、千冬さんの私生活は別として。

ただ、気になったのは千冬さんを見る時のオルカの『眼』。

まるで：獰猛な、肉食獣が獲物を見つめる時の様な――そんな殺気を孕んだ好戦的な色を浮かべている気がする。

しかも、その殺気が——俺も、昔どこかで感じたような気がするから不思議だ。

現に、一夏が篠ノ之道場に通うようになってからは、ちよくちよく千冬さんに挑んでは、オルカは返り討ちにあっている。

年齢差も考えず、何度も懲りずによくやると思う。その癖、俺の眼から見ても挑む度に、オルカの動きはその切れ味と鋭さを増している。

いつの間にオルカはこんな狂暴になったのか…不思議でしょうがない。

まあ、二人の立ち会いを見てみると、結局俺も対抗心と言うか…闘争本能を掻き立てられて千冬さんに挑んでしまうんだが。

ただ、対峙すると千冬さんの凄さが良く分かる。現役の頃には未だに劣るが、それでも俺は生前培った技術（我流と言うか、戦場で培った格闘術などだが）を総動員して、本気で打ち込んでいるが、裁かれ流され、あるいは防がれて的確に一本返される。全く、とんでもない人も居たものだ。

因みに、オルカの動きは——何て言うか獣だ。技術とかが無いわけではないが、スピードで翻弄して鋭い一撃を叩き込み、離脱、あるいは追撃といった感じだ。…あの動きも何処かで見た気がするんだけど——一体あんな動きをどこで見たんだか…まるで思い出せない。ただ、見ていると背中に妙な汗が——うん、考えるのをやめよう。

ああ、ところでひとつ断っておくと、決して千冬さんとオルカの仲は険悪じゃない。むしろ良好だ。千冬さんは妹でも見るような…——そんな目でオルカを見ているし、オルカはオルカで『ちーちゃん』とか呼んで非常になついている。

そんなところも微笑ましくて、可愛らしいと思う…が、そんなオルカを、最近では素直に可愛らしいと思えなくなってきた自分がある…何でだ？

まあ、そんな訳で最近ではほぼ毎日、今日も俺達は織斑姉弟にくつついて篠ノ之道場に来ている。

「お前たち、今日も来たのか…門下生でもないのに物好きなヤツだな」

そうだ。篠ノ之道場と言えば、忘れちゃいけない子が居たな。

「お前たち、今日も来たのか。全く、門下生でもないのに物好きなヤツだな。ま、まあ、お前たちの立ち会いは私も勉強になるし：無下にはできん。ゆっくりしていけ」

この娘の名前は篠ノ之箒。この道場の先生の娘で、私と同じクラスの同級生。ぶつきらぼうだけど、中々可愛い所のある私の友達だ。素直じゃ無いところなんか特に良い。

何て言うか、見ていて面白い。今だって本当は嬉しいだろうに。

：可愛いヤツよ。ただ、惜しむらしくはもう少し一夏に対しては素直になれたら良いのね。

しかし：一夏も情けないヤツだな。剣道とは言え、箒に押されてるじゃん。

「チーちゃーん！ いくくうーん！ おーちゃーん！
きつくうーん！ 東さん会いたかったよーん！」

「おお？ 束？ 珍しいね、道場来るなんて？」

「やだなー、おーちゃん。そんな余所余所しく呼ばないで、束さんはたつちゃんって呼んで欲しいな〜！」

「や、アンタ羞恥心とかなんも無いし、つまらないし、何より鬱陶しいし！ 誰が呼ぶか！」

珍しい奴が来たな。今私に抱き着いてるこの騒がしいヤツは篠ノ之束、箒の姉だ。なんと言うか、俗に言う天才：と言うらしい。今は確か：ちーちゃんとなんか企んで、ISとか言う『宇宙』での活動を目的とした、ハイスペックパワードスーツの開発をしているらしい。

何でそんなものを作ってるのか聞いた事がある。そうしたら、

『束さんはね、宇宙に行ってみたいんだよ！』

と、私とキズナに目をガキのように輝かせながら語っていた。……

まあ、普段からガキっぽいけど。けれど、その理由は私が応援するには充分すぎる。

私個人としては、その夢に向かって闘う姿には好意を覚える。

そして、何よりも――

最後の、ORCAとして。

まあ、束なら大丈夫でしょ。ちょっと常識はずれな天才だし。ネクストとかアンサラーとか作り出さない限りは、私も邪魔するつもりはない。あの辺りを作り出したら：私は躊躇なく、全力で束を潰すだろう。コジマは：不味い。

ああ。ネクストとかアンサラーって言うのはあくまで一例。正確に言えば、致命的な汚染を巻き起こすもの全て、と言い換えた方が正しいかな。

まあ、何だかんだ良いながら束なら心配ないと思うけど。

しかし、こう：抱き付いて頭を撫で回したり頬擦りしてくる過剰なスキンシップはなんとかならないかなあ？

これでも精神的には束より歳上なんだけど：ああ、何で千冬はちーちゃん、束は束なのかって？

初めて会ったときにたっちゃんって呼んだよ？

けど呼んだら：顔真っ赤にして興奮して今以上に過剰なっていうか、もはやセクハラに近い事かましてきやがったので、もう絶対たっちゃんとは呼ばない。絶対に。

今だって振りほどけないから、されるがままにされている訳で：早く大きくなりたい。今だって隠れてコソコソ鍛えているけどどうしても：ちーちゃんと本気で闘りたいなあ。

「……ふむ。織歌は束に捕まってるのか。絆、私が相手をしてやる。来い」

「わかりました。よろしくお願いします、千冬さん」

お？ キズナがちーちゃんと闘るみたいだ。今日はどれだけ闘れ

るか見ものだな。

二人が木刀を持って対峙する。…二人とも防具は着けてない。

ちーちゃんは普通の木刀を。キズナは短い木刀を二本、右手は順手、左手は逆手にもって構える。

ちーちゃんの構えは剣道で言う…正眼ってヤツかな？ 正直、剣道の事は良くわからないけど。

対して、キズナは体を半身にして右肘を降り立たんで、木刀をもった右手を顔の左横に。左腕は右腕の下を通して、右肘の先に左手が来るように軽く伸ばす。

おーおー、目を鋭くして殺る気満々って感じじゃないの…なーんか、何処かで感じたような気配だけど…何処だったかなー？

キズナがあんな顔ができるのを知ったのは、ここに通うようになってからだけど。初めて見たときは驚いたっけなあ。あの優しいお人好しがあんな顔できるなんて。

けれど、あんまり気にしなかった。だって、私なんかあの位の時分には毎日あんな顔してたからなー。うん。普通、普通。

ダンッ

お、動き出したね。やっぱ最初に攻めるのはキズナか。どれどれ…右手を胸の前に置いて、左腕をしならせる様に振って斬りかかって…外し…いや、避けられたか。けど、キズナの攻めはそれで終らず、左腕を戻す動きで突きを繰り出して—あ、ちーちゃんのカウンターが胸に…お、胸の前に置いてた右手にもった木刀で防いだ…ひゅー、やるじゃんキズナ。ちよつと見直したよ。でも、キズナも多分気付いてるよね？

ちーちゃんが本気だったら、それ、木刀ごとぶった斬られて死んでるからね？

バックステップで距離を離そうとするちーちゃんに対し、キズナはちーちゃんの木刀を防いだ木刀を宛てたまま、滑らせる様に木刀の切っ先を滑らせながら、距離を離すまいとちーちゃんに追いつがり—右手に持った木刀での連撃。腕と手首のスナップを聞かせて、突く、切るを繰り返す。

突く、切る、切る突く、切る切る切る切る切る切る切る切る切る突く突く切る切る切る切る…。

右腕だけで良くもまあ、あれだけの手数。あの技術は凄いなあ、と素直に私でも思う。私には無いものだし、格好いい…と思う。思うんだけど…何でかな、素直に手放しで賞賛できないのは？

まあ、あれって軽すぎるんだよね。だからかな？

けど、いくら軽すぎるって言っても…それを木刀一本で捌ききるちーちゃんもよっぽどだよ。まあ、年齢差があるし、しようがないか。キズナって細かいし。

と、ちーちゃんの下から斬り上げた一刀で、右手に持った木刀が弾かれて…これで終わりかな。返す刀でキズナの首筋に木刀を宛てて…全く、ちーちゃんつたらやりきったって感じのイイ顔しちゃって、まあ…。うん、気持ちは分かるけどね。

キズナの将来も楽しみ…うん、楽しみだよ…ね？

「うーん、やっぱり凄いなー。きつくん。おーちゃんもだけど」

「うーん、そうかなー？ 私もキズナもちーちゃんに負け越してるし」

「いや、十分すごいと思うぞ」

「キズナとオルカが凄くなかったら、同年代の俺と箒はどうなるんだよ」

会話に一夏と箒も混ざってきた。

「えーと…ザク、ゲフンゲフン。いや、二人とも見込みはあるよ？」

「順当に強くなればちーちゃん並も夢じゃないんじゃない？ ただ、今は訓練不足で弱過ぎるだけで」

「ふむふむ。そうか、私も一夏もまだ強くなれる可能性はあるのか…って、おい！ 今貴様、ザコって言いかけただろう!？」

「しかも最終的に弱すぎるって言ったよな、な!?! オルカはオブラートに包んだつもりかも知れないけど、まるで言い直した意味ねえから、それ!？」

「てへぺろっ♪」

「こ、コイツムカつく…!？」

「本当の事を言われて怒るのは、修行の足りない証拠だぞ、二人とも」
「一夏も箒も落ち着きなよ。オルカも僕も、なんだかんだ言つて大したことは無いんだから」

お、汗を吹きながらちーちゃんとキズナも来たね。

「しかし、あんな動き…お前達は何処で覚えたんだ？ 私が言うのも何だが、あんな動きは一朝一夕で出来るものでは無いぞ？」

え？ そうなの…私にしたらできない方が可笑しいんだけどな、あれくらい。

「え？ 普通でしょ、あれくらい？」

お、キズナとハモった。うんうん、やっぱりそうだよねえ。あれくらい動けないと生き残れない…って言うか話にならないし。むしろ、私に言わせれば、一夏も箒も平和だからって、体を鍛えなすぎ。

「二いや、流石にお前東さんもおかしいと思うらそれはおかしい」

え？ 皆気持ち悪いくらいハモって…って、束。アンタまでそれを言うか。アンタにだけは言われたく無かった。見れば、キズナだって笑ってるけど微妙に引きつってるし。きつと、今同じような事考えてるんだろうなあ…。

「まあ、それで…二人とも独特な動きをするが、何処で身に付けたんだ？」

「それ、俺も気になるな。なあ、教えてくれよ」

「うむ…是非教えてくれないか？」

「束さんも、束さんも気になるなー！」

い、言えない。流石に前世で身に付けました…とか言えない。

「えーと…見よう見まねって言うか…」

見れば、キズナも言いよどんでる。私としてもキズナが何を参考に身に付けたかは気になるが…それどころじゃない。

「え、えーと。私はスシ！ スキヤキ！ フジヤマゲイシャ！ サムライー！ な忍者とか、アイヌ民族の巫女っぽいのに憧れて…」

う、うわー…自分で言っておいて言うのもなんだけど、流石にこれはない。恥ずかしすぎる。

隣からブツ！とか吹き出す音が聞こえた。

…よし、良い度胸だ。覚えておけよ、キズナ。これでオマエの答えが大したこと無かったら、笑ってやる。盛・大・に・な！

「えと、僕は…その。沈黙する中年親父とか、段ボールを愛用する蛇をリスペクトして…」

「ブハッ！ 下らねー………www」

「僕はオリカにだけはそんな事は言われたくない！ そっちも僕と似たり寄ったりだろう！」

「…なあ、箒」

「……なんだ、一夏」

「こんなのより弱い俺達って…」

「………」

ん？

一夏と箒で話こんで…どうしたの？

箒がプルプル震えてるけど…なに、どうしたの？

「織歌、出る！ 私と一夏でお前のその不純な発想を叩き直してくれる！」

ああ…なるほど。そう言うこと…確かに剣道馬鹿な箒じゃ気に食わないか。

まあ、でもたまには良いか。

二人に戦場の闘い方つてのを教えてやる…！

「良いよ…二人まとめて遊んであげる。殺す気で掛かってこいつ！」

「その言葉…そっくりそのまま返す！ 今日こそはお前から一本貰うぞ！」

「やっぱりかぁー……… やっぱり二人とも俺の意思は無視なのかー!？」

「一夏！ 侮られた上に臆するとは何事か！」

「そうそう。男児たるもの行動で語れ♪」

「ええい！ 分かったよ！ やってやる、やれば良いんだろ！ 織歌、

お前は俺が討つ、今日ここでえっ！」

うーん、良いね。二人とも目に闘志が漲ってて。そうじゃなきや面白く無い。

だから私も真面目に相手をしよう。

「アアアン!?! やってみろよおー!」

世界は、今日も平和だ。

絆と織歌の仲は変わらず、新しく出来た友人達と平穏な時を過ごしていた。

世は何も変わらず、なべて世は事もなし。

…とは行かなかった。

そう、起こってしまったのだ。

世界を揺るがした、『白騎士事件』と『篠ノ之東博士によるI S発表』が。

missi on 4 どうしてこうなった？く嗚呼、
忌々しき黒歴史く

『白騎士事件』

突如、日本を襲った2341発のミサイル。

それらは、日本を攻撃可能な各国のミサイル管制システムが一斉にハッキングされ、制御不能に陥った事により巻き起こった。

戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視 衛星8基。

突然の事態に各国の政府が慌て用意し、日本近海へと寄越した迎撃戦力の数である。

絆と織歌は、ニュースを見ながらぶちギレていた。

「…自国の攻撃システムすら管理できないか。たいした国家だな。笑わせる。抑止の為の兵器がこれじゃあな…無能な政治屋共め」

「話にならないね。何のための税金なんだか。…結局、どこの政府も、結局は金喰い虫の税金泥棒の役立たずってことかな。…馬鹿馬鹿しい」

と、こんな感じで本気でぶちギレていた。お互いが、お互いの変化と言動に気付かない位には。

ただ、何よりも二人が憤慨しているモノは、国家でも政府でもない。今の自分の身の力の無さ。

自身の脆弱さ、無力さこそが、忌々しい。

もし、仮に——ネクストがあったなら。

こんな事態…簡単に蹂躪して粉碎して見せるのに。

二人ともそう思わずにはいられなかった。

因みに、普段だったら家にいる二人の母親は、運良く出かけていて、

未だに帰ってこれないでいる。

「うう…待っててね絆、織歌…お母さんすぐ帰るから…心細くて泣いてるかも知れないけど…お母さん、すぐ帰るからね…！ だから、待ってて…絆、織歌…」

実に、知らぬが仏とはこの事か。

二人が苦虫を噛み潰した様な表情で、モニターを見つめていると…モニターの向こうで、状況に変化があった。

それにいち早く気付いたのは、誰でもない絆と織歌だ。

「ん？」

「画面の奥で…何か光った？」

「戦闘機…？ それにしては…」

「うん。小さい。小さすぎるよ、コレ」

「ミサイル…？ いや、でも到達予想時刻にはまだ余裕があるし…それに、一発だけ…？」

モニターの向こうでもその存在に気付いたのか、モニターにそれを拡大した映像が映った。

（え？ 白い…こ、れ、鎧？ 白い鎧を来た人間？）

画面に映ったのは衝撃的な映像だった。それは、剣を持った白い鎧。それが空を高速で飛行しているのだ。いくら転生と言う名の超常の体験を継続中である二人であっても、それは驚くべき光景だった。

二人して目が点になっている。気が付いたらお互いがお互いの頬を掴んで抓っているが、やはりお互いになにも言わない。

やがて、二人で顔を見合わせて、

「なに？　これ？」

そう呟いた。しかし、そんな事はお構い無く、画面の向こうでは事態が加速している。

見れば、空飛ぶ白い鎧は各国の防衛戦力に接近し――

「え？」

戦闘機とすれ違い様――

「ちよ、はあああああああああ!?　なにやってるんだコイツ!?」
オマエ

手にした剣で、戦闘機を真つ二つに、ぶった斬った。

絆と織歌からすればたまったものではない。いくら急遽寄せ集められた急造の、恐らく連携も儘ならないであろう烏合の衆ではあるかも知れないが、ミサイルを迎撃するには必要な戦力だ。心許ないが。そんな二人からすれば白い鎧の取った行動は、正に『何してくれるのオマエ!』である。たまったものではない。

しかし、そんな二人の心境を知るよしもない白い鎧は、最初の一機を斬り墜とすと、流れる様な動きで次々に戦闘機を墜として行く。

すれ違い、追い縋り、時には纏めて複数機。

戦闘機とて、ただ黙ってやられて要るわけ出はない。機銃で、ミサイルで、搭載されている武装で反撃してはいる。

ただ、その反撃の悉くが、圧倒的な機動で以て避けられ、あるいは斬り伏せられ：全てが徒労に終わり、敢えなく撃墜されていく。

もはや、白い鎧の無双状態である。

しかし、白い鎧がどんなに優れているようにも、数の上では迎撃艦隊

の方が勝っている。白い鎧の異常性を指揮官もようやく認めめたのか、点による迎撃から面による制圧に切り替えた。

そうなると思えば流石に白い鎧も避けきれなくなってきた様で、一発のミサイルが命中し、白い鎧の姿が爆煙に包まれ、そこに艦隊の火力が集中する…のだが、白い鎧は何事も無かったかのように無傷で爆煙を抜け出し、次の標的に飛びかかっていく。

「……………」

二人とも普段では決して見せないような、ポカーンとした表情をしているが、しばらくすると二人同時に「ハッ！」と、なにかに気付いた様に意識を現実呼び戻した。

「ギズナ、ちよつと録画の準備！ 私ビデオ探してくる！」

「分かった！ 確かビデオなら父さんの部屋に使ってないのが一杯あったはずだから、それ持ってきて！」

そうして、暫くして録画を始めると、二人して食い入るようにテレビ画面を凝視している。

「これ…何だろうね？ ……パワースーツ…かな？」

「そうじゃないかと思う……サイズの。少なくともネクストじゃないよ」

「だよねえ……どういう原理で動いてるんだろう……やっぱりAMSみたいな神経接続かな？」

「流石にこの映像だけじゃ……むしろ俺としては、これの機動力が気になるかな……慣性制御とか姿勢制御とかどうなってるのか…」

「これ、殆ど生身みたいなものだよねえ……対G性能なんて大してないように見えるけど……さつきから滅茶苦茶Gかかる様な動きしてるよね？」

「攻撃を受けたところ見た分だと、何か特殊なフィールドで身を守つ

てるんじゃない？ PAみたいな…この映像だけじゃ良くわからな
いけど…」

「PAかあ…汚染とか大丈夫かな？」

「どうだろう…って、ああ!？」

「ツ！ どうしたのキズナ！…って、あ…」

反射的に絆を見た織歌は、なにかに気付いたのか固まってしまっ
た。絆は絆でまるで、暫く油をさしていかない機械が動くようにぎ
こちなく首を回して織歌に視線を向ける。二人に共通する事は、どち
らも引きつった微妙な笑みを向けあって、「やっちまった」と言う顔を
している。

「ねえキズナ？」

「なあオルカ？」

「今オマエ何て言ってた？」

「……………」

再び流れる沈黙。

そして、暫く見つめあったあと、二人してその部屋から出て、別々
の方向へ。

(そっかそっか…うんうん。なんか変なやつだと思ってたけど、オル
カもそうだったのか。うん、納得。でも、普通身近にもう一人いると
か…考えないよなあ)

キズナはそんな事を思いながら台所へと来ていた。包丁を収納し
ているケースから、包丁を2本取り出すと、台所を後にした。

(そっかあ…まさか、キズナもそうだったなんて…普通思わないよ
ねえ…ちよつと変わったところはあったけど…まさか私と同じとか)
織歌は物置小屋に来ていた。やがて、目当てのモノを探し出すと、

満足したのか物置小屋を後にした。右手に小型の鉞を持って。

そして、二人は偶然廊下で再開した。二人ともニコニコ不気味な笑顔を浮かべて、両手を後ろに回して隠しながら。

二人がちらつと居間のテレビ画面に目を向けると、迎撃艦隊を殲滅した白い鎧が、今度はミサイル相手に大立ち回りしているところだった。

二人は視線を戻す。

織歌は絆へ。絆は織歌へ。そして二人同時に口を開いた。

「ねえ？ キズナは…」

「なあ、オルカは…」

「どっち？」

「……………」

「…私はORCA」

「俺は…カロード」

「……………」

沈黙。二人は知らず知らずのうちに隠し持った得物を握る手に力を籠める。場に流れるのは緊迫した空気。

「えっと…」

「キズナ？」

「オルカ？」

「殺^やる気…ある？」

「……………」

「……………はあ」

溜め息と同時に二人の雰囲気^きがめで見て分かるくらい弛緩し、揃って得物を下ろした。

「ちよ、オルカさん!? どこいつてるのかと思ったら、そんな物騒なもん持ち出して来たのかよ!」

「…こんな可愛い美少女相手に、包丁二本も持ち出したヤツがそれを

言う?」

「美少女? 誰が?」

「ああ? やっぱ殺るか?」

「すみませんごめんないオルカサマ、俺の思い違いでした」

「よろしい」

言つて、オルカは満足したのか、腰に手を当てる胸を反らす。そして、二人同時に、

「プツ：アハハハハハハハハハハ」

と、笑いだした。

「あー：笑つた笑つた。笑つたし、ちよつとスッキリした」

「私も。なんかスッキリしたなあ」

「取り敢えず、お互い手に持つてるの片付けようぜ。母さん、帰ってくるの遅れてるけど、いつ帰ってくるか分からないし」

「そうだね。さっさと片付けちゃおつか。：お母さんがこんなの見たら卒倒しそうだし」

二人はうつて変わつて軽やかな足取りでそれぞれ持つてきたものを戻しにいった。

そして、再び居間へ。二人は先程と同じように、白い鎧——白騎士がミサイルを次々破壊している光景を観察している。

「ねえ、キズナ?」

「なに? オルカ?」

「キズナはどうやってこつち来たの?」

「ん? ああ：あんまり、思い出したくないんだけど：：そうだなあ：」
そして絆は語り始めた。こつちに来る切つ掛けになつた事を。

アルテリア・クラニアムの決戦を。

そこで、紅いホワイト・グリントと闘い、最後に敗れた事を。懐かしむ様に：：悲しそうに。

特に紅いグリントとの決戦は、怖かつたと言いながらも、相手を賞

賛する様に楽しそうだった。

が、それを黙って聞いていた織歌の顔は段々と気まずいものになってくる。青くなつたと思つたら、今度は心なしか顔も赤くなつたり。

「ん？ どうした、オルカ？」

「あー…いや、なんかその、色々とゴメン」

「へ…？ 何でおまえが…え？ ま、ま、さか…」

「うん、それ私だわ」

「オマエかああああああ?! オマエがあああの紅いグリントのリンクス?! オマエのお陰であの光景思い出すと、今でもションベンチビリそうになるんだぞ?!」

「だからゴメンってば！ だいたい、あれは私に負けたあんたが悪いんでしようが！」

「ああ。それに関しては負けた俺が悪いんだが…文句の一つくらい言つても良いだろ！ てか、俺を殺したオマエが何でここにいるんだよ?!」

「あー…それは…最後、私OB使ったじゃん？ アレでアンタ倒せたのは良かったんだけど…機体に無理させ過ぎちゃって、止まれなくなつて壁にぶつかつて機能停止して…そのままコクピット内でシエイクされて…どうにかコクピットから這い出して、クローズ・プランが成就したのを見届けたら力尽きちゃいました。テヘ♪」

「あ、ああ。それは…良く即死しなかつたな？」

「だよねえ…」

「……………」

再び二人の間に沈黙が流れる。なんとというか、お葬式のような沈痛な空気。

「リベンジ…する？ するなら付き合うけど」

「いや、今はいいよ…リベンジする機会ならこれからいくらだつてあるんだし。…もう、オマエ相手に殺し合いはしないよ。母さんも父さんも悲しむし」

「それもそうだね。良い人だもん、お父さんもお母さんも。まあ、どう

せ勝つのは私だし」

「…ハイハイ。オルカのその無駄に大きな自信は何処から来るのかね。まあ…勝つのは俺だけだな」

二人とも見つめあってから、ニイと笑う。楽しくてしようがないと言っているように感じる。

そして再度テレビ画面に目を向ける。そこにはミサイルを全て破壊しつくした白騎士が、今度は増援でやって来た戦力を悉く蹂躪していた。二人の目には、その姿がとてもイキイキしている様に見える。

「……なあ、オルカ」

「何、キズナ？」

「この白いのの動きって言うか、太刀筋って言うか…何処かで見た気がするんだが」

「…奇遇だね。今私もこないだ束が『うわーっ！ おーちゃん！

せっかく束さんが作った子を、学会の老害共に馬鹿にされちゃったよー！ ぐぬぬぬ…覚えてろよ、老害共め…！ 貴様等には水底が似合いだ…！』って愚痴ってたのを思い出したとこだよ」

「………」

「何やってんだ、あの馬鹿共…！」

「この騒動が収まったら覚えていろよ…二人とも」

「アイツラには説教が山程あるからね…」

こうして、二人は密かに千冬と束に説教をすることを決めたのだ。た。

後日。

突如現れた、白銀の鎧を纏った一人の女性によって、全てのミサイルと迎撃戦力の全てが無力化された。その後も、各国が送り出した増援を、一人の人命も奪うことなく破壊された事件は、後に『白騎士

事件』と呼ばれて世間に認知され、浸透した。

そしてその直後、世紀の天災・篠ノ之東博士によるISの発表。この二つを以て、ISは「究極の機動兵器」として一夜にして世界中の人々が知るところになった。そして「ISを倒せるのはISだけである」という東の言葉と、その事実を、『白騎士事件』にてまざまざと見せつけられた敗北者たる世界は、無抵抗に受け入れるしかなかった。

更に後日。

烏丸家の絆と織歌の部屋へ招待され、自分たちより幼い小学一年生の双子の兄妹に正座を強要され説教をくらう、織斑^最千冬と篠^天ノ之東の姿があったとかなかったとか。

mission 5 IS学園入学、再会と新たな出逢
い

さて、それからも色々あったなあ。

幼なじみの箒——もとい篠ノ之一家が政府の重要人物保護プログラムで、転校して…あの時は大変だった。

「姉さんが…姉さんさえ居なかったら…こんな…!」

私は箒を抱き締めて、優しく頭を撫でてやっている。私達と——いや、一夏と別れるのが嫌なんだろう。一夏にぞっこんだからね、この子は。

はあ…こんな風に慰めるとか…私のキャラじゃ無いんだけどなあ…。

しょうがない。

どうせなら、ついでにもう一肌脱いでやるか…!

「ていつー!」

「いたっ…な、何をするんだ織歌!」

撫でていた手を離して、代わりに箒の脳天にチョップをプレゼントしてやった。箒は恨みがましそうにこちらを見ている…ま、理由が分からなきやしょうがないね。

「そこまでにしときなよ、箒。この件じゃ束は悪くないよ」

「な、なん…なんだと…!」

まるで、信じていたものに裏切られたような、絶望と憎悪が籠った
イイ眼を箒は私に向けて来る。

でも…残念。その程度で、動じるような修羅場を潜ってきてないんだ。悪いね、箒。

「私からしたら…今のアンタは自分の弱さまで束のせいにしてるよう

に見えるよ。…全く、情けないったらありやしない」

本格的に泣きそうだが…今ここで止める訳にはいかない。

「だってさ…離ればれになるのが嫌で、箒。アンタは今なにしてんの？」

箒の表情が固まる…まあ、良いか。憎まれ役はなれてるし。一気にいこう。

「何もしてないよね？ やってる事と言えば…私に甘えて慰めて貰ってるだけだよな？ 悲劇のヒロインぶった挙げ句に、自分の弱さまで他人のせいにするな」

「な…なんだと…お、織歌に、織歌に私の何がわかる！ たかが子供に！ 子供の私に何が…」

「分かる訳無いじゃない…何言ってるの箒。そんな当たり前なこと、聞かないと分からないの？ それに子供がどうか関係ない。弱くて、何も出来ないのは全部、箒自身のせいだよ。箒自身の、弱さのせいだ」

「ッ！ だ、だからどうした！確かに弱いんだろう、私は、強い織歌かしたらならな！ でも、でも！ これは政府の…政府の命令だぞ！」

「その、何も出来ないのが弱さなんだよ、箒。仮に聞けど…例えば、政府が下らない理由で一夏を抹殺とかしようとしたらどうするの？」

自分でも思う。この質問は卑怯だと。それでもしなきゃいけない。箒の逃げ場を無くす為に。

「ッ！ あ、あり得るものか、そんな事！ 国民を守ってこそその政府だろう！ そんな馬鹿げた事があるか！ 第一、その質問になんの関係がある！」

「あるよ、関係。それにあり得ない？ 悪いけど、世界は割となんでもあり得るんだよ。経験あるでしょ、四年前に。じゃあさ、この国の政府でなくても良い。他国の政府からの要請とか、非合法の犯罪組織でも、なんでも。そうなくてもアンタは泣いて、誰かに慰めてもらうだけのつもり？」

「ッー」

「違うでしょ？ 多分、助けようとするでしょ？ 今のアンタの事は何も分からないけど、少なくとも私の知ってる、私の幼なじみの篠ノ之箒は、幼なじみを見捨てられるほど、情けないヤツじゃない、弱いヤツじゃない……ねえ、箒。今は、弱くたって良いじゃない。自分の弱さを人のせいにするんじゃないよ……さ。今は自分の弱さ、受け入れてさ。ソレで強くなれば、良いんじゃないの？ 誰よりも強く、国からの保護なんて要らないくらいに……さ」

そうして呆然としている箒を抱き締めて、もう一回頭を撫でてやる。

「だから……さ。今はたつぷり泣いてさ……悔やみなよ、自分の弱さを。そんで強くなるよ……誰よりもさ」

「お、おる……おるか……おるかあああああああ！」

先程よりも優しく撫でながら、私は続ける。

「それと……話が戻るけど、束は何も悪くないよ。確かに、原因を作ったのは束かもしれない……けどさ、束がISを作らなかつたら、もしかしたら私達は今、いなかっただかもしれない。アイツは……束は、アンタの姉さんは、ただ純粋に宇宙に行きたかったただけなんだよ。だから何も悪くない。本当に悪いのは、束が頑張つて折角作ったISを、兵器としてしか利用価値の見れない、世界が悪いんだよ」

「世界が……？」

「そう、世界が。歪んでるんだよ……世界も、アンタたち姉妹も……ホント

はぎ、好きなんだろ？ 束のこと。…見てられないんだよ、自分の幼なじみが、本当は好きなものを、嫌いだって言っつて、傷付くのは…さ？」

暫く箒は泣いた。思いつきり。お陰で服はベトベトだ…全く、キラじゃないことなんて、やるもんじゃない。

「す、すまない、織歌…情けないところを見せた。ソレで…その」
「良いつて事よ。それと、私は誰にも言うつもりはないよ」
「す、すまん…ありがとう、織歌」

まあ、たまには悪くない。幼なじみのこんなにスッキリした顔が見れるんだつたら。

私は返事を返さずに、手をヒラヒラさせて箒の部屋を後にした。

——さて、あともう一仕事。

「束、入るよ」

「わっ！ ちよちよつと待って、おーちゃん！ 束さん今、取り込みちゅ…」

「うっさい。どうせ全部聞いてたんでしょ。…まあ、良いや。いつぺん、アンタも箒としっかり話をしなよ。そんだけ」

それだけ扉越しに伝えると、私は篠ノ之家を出ていった。

まあ、後はあの姉妹次第だ。私の…知ったことじゃない。

「なんて事もあつたなあ…」

と、しみじみ呟く私は、今は花の高校一年生。

なんの因果か、キズナと幼なじみの一夏…世界で今のところただ『二人だけの例外』とクラスが同じとか……うん、楽しみで仕方な

い。一夏なんか自己紹介で早速やらかしてくれたし。これから二人には頑張つて貰いたい、二つの意味で。

まあ、私だつてうんざりしてるんだよ、今の世の中の風潮つてヤツには。『女にしか操縦できない』ISが浸透してから、世界は今じゃ女尊男卑一色だ。頼りになる男性像なんてのは何処へやら、今じゃ男なんて女がその気になれば、三日もあれば殲滅できるみたいな事を評論家が恥ずかしげもなく平気でメディアで喋ってる。そして、ソレをそのまま鵜呑みにしてる有象無象共。力も無く、闘つて勝ち得たつて訳でもないだろうに。

それじゃ、今度は二人の例外について説明しようか。

今、キズナと一夏は現状『世界でただ二人だけ、男性でありながらISを起動できるIS操縦者』として、ここにいる。

じゃあ、何で二人がISを起動できる事がわかったかと言うと、キズナイわく。

『一夏と一緒に藍越学園の入試に行ったら、迷つた挙げ句にどこかの馬鹿が人の制止も聴かずに試験会場に突入して行って、気がついたらその馬鹿がISに触れて起動させていた。その流れで俺もISを起動させてみる流れになつて、めでたくIS操縦者の仲間入り。この僥倖には一夏に感謝したけれど、間違えて突撃した理由を聞いて一夏を一発殴らずにはいられなかった。『IS学園アイエスと藍越学園アイエツって似てるよな?』この言葉を聞いたと思ったら、既に拳は一夏の頭にめり込んでいた。何を言ってるのか訳が分からないかも知れないが、後悔はしてない』

そのキズナの言葉には、流石の私も死にかけた。まさかORCAだった私の今生の死因が、笑い死にならずに本当に良かった。

で。そしてここは公立IS学園。IS学園つてのは、

ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営及び資金調達には原則として日本国が……あー、メンドくさい。平たく言っ

ちやえば、日本の発明したISが世界を混乱させてるから、責任もつて日本でIS操縦者の管理と育成しろってこと。さらに運営資金の調達も自分でやらせておきながら、技術情報の開示だけは協定に参加してる国家全てに無条件に教える必要があるとか。かつ、加盟国に所属している人間への入学は無条件に認めないといけない上に、日本の生活の保証までしなくちやいけない。どんだけ厚顔無恥なのよ。

つーか、一ヶ所にIS操縦者とか集めて、IS学園主導で反乱とか起こされたら対処できるのかな、世界は。

まあ、そんなことよりも今は――

「……おい、聞いてるのか織歌？」

つい昔の事やら最近の事を思い出していたら、折角懐かしの幼なじみが声をかけてくれてるのに放置しちゃった。

「ゴメンゴメン。ちょっと考え事してたら集中しちゃって……久し振りだね、箒。見た感じ、変わらないねー、あの頃と」

自然と顔が緩むのが分かってしまう。全く、私は何時からこんなキヤラになつたんだか。

目の前にいるのは、黒髪を白いポニーテールで纏めた女の子。身長は……私の方が高いかな。

で、胸は……な、なんだと……？ クソツ！ あり得るのかこんな事……！

私だってそれなりにある方だが……この年齢でそのサイズ……くう、負けた！

別にでかくても嬉しくないけど。動くのに邪魔になるし。でも、なんか負けた気がして悔しい。

でも、昔の面影がすっかり残ってる。全く、機嫌悪そうに見えるのも相変わらずだなあ。

あれから、中身はどうなったかな？

「ふん…：そういう織歌の方こそ相変わらず見たいだな。内面も…：その様子では、一夏とキズナに相当苦勞させて来たんじゃないか？」

言うようになったじゃない。その言葉にニイツと笑ってしまふ。

「いや、全く。昔から狂暴で、手が付けられないんだよコイ…：ツツ！」

パシンッ！

ち…：防がれたか。キツチリ私の裏拳止めて…：そのドヤ顔やめろ。

「幼なじみとの感動の再会に水を差すのがアンタの流儀…：？ そのうち後ろから刺してやろうか？ あと、訂正入れなかった一夏も同罪と見なす」

「やめてくれ。オルカが言うとお冗談に聞こえない」

「ちよ、それって流石に酷くないか織歌!？」

「…：本当に変わらないな、お前たちは」

そう言つて笑つてる箒の顔は、どこか嬉しそうで。まあ、気持ち分かる。久し振りに出会った幼馴染みが変わつて無いのは嬉ことだろうし。

「だが——私は変わったぞ。織歌、あの時より——多少は強くなった。お前に負けないくらいには」

へえ…：良い表情するようになったじゃない。こりや、ますます楽しみだ。

「そう言う意味なら——私も強くなったよ。あの頃よりズツト」

私も箒も、お互い楽しそうに笑つて拳を合わせる。

さて、それじゃあ…久し振りに再会した幼馴染みのために、実益と趣味が多分に含まれたお節介でも焼いてやりますかね。

「ところで…箒いー？ 本当は一夏に用事があるじゃなかったつけえく？」

「ん？ そうなのか、箒？」

「な、なななな…なんて事を言い出すんだ、織歌！」

「あつるえ？ 無いのおく？」

「ツ！ い、いや、ある！」

全く、昔から分かりやすいところも変わってないなあ。顔真っ赤にして…まあ、それでもこのスピリット・オブ・朴念仁は分かかってないんだろうが。

「じゃあ、さつさと廊下にも行ってきなよ。ここじゃ目立ちすぎるし」

「す、すまん、二人とも。では、一夏は借りていくぞ！」

それだけ言うといそいそと一夏を連れて、箒は教室を出ていった。うまくやれると良いんだけど…ま、無理だろうな。

「……オルカは良い趣味してるよ、全く」

「最高の誉め言葉だと受け取っておく」

私もキズナも二人してニヤニヤして…全く、アンタも充分良い趣味してるよ。

「ちよっと、よろしくって？」

「うん？ 誰？」

声が出たので振り返ると、そこには金髪をなびかせた見るからにお

嬢様な女の子が。パット見、プライド高そう。こういうタイプ苦手なんだよなあ……。てか、なんなのよ。そのポーズは。腰に手を宛てて胸に手を添えて……。しかも無性に様になってるのが余計腹立たしい。

何より胸のサイズが……。私より少しデカイのが気に食わない。

「ま……。まあ！ このクラスのたった二人の専用機持ちで、イギリス国家代表候補であり、入試首席でもある、このわたくしをご存知ない?!? そうおっしゃるのですか、織歌さん、アナタは！」

「あー、ごめんウォルコットさん。オルカは実力も分からないヤツにあんまり興味ないんだよ。で、オルカ。この人はセシリア・ウォルコットさん。聞いての通り、イギリスの国家代表候補でお前と同じ専用機持ちで、入試首席らしい」

私の不機嫌になってきたのを察したのか、キズナのヤツがウォルコットとやらを宥めながら説明してくれた。しかも然り気無く毒を吐いて……。良い趣味してるよ。

「ふうーん……。って、え？ ウォルコット？」

「そう、ウォルコ……」

バシン！と、教室内にウォルコットさんとやらが勢いよく机を叩くのが響いた。

「違います！ わ・た・く・しの名前はあくせ・シ・リ・ア・ウォルコット……セシリア・オルコットですよ！」

「うわっ、説得力がない」

ウォルコ……。もう紛らわしいしセシリアで良いか。

セシリアが瞬間、身体をビクツと、震わせて一歩引いた。どうしたの？

「アナタ方…本当に兄妹でしたのね…息ピッタリですわ」

バシシツ！と、今度は私とキズナが同時に机を叩いて立ち上がる。

「誰が!? 誰と!？」

「あ、アナタ方二人ですわ…」

「冗談じゃない！ コイツと兄妹なんて御免だね!!」

セシリアが…と言うか、クラス中が一步後ずさった気がする。何でだ？

「そちらの方こそ説得力ありませんわよ…?」

どこが!?!と、反論しようとした直後、廊下から小気味いいパーンという音と、「とっとと席につけ、織斑」と言う魔王の言葉が聞こえ、全員席に戻って静かに着席。二限目の授業が始まった。

mission 6 代表候補生、そしてクラス代表

さて、オルコットさんが授業前に襲来したけれど何事も無く授業は始まった。：いや、本当はあった。

オルカは気にしてないようだけど、俺は気にする。授業前にクラス中の注目を集めてしまった。俺もオルカも似てると言われれば即座に否定するが、外見だけで言えば非常に似ていると思う。

違いと言えば髪の長さや身長位か。俺は長めのショートヘア、オルカは腰辺りまで自慢の黒髪を伸ばしている。身長は俺が175cm位で、オルカは同年代の女子に比べて高めの171cm。この間一夏に抜かれた事を大いに悔しがっていた。……お前は本当に女の子か？

兎に角、注目を集めたのは不味い。授業中で千冬さんが目を光らせている事もあって、表面上は静かだが………なんかチラチラ視線を感じる。

全くもって失敗した。ちよつと考えれば分かることだと思いが、『ISは女性にしか扱えず』、ここは『IS学園』なのだ。そして俺と一夏は『世界でただ二人の男性IS操縦者』だ。

では、それが導き出す答は？

そう、クラスどころかIS学園で男子は俺と一夏の二人だけ。簡単に言えば突然女子校に放り込まれたと考えてくれれば良い。幼馴染みの五反田弾であれば、『楽園』とか『お前ちよつとそこ代われ』とか言い出しそうだが：冗談じゃない。この珍しいモノを見るような視線は結構きついぞ。双子で見た目オルカと一緒にだったから、年中割と視線感じたけれど、これはその比じゃない。『ほぼ女子校』×『世界で二人だけの男性IS操縦者』×『そっくりな双子』で乗算だ。

：あれ、そうなると一夏はそっくりな双子が、『千冬^{世界最強}さんの弟』に代わっただけで、弾きだされる答は一緒なのか？

しかも、俺も一夏も自分でISを操縦することを決めたから、冗談でも代わってくれとか言えないし、言うつもりもないんだよ！

「……ずなくん？ 烏丸絆くん？」

「は？ は、はい。何でしょう山田先生？」

いけない。思考に没頭しすぎた。気が付いたら山田先生に名前を呼ばれていた。しかもどこか不安な表情をしている…失敗したかなあ？

「絆くん？ 何か分からないことでもありました？」

「あ、いえ。そう言う訳では…今のところは理解出来てないところはあります。山田先生の授業は分かりやすく助かってます」

分厚い教科書が何冊も揃って家に届いたときは、流石に辟易したが、随分前から仮想敵としてISの研究は怠ってない。…シユミレートした結果はどれも絶望的だったが。単独でのISの撃破は不可能だった。…話が逸れた。

ただ、最後の部分も嘘を言ったわけじゃない。純粹にISに対する知識で欠けている部分を埋める上で、山田先生の授業は確かに分かりやすい…のだが、何故そこで顔を赤らめる必要が？ てか千冬さん…なんですか、そのまるで「コイツもうダメだな」って、あきれた視線は。俺はあなたの弟の一夏とは違いますから！ こんな天然フラグファイターと一緒にしないで下さい。

って、あれ？ いち…か？

見れば、一夏が此方を見て驚愕している…何があった？

その顔は、まるで…そう、まるでドン・カーネルみたいな『こ、コイツがリンクスだ?!』だ、だったら俺は、いったい何だったんだよお!!』って、感じの…どうした？

「そ、そうですか！ そうですか♪ でも、分からないところがあったら、遠慮無く先生に聞いてくださいいね！ なにせ、私は先生ですからっ！」

山田先生：随分テンション上がりましたね。

「は、はい…分からないところがあつたら遠慮無く聞きますので、その時はよろしくお願いします」

はあ…また、無駄な注目を集めてしまった…。

「他にも今の段階で、どこか分からないところがある人はいますか？」
「ハイッ！」

お、一夏が勢いよく手を上げたな。なかなか潔いな一夏。聞くは一時の恥じ、聞かざるは一生の恥じって言うしな。何よりここで分からないところが出て来ると、後々に響くからな。んで、何処が分からないんだ？ 何だつたら後で俺も勉強手伝ってやろうかな。なんて、甘いことを考えていた俺を本気で殴り飛ばしたい。

「あ、織斑くん。それじゃ、どこがわからないんですか？」

「ほとんど、全部わかりません！」

「ブッ！」ガタタタタッ!!

……………。

はっ！ い、いかんいかん。ついポカーンとしてしまった。…気が付けばクラス中がひっくり返ってる。…無理もない。これが粗製か…。オルカはオルカで、また笑いを堪えるので必死だ。

「え…ぜ、全部…、ですか…?？」

さつきとうってかわって、山田先生のテンション駄々下がり。完全に顔がひきつってる。

「ハイッ！ 全部ですッ！」

ここの馬鹿一夏…なに言い切ったってスツキリした顔でハツキリ答えてるんだよお前…いや、お前に羞恥心とか色々期待した俺が馬鹿だったか…。

「織斑…：入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

ズツパアーン！

今日一番の良い音だなあ…織斑一夏、馬鹿な男だった…。

馬鹿だ馬鹿だとは思っていたけど…：入学前必読ってデカイ字で書かれていたものを、普通捨てるものかね…？

「ぷつ…クツ！ クク…」

「必読と書いてあったろうが、馬鹿者が！ 後で再発こ…「ブツ…く、アハハハハハハハハハハ、ヒヒヒヒ…も、もうだめ！ お、お腹痛い。げ、限界…し、死んじゃう…ぷつ、ククク…アハハハハハ！ 馬鹿だ馬鹿だとは思ってたけど…あ、アンタやっぱり馬鹿だわ、それもとびつきりの大馬鹿だよ、アハハハハ…」

スパアーン！

「いたあつー！」

「笑うな、馬鹿者…一応、今は授業中だ」

「い、いや、無理だって、ぷつ、く。ち、ちーちゃん…それ無理…ぷつ、ククク…」

スパン！

「だから笑うなど言っているだろう、織歌。それと何度も言っているが、今は織斑先生だ」

ああ…馬鹿ならもう一匹いたな。怖いもの知らずの馬鹿が。まあ、今まで耐えただけでも立派なほうか。

「…ゴホンツ。ともかく、再発行してやるから織斑はあと一週間以

内に覚える。…良いな?」

「は、ハイッ! 全力で覚えます!」

流石の一夏も今の千冬さんの剣幕には下手なこと答えられないよな。

「はあ………いいか。他の者もよく聞け。ISはその機動力、攻撃力、制圧力。どれをとっても過去の既存の兵器を遥かに凌ぐ。そう言った『兵器』を深く知りもせずに扱えば必ず事故を起こす。そうならない為の基礎知識と訓練だ。理解出来なくても覚える。そして守れ。規則とはそう言うものだ。事故で死んでもつまらんだろう」

圧倒的な正論。その言葉にクラス中が息をのみ、一夏が気を引きしめたのを感じた。…この中でそれを聞いて平然としているのは、俺とオルカ位か…いや、もう二人いたか。

ただ、国家代表候補生のオルコツトさんはともかく、何で箒まで?
…謎だ。

「え、えっと、織斑くん。分からないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張つて? ね? ね?」

山田先生が一夏の両手を取って、見つめあげるその姿はなんと言うか…。ちよ、箒さん? 殺気駄々漏れですよ!?

怖い、怖いから! 気に食わないのは分かるけど、少しは隠す努力をして、お願いだから!

「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願いします!」

そして、一夏はそんな箒に気付いてない…凄いや、お前。山田先生は山田先生で「放課後に生徒と二人つきりで…」とか「でも織斑先生の弟だったら…」とか、千冬さんに授業の続きを催促されるまで呟い

ていた。…山田先生で本当に大丈夫なんだろうか……。

「ちよつと、よろしくて?」

「ん? またどうしたの、オルコットさん?」

一限目も、終わり。一息つけると思ったら、またオルコットさんに話しかけられた。そう言えば、さつきは話の途中で授業が始まったわけ。随分高圧的な印象をさつきは受けたが…まあ、それだけ実力に自信があるんだろうな。好奇の視線を向けられるよりマシか。

「まあ! なんですよ、その態度は? わたくしに話しかけらるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度と言うものがあるのではなくて?」

「…誰? 知り合いか絆?」

一夏、お前の記憶の中に、俺が一度でもこんな金髪碧眼で髪に縦ロールのかかった見るからにお嬢様然とした人と知り合う機会があったと思うのか、友よ。

しかし、今見るとこのクラスも凄いな。かろうじて日本人はクラスの半分で、残りは世界の人種の見本市みたいに多岐に渡っている。

ああ、しかし。一夏よ、お前はまた厄介ごとを…場をかき回す天才か、お前は。さつきのオルカの時みたいにプルプル震えてるよ、オルコットさんが。

「まあ! あなたもわたくしを知らないと、ご存知無いとおっしゃるの!?!」

「あー、一夏。さつきの自己紹介聞いてなかったのか? この人はセシリア・オルコットさん。イギリスの代表候補生で、オルカと同じ専用機持ちの入試首席らしい」

何で俺がオルコットさんの自己紹介をしなきゃならないんだ…い

や、面倒なことになるよりずっと良いけど。

「そう！わ・た・く・しは、代表候補生で学年首席のセシリア・オルコツトですわ！…あなたはこちらの方と違って、多少は見処があるようですわね？」

「お褒めに預かり恐悦至極…って、言いたいところだけど、一夏と比べられても嬉しくない…」

「おま、ソレちよつと酷くないですか!？」

「あら？ 謙遜しなくても結構ですわ。この私が誉めているのですから！ あなたにはその至福をその身全てで受け止め、幸福に浸る義務があるのです！ 何故なら、そう！ このわたくし直々に誉めて差し上げているのですから！」

ここまで来ると逆に感心するな。何て言うか、今まで回りにいなかったタイプだ。オルコツトさん、結構面白いな。けどまあ、オルカが居なくて良かった。オルカは休み時間開始と同時に箒のところにいつてる。仲良いな、あの二人。

「はあ、良いよもう…なあ、絆。ついでにもう一つ教えてもらって良いか？」

「なんだ？」

「今、さらつと言ってたけど、代表候補生ってなんだ？」

「……………はい？」

俺もオルコツトさんも揃ってポカーンとしている。いや、流石にこれは無理だ。俺はこれから一夏を何て呼んだら良いんだ？ 馬鹿や大馬鹿ではまだ足りない気がする。そうだ、確かBFFにこいつにぴったりのがあった。今度から、一夏と書いてグレート・馬鹿と呼ぼう。そうしよう。

「……………ほ、本気で、言ってますの…………？」

「……ごめん、オルコットさん。信じたくない気持ちも分かるけど、コイツ本気で分かかってない。……なあ、一夏。お前の姉さんの織斑先生は、昔なにやってた？」

「お前……流石にソレは俺のこと馬鹿にし過ぎじゃないか？ 日本のI S操縦者国家代表だろ？ そんなこと、家族である俺じゃなくっても分かるくらい常識だろ」

……言いたいことはあるが、ここは我慢だ。我慢。

「じゃあ、一夏？ その国家代表に候補をつけたら？」

「あ……そう言うことか！」

「そう言うことか、じゃねえ！ この馬鹿、大馬鹿、グレート・馬鹿！ ちょっと頭働かせて考えればすぐ分かるだろ！ 人にもものを訪ねる前に考えるって事を知らんのかお前はあつ！」

「あ……その、悪い」

「……極東の未開の島国とは思っていましたが、まさか……ここまで酷いとは思いませんでしたわ……まさかここまでとは……もしかして、この国にはテレビも新聞も無いのではなくて……？」

オルコットさんが怒りを通り越し呆れさえぶつ飛ばして、一夏にとっても残念なものを見る様な、憐れむ様な視線を向けている。もう、俺も一夏をフォロー出来ない……だけど、せめて……：オルコットさんの誤解だけでも解いておこう……。

「……オルコットさん。気持ちは分かるけど、ソレは違うから。一夏だけだから。一夏と同列に俺達を見ないで……」

「はあ……稀少な男性操縦者だと言うから、多少は知的な方だと思っていたのですが……期待外れですわ。烏丸絆さんあなたも……本来ならばわたくしのような有能な人間とクラスを同じくする事だけでも奇跡……：幸運でしてよ。その現実をもう少し理解して頂きたいのだから……？」

幸運：ねえ。さて、なんて答えるべきか：なるべく波風はたてないようにしたいな。

「おう、そいつはミラクルラッキーだな」

一夏、何でお前はそういつも…いや、分かってる、分かっているんだ。こいつとも付き合いは長い。悪気がないってことは分かっているんだ。

「……馬鹿にしていますの？」

「オルコットさん、コイツはただ単に素直なだけなんだよ。だから悪気があつた訳じゃないから誤解しないでやってくれ」

「まあ、庇いあつて随分と涙ぐましい友情ですわね。良いでしょう。わたくしは優秀ですから、あなたがたのような方相手でも優しくしてあげますわ。ISで分からないことがあれば……まあ、泣いて頼まれれば教えて差し上げてもよろしくてよ？ 何せ、わたくしは入試で教官を倒したエリートですから！」

「ん？ 入試つてあれか？ 教官を倒すやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

……なんだ？ 嫌な予感が…？

「それなら俺も絆も倒したぞ」

お前のあれは倒したつて言うのか？ いきなり突っ込んできたのをかわして、壁にぶち当たつて勝手に自滅しただけだろう？

もつとも俺も——一夏の時の失敗が元で、動きに精彩の欠けた殆ど動く状態の教官を倒したただけだから、実力とは言えないだろうけど…今重要なのはそこじゃない。

一夏：頼むからさらつと俺も巻き込まないでくれ…。

「わ、わたくしと織歌さんだけと聞きましたが？」

「女子では、って事じゃないか？」

「あ、あなたも倒しましたの!？」

えー…どうしよう、これ。

「えくと…」

「目を泳がせて居ないで答えなさい！」

「……はい。俺も、その…一応？」

「一応？ 一応ってどういう意味ですの!？」

「えーと、落ち着けよ、な？」

「そ、そうそう。オルコツトさん、ちよつと落ち着いて…ね？」

「こ、これが落ち着いていられ——」

そこで次の授業を開始するチャイムが鳴り響く。一夏はほつとした顔をしているが……一夏、オルコツトさんの性格を考えてみる。

「——っ！ また次の時間も来ますわ！ 覚悟しておきなさいー！」

覚悟って……何を覚悟すれば良いんだか…と、ため息をつきながら教科書やノートを並べ、授業の準備を終えると視線を前に向ける。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

教壇には今度は千冬さんが立っていた。山田先生は…教室の隅でノートをとる準備をしている。ああ、山田先生は教師に成り立ててで、教師見習いみたいな感じ何だろうか？

教えるのは上手かったから、後は自信がつけば良い教師になれるんじゃないだろうか。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出場する代表者を決

めるとしよう。クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を凶るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は対抗心を生む。一度決まると一年間の変更できないからそのつもりで」

……あれ？　なんだ、物凄く嫌な予感が……例えるなら不明ネクスト二機を撃破しに行ったら実は四機だった時みたいな。

待てよ。今、クラスで誰が一番強いとか良く分かってないよな？　って言うことは立候補者がいない場合、皆専用機持ちのオルカとオルコットさんを推薦するんじゃないか？

……オルコットさんは兎も角、オルカがクラス代表になることだけは阻止しないと……コイツの事だから面倒臭がつて絶対録な事にならない。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「じゃあじゃあ、私は絆くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「では候補者は織斑一夏と烏丸絆……他には居ないか？　自推他薦は問わないぞ」

「お、俺!？」

「な、なんで!？」

つい俺も一夏も立ち上がる。いや、予想外過ぎだろう。普通、こういうのは専用機を持つてる実力が確かそうな奴を推薦するべきじゃないか？

集まる視線が痛い。皆『世界でただ二人の男子だ。期待している』みたいな勝手なこと考えてるんじゃないだろうな。冗談じゃない。

「二人とも席につけ……邪魔だ。まあ、それだけクラスから信頼され期待されていると言うことだ。で、他には居ないのか？　居なければこ

の二人で決選投票に移るぞ」

相変わらず、千冬さんは一夏の操縦が上手いなあ…コイツなら、期待されてるとか信頼されてるって言えばやる気を出すだろうし。まあ、オルカじゃ無いだけましかな…後は俺にはならないように天に祈るしか無いか。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

…：…そうだ。まだ逃げる道があった。パンツと机を叩いて立ち上がったのはオルコットさんだ。プライドが高く自分の実力に自信を持っている彼女が、どの馬の骨とも分からないことが俺達が自分の上に立つ事を許せる筈がない。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんて良い恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにその様な屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?!」

…：…なんだろう。オルコットさんはプライドが高くて今時にありがちな、男に大して優越感を持つてるだけだと思ってたんだが…なんか違和感を感じるな。

「実力から行けば、私がクラス代表になるのは必然。ソレを物珍しいからといって極東の、それも雄猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

うーん…男を見下していると言うか…：…嫌ってる？

しかし雄猿ってのは流石に酷いな。

「良いですか!?! クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

不味い。やる気もなく話を聞いてニヤニヤ笑っていただけのオルカが、今の話を聞いて反応しやつがた。不味い。このままだと余計話がややこしくなる。一夏も見ればだんだんとボルテージが、上がっていつてる。

くそ、しょうがない。不本意だけど予先を変えるか――。

「大体、文化としても後進的な島国で暮らさなければならぬこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で――」

「ストップ。オルコツトさん。流石にそれ以上は聞き捨てならないな」

「あら？ 本当の事を言われて怒るとは、やはり知性の欠片も持ち――」

「高貴な者の責務……確か、オルコツトさんの国の言葉だと思っただけ」

「ッ！ ……そ、それが何か？」

「他人と他国を貶めて優越感に浸る――それが高貴な者の責務か。全く、生きやすそうで羨ましいよ。貴族って生き物は」

はあ…嫌われたかなあ？ 見ればオルカが驚いた顔をしている。誰のせいだと思ってるんだ、誰の。

「なっ………!? あ、あ、あ、あなた！ わたくしを侮辱しますの!?! わざわざ、わたくしの祖国の言葉まで使って！」

「本当の事を言っただけだろ…これ以上言い合っただけで仕方ない。そっちの流儀に合わせるよ。――決闘だ、セシリア・オルコツト」

決闘。その一言でオルコツトさんの纏っていた空気が――変わった。

先程の怒り心頭といった感じで取り乱していた姿からは想像も出ないような、静かな怒りと冷徹さを持った――戦士の顔に。

先程と怒りの質は違うが、本気で怒っているんだろう。さっきの侮

蔑し侮る様なモノではなく、自分と祖国を侮辱した敵に対する怒り。憎悪といっても良いかもしれない。

——俺はもしかしたら早まったかもしれない。困ったことになった。だが、もう止まらない。止められない。

だって——そんな表情カオされたらこっちも滾カオってくるだろう。

「……あなた。それは本気でおっしゃっていますの？」

「ああ、本気だ。一夏もそれで構わないか？」

「良いぜ。四の五の言うより分かりやすい。何より俺だって自分の国馬鹿にされて、腹が立ってたところなんだ。丁度良い」

「……意気込みは結構。ですが、わざと手を抜いて負けたりしたら——あなた方には先程のわたくしへの無礼を謝罪し、わたくしの小間使い……いえ、奴隷になって頂きますわ」

「なんだって良いさ。こっちは勝って、面目が保たれるなら、それで」
「ああ、その通りだ。それと、侮るなよ？ 俺も絆も真剣勝負で手を抜くほど腐カオっちゃいない」

全く……一夏も良い表情をするようになったな。俺はオルカとは違うってのに。余計決闘が楽しみで仕方無くなって来ただろうが。

「そう？ 何にせよ、丁度良い機会ですわ。このわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわ！」

「さて、話は纏カオまったな。それでは一週間後の月曜。放課後第三アリーナで行う。クラス代表は勝者が決定する——異論はないな？ 三名はそれぞれ準備をしておくように。それでは授業を始める」

一週間後が楽しみだ。何せ、ISを使った初の実戦だ。それもこの代表候補生と、この幼馴染みが相手なら——不足は無い。

……しかし、千冬さん。オルカはまだ分かりませんが、あなたまでそんな楽しそうな顔で俺と一夏を見ないでください。

mission 7 新たな生活、ルームメイトは誰？

「うぐぐぐぐう……」

放課後。一夏はぐったりと机の上に突っ伏してた。まあーつたく、そんなんでセシリアと決闘するとか良く言えたもんだよ。

「おい、一夏…初日からそれで一週間後の決闘大丈夫か？」

「いや、そうは言ってもな……大体、何で絆はついていけてるんだよ？」

「そりゃあ……俺はお前と違ってキツチリ参考書呼んで勉強してきたからな」

「くそ、裏切り者め……なあ、織歌ってテストパイロットやってるんだよな？」

「ん？ そうだけど？」

「オルエもんく俺にISの勉強を教えてください」

「ああ、それ無理だ」

「おい、何で絆まで一緒になって返事するんだよ？」

「いや、だって私、殆ど感覚でやってるから人に教えるの苦手だし……」

「何より考えてみる、一夏。こいつがそんなメンド臭いことすると思うか？」

うんうん。全くだ。何で私が一夏の勉強みてやらなきゃならないんだか。そもそも私自身筆記はギリギリだったの。その辺、流石は付き合い長いだけあって分かってるじゃない、キズナは。

「き、キズナ…お、お前は俺を見捨てないよな……？」

「ハイハイ、男の子なんだからそんな捨てられたチワワみたいな情けない顔をしない。そもそもアンタ、一週間後にはセシリアだけじゃなくキズナとも鬨うんでしょうが。敵に施しを求めて恥ずかしくないの？ 意地があんでしょー、男の子には？」

「そうは言ってもなあ……けどそう言われると俺にも意地が…むむむむ……」

「まあ、どうしても分からないところは俺も見てやるから頑張ろうぜ、一夏」

「まあーたアンタはそうやって甘やかして…そんなだからコイツ馬鹿のままなんだよ」

「ゲフツ！ くう…やっぱそう言ってくれるキズナには悪いけど今回は俺一人で…やっぱ俺にも意地が…」

「ストトップだ、二人とも。全く、一夏のその心意気は買うけどな…今回みたいなのは久しぶりだしな。お前ともなるべくイーブンな状態で真剣に闘りたいんだよ、俺も。」

「絆……」

「ただしISの基本的なとこと、お前が頑張ってもどうしても分からないところだけな。それに……」

「それに？」

「それでもし無様な闘いなんてしたら、その場で全殺ししてやる」

あーら…珍しい。キズナがこんなに闘る気になってるなんて…これなら私も立候補しとけば良かったかなあ。……やっぱ良いや、メンド臭いし。それにここなら機会は幾らでもあるでしょ。

「くくく…OK。分かった、キズナ。じゃあこの借りは来週の試合で纏めて返してやる！」

ふうーん…一夏もやる気だねえ。二人して拳ぶつけてイイ顔しちゃってさー…全く。暑苦しいったらないよ。…べ、別に羨ましくも負け惜しみでも無いからね！

良いんだ、お楽しみは後にとっておくから。

「織斑くん、絆くんまだいますかー？」

「およ？ マヤちゃんどーしたの？」

クラス副担任のマヤちゃんだ。キズナと一夏に用があったみたいだけど…入ってきた瞬間に「ま、マヤちゃ…？」とか言っただけでフリーズしてる。なんかあったのかな？

「そ、そんなことより！ 織斑くんと絆くんの寮での部屋割りが決まったので…えっとですね、これが二人に割り振られた部屋の鍵です」

そう言っただけで二人に鍵を渡すマヤちゃん。おや？ 今度は二人が揃ってフリーズしてるよ。

「ちよ、ちよつと待ってください！」

「や、山田先生？ 確か一週間は俺達自宅から通うって話じゃ…」

「そ、そう！ それに部屋も決まって無いって聞いたし荷物だつて…」
「いえ、そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを急遽無理矢理変更した見たいです。……二人ともその辺りの話を政府から聞いてます？」

二人にしか聞こえないように喋るマヤちゃん。まあ、私は近い場所にいるし、丸聞こえ何だけどき。しかし、政府：政府ねえ。あの自分の尻で椅子を磨くしか能のないクソツタレの無能で低能で役立たずのゴミ虫どもめ。思い出したらイライラしてきた。ああ、政府つてのはろくに情報統制すら取れない日本政府のことね？

二人がIS操縦できるってニュースが流れたあと、国中の変態科学者どもが家に押し寄せて来て、馬鹿の一つ覚えみたいに『お宅の絆くんの生体を調べさせてほしい』つて。

あの時は凄かったなあ。

どこに行っても科学者つて人種は変わらないなあつてキズナと呆れてたら：普段あんまり怒らないお父さんとお母さんがマジで怒り狂ってたからなあ。キズナはソレを見て複雑そうな顔してたね。嬉しいような申し訳ないような。素直に喜んできや良いのに。まあ、最終的には二人が暴れてるところに私とキズナも混ざったけどさ。

「そう言うわけで、政府の特命もあつて、とにかく寮に入れるのを優先したみたいです。一ヶ月もすればきちんと二人の部屋を用意できると思いますから、しばらくは我慢してください」

「二つ、つまり、暫くは知らない女の子と相部屋？」

おーおー：見るからに肩落としちゃつて…この二人ちゃんと付いてるのかね？ 何が…とは言わないけどさ？

「そ、そうなりますけど…だ、ダメですよ！ ルームメイトの子にへ、変なことしちゃ！」

マヤちゃんの目には、この見るからに落ち込んでる二人がそんな風に見えるのか。

「しませんよ！」

「……はあ。とにかく、部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないといけないですし、俺も絆も今日はもう帰っても良いですか？」
「ああ、いえ。荷物なら——」

「既に私が手配しておいた。ありがたいと思えよ、織斑」
「ど、どうもありがとうございます……」

ちーちゃんも相変わらずブラコンだなあ……行動早すぎるでしょ。

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯の充電器があればいいだろう」

わー、そして相変わらず凄い暴君。私だったら無理。せめて愛用のミュージックプレイヤーがないと退屈で死ぬる。

……私も随分変わったよねえ、昔と。お母さんの影響かな？

「それと、絆の方はご両親にお願いしておいた。感謝しておけよ。……お二人共、お前の事をそうとう気にかけていたぞ。そのせいか……荷物の量が結構な量になっていたが」

「そ、そうですか……」

全く。苦笑いしてるけど嬉しそうにしちゃってまあ。

「あ、それと……二人は大浴場は暫くは使えませんが、問題ないですよね？」

「え？ 俺、大浴場使いたかったんだけどなあ……」

「……なあ、さつき喋る前にモノを考えろって言ったばかりだろ……」
「なるほどねえ……一夏は私や箒と風呂に入りたいのかあ……このエロ一夏」

「い、いや、やっぱりいい！ 大浴場俺達だけで使えないなら、やっぱり使えなくてもいい！」

ブツ！

こ、コイツやっぱアフォだよ 変な誤解されて慌てるんだろうけど、この環境でこんな事言ったらどうなるか……今日一日で学ばなかったのか……ほんとアホだわー、コイツよ

「お、俺達だけ………も、もしかして織斑さんと絆くんってそ、そう言う……だ、ダメですよ！ そんな不健全なのは！」

「ちよっ!? 違う！ 違いますからー！」

「お、落ち着いて下さい山田先生！ 俺も一夏も至ってノーマルです！ てか、あなた教師でしょう!？」

「ねえ？ 聞いた？」

「うん、聞いた聞いた。やっぱり織斑くんと絆くんって……」

「必死に否定してる所が余計にあやしい」

「授業中や休み時間もやたら親しかったし……キズ×オリ……ありね」

「イヤイヤ、オリ×キズも……新しい、惹かれるわね」

「大至急、二人のこれまでの交遊関係と私生活を洗って！ 今すぐに

！ 費用は幾らかかろうと構わん！ 徹底的に洗い尽くせ！ 良い

か、命令はただ一つ。調査収集！ 調査収集だ!!」

おーおー盛り上がっちゃってまあ……さて、楽しそうだけど私は巻き込まれないうちに退散しよう。あ、そう言えばキズナと一夏の部屋聞いてないけど……まあ、また後で聞けばいいか。

今、私は寮の廊下を私が宛がわれた部屋に向かって歩いている。人生二度目の見知らぬ他人との共同生活。自分のルームメイトはどんなヤツだろう。

取り合えず、私と相部屋になった人間には御愁傷様と言っておこう。私は私自身、あんまり人付き合いが得意な方ではないと理解しているし、そもそも人に合わせるつもりもない。

まあ、気に食わないヤツで無ければそれでいいや。

逆ににこつちが気に入っても、相手がこつちを気に食わないってパターンもあるしね。アイツみたいに。

とかなんとか考えてたら、目的の場所に着いていた。……さて、ここが今日から暫くの私の部屋か。

「邪魔するよ」

——まあ、相手がどんなヤツだって大した違いなんて無い。

そうして、私は深く考えずに鍵を開け、部屋の中へ入っていった。

——全く、今日は散々でしたわ。

世にも珍しい男性のIS操縦者でしたが…やはり、所詮男は男。無知で愚かだとは思っていましたが、まさかあそこまで愚かとは。

「織斑一夏…」

わたしは知らず知らずのうちに名前を呟いていました。彼は愚かとしか言いようがありません。必読の参考書を古い電話帳と間違えて捨てるなど考えられないことですもの。いえ、それよりも代表候補生と言う単語すら知らないとは…もはや呆れすら通り越して怒りすら覚えます。

ただ、稀少な男性と言うだけでろくな知識もなく、本来であれば優秀な——優秀な者の中から選ばれたものが通うことを許されるこの学園に——ただ男あるからと、ソレだけの理由で居ることが我慢なりません。

——そして何よりも。

「烏丸…絆」

今思い出しても、本当に腹立たしい限り。最初、多少は見所があると思っていました。態度には不満が残りましたが、それでも分と言うものを弁えている…そう感じました。

——しかし、それも所詮はわたくしの買い被り過ぎでした。

『高貴なる者の責務……確か、オルコットさんの国の言葉だよな？』

ただ、物珍しさからクラス中の関心を買って推薦されただけだといえますのに、何を勘違いなさったのか——。

『他人と他国を貶めて優越感に浸る——それが高貴な者の責務か。全く、生きやすそうで羨ましいよ。貴族って言う生き物は』

——わたくしの国の言葉で、よりにもよってこのわたくしに貴族としての在り方を問い、このわたくしを何も知らない分際で侮辱して—

『本当の事を言っただまでだろ…これ以上言い合っただって仕方ない。そっちの流儀に合わせるよ。——決闘だ、セシリア・オルコット』

——あまつさえ、身の程知らずにも『決闘』などと！

許せません。許せる訳がありません。わたくしが——わたくしが両親亡きあとに相続した、莫大な遺産とオルコットの家名。ソレをあの意地汚いハイエナ共から守るために、わたくしがどれだけの苦労したか……どれ程の努力を持って、この代表候補生の立場を勝ち得たか。

ソレを全く知りもしないであろうあの男に侮辱され、よりもよつて……そのわたくしに軽々しく『決闘』などと！

そして、何よりも——そう、何よりも気に入らないのはあの男のあの『眼』。

あの時のわたくしは——今思い起こすと恥ずかしい話ではありませんが、感情の制御が出来ず、本気で殺意を抱きました。ですが……ですが、あろうことか、あの男はソレを受けても全く動じず平然とし——笑ったのです。

クラス中で何人氣付けたか……それさえ分からないほどの微妙な表情の変化。しかし、あの男は確かに笑っていたのです。楽しそうに。

そう、その眼はまるで——そう、まるで数多の激戦をくぐり抜けた、歴戦の戦士のような——

ギリイツ

やはり、気に入りません。わたくしと違い、平和な島国で平凡な日々を過ごして来た男に——あんな眼ができるはずが無いのです。

——そう、いつもいつも女性の顔色ばかり伺う情けない男に、あんな表情などできる筈がありません。

——証明、しなければ。

このわたくしのブルー・ティーズと、このわたくし……セシリア・オルコットの實力を。

そして、あの男に刻み込まなければ。セシリア・オルコットの名と、わたくしに挑んだ愚かしさを。

……あら？ どなたかいらつしやった様ですわね……？

誰でしょう……ああ、ルームメイトの方でしょうか？

——この怒りは今は胸の内にはしまい、今はこのルームメイトを歓迎しましょう。

なぜならこのわたくし、セシリア・オルコットは何時如何なる時でも、優雅に、気品に、誇りに満ちてなければならぬのですから。

「全く、今日一日は大変だったなあ……。なあ、絆。これから俺達、この学園でやってけるかなあ……」

教えられた部屋に向かって歩く俺達の足取りは、非常に重いものだった。

なんと言うか……疲れた。その一言につきる。あのあと教室は収まりがつかないほど盛り上がり、結局俺達は逃げるように教室から抜け出してきた……。女子ってコワイ。

「なるべく上手くやってくしかないだろ……。一夏」

「だよなあ……」

「はあ……」

溜め息だつてつきたくもなる。アグレッシブ過ぎるだろう、この女子は。

「……ん？ どうも、ここが俺の部屋らしい」

「あ、ここなのか？」

俺の割り振られた部屋の前に、無事つけたらしい。

「ああ、一夏？ 明日朝のトレーニングどうする？」

「もちろん付き合うさ。明日からまたよろしくな！」

「ああ、分かった。そう言えば一夏は1025室だったよな？」

「おう、何時でも遊びに来てくれよ！」

「そっちもな。じゃ、また明日」

暫く一夏を見送ってから、俺は扉をノックした。暫く待つこと数秒。部屋の中から返答があった。

『ちよつとお待ちください』

……はて？　なんか何処かで聞いたような声だけど……？

「お待たせしました。ルームメイトの方でしょうか？　わたくしはセシ……」

「……………」

これは何かの嫌がらせですか、千冬さん。流石にこの仕打ちは酷くないですか？

扉を開けて出てきたのは…オルコットさんだった。

俺とオルコットさんの時が止まる事数秒。

オルコットさんが固まった笑顔のまま扉を閉めて……………ガチャツと鍵がかかる音がした。

「……………」

もう一度鍵に書かれた番号と、部屋の番号を確認する。……何度見直してもここが俺の部屋である事実は変わらないらしい。当たり前だが。

「はあ……」

一つ、溜め息を短くこぼすと、俺は意を決して扉にかけられた鍵を開け、部屋の中へ入る。やっぱり目の前にはオルコットさん。顔は笑ってるが、ぎこちなくヒクヒクしている。非常に気まずい。

「あら？　鍵は閉めたはずなのですが……………不法侵入は犯罪と言うことも理解できない程あなたは低脳でして？」

「不法侵入じゃない……………ほら」

言って、オルコットさんに鍵に書かれた部屋番号を見せる。それを見て顔をしかめるオルコットさん。

「……………わざわざ盗んで来ましたの？　なるほど、決闘ではわたくしに勝つ自信が無いものですから、決闘前に闇討ちに来ましたのね？　あなたには誇りも御座いませんか？」

「いや、盗んだんでも闇討ちに来た分けでもなくて……………」

「まさか、ルームメイトだ、とでも？　流石にそれはあり得ませんわね。悪い冗談、できの悪い悪夢ですわ」

「……………」

「……………何故、黙っているのですか？」

「いや、全く持ってその通りで……その、今日から暫くよろしくお願い
します……?」

そう言つて頭を下げる。俺は何で最後疑問系になったんだろう。

「あらそうでしたのそれはそれはご丁寧にこちらこそよろしくお願い
いたしますわ——」

そう言つて頭を下げるオルコットさん……良かつた。概ね好意
的に受け入れられ——。

「——なんて、言うわけ無いでしょう! あ、あああ、あなたがルーム
メイト!? よりにもよつてあなたが!? あああ、あり、あり得ません
わ!!」

——る訳無いよねー。

扉はしつかり閉めておいた。あとはこの部屋の防音性能に期待し
よう。

「な、なあんであなたが! よりにもよつてあなたなんですの!?
何故!」

「お……落ち着いて、オルコットさん。落ち着いて話し合つて……せめ
て妥協点くらいは決めよう!」

「お、おち?! 落ち着いて居られる訳が無いでしょう! ふざけない
で下さい! 先程あれほどわたくしを侮辱した男を前に、落ち着ける
訳が無いでしょう! そ、そもそも…何故、あなたはそうも落ち着い
て居るのですか、ににに、憎たらしい!」

もう、オルコットさんはキーンツ!つて感じになつて俺の襟首
掴んでブンブンブン振り回してくる始末で……駄目だ。とても
じゃないが話になりそうにない。

仕方がない。今日は千冬さんに部屋割りを變えてもらう相談して、
駄目そうなら何処かで野宿でもしよう。

そう決めて部屋を出ていこうとしたら——
「キャッ!」

オルコットさんがバランスを崩して転けた。俺は慌ててオルコッ
トさんの腰に手を回して抱き止め、そのまま一緒に床に——。
ドゴスウツ!

——倒れたと思った瞬間、俺の目から火花が散った。
突然の痛みに俺は自分の頭を抱えた。

「——い」
「い？」

幸い、オルコツトさんは抱き止めたのが幸いしたのか、床にへたりこみ呆然とした顔でこつちを見上げている。パツと見、怪我はない。うん——だったら遠慮はいらないな。

「——いっつつつつつつつてええええええええええーっ！」

俺は自分のデコを押さえて、恥も外聞もなく床の上を足をばたつかせながら転がりまわった。例えるなら、殺虫剤を吹きかけられたアレの様に悶えてる。いや、マジで痛いんだって。

「ツ！ ど、どうなさいましたの？」

俺の奇声と行動に一瞬ビクツツと体を震わせると、何が起こったのかわからないといった風に俺に聞いてくるオルコツトさん。

「て、テーブルうううう！ あ、頭！ 頭がわ、割れるうううう！」

「……はい？ テーブル？ 頭がどうし……あ、あなた!? あなたのおでこから血が流れてるじゃありませんか!? まさか、あなた、テーブルの角でおでこぶつけてしまいましたの!?!」

「え？ 血？ ちよ!? ま、マジでえツ!?!」

「わたくしのハンカチをお貸ししますから、それで頭を押さえてあなたはさつきと保健室に……いえ、ぶつけたのは頭部の様ですし、わくしが先生を呼んできますから、あなたはそこで大人しくしてなさい!」

さつきまでの空気はどこへやら。突然の事態にかえって冷静になれたんだろう。意外と優しいところもあるじゃないか。

「イテテテ……あークツソいてえ……ちよつと良いか、オルコツトさん？」

「まだ何か? ……それと下品ですわよ」

「あー、そりや悪かった。んで……そつちは怪我無い？」

「あ、あなたのような見るからに怪我人という人に心配されるいわれはありませんわー!」

顔を真っ赤にして否定して……………まあ、確かに言う通りだと思うと、つい笑ってしまおう。

「そっか、良かった」

「……………へんな方ですわね」

「ああ、あともうひとつ」

「……………まだ何かあるんですの？」

「ありがとう、オルコットさん」

「……………ッ！」

最後の言葉を聞くと、オルコットさんは走って行ってしまった。俺の怪我そんなにひどく見えるのか？

自分じゃそんな大怪我って感覚は無いんだが……………まあ、良いか。

「それで……………あなたはわたくしに貸しを作ったつもりなのかしら？」

幸い、この男の傷は大した事は無かったようです。

——まさかこんな男に庇われた挙げ句負傷させてしまうとは……………このセシリア・オルコット、一生の不覚ですわ。

「え？ いや、そう言うわけでは無いんだけど…」

何よりも気に入らないのは、先程やって来た保健室の先生にどうしてこうなったか理由を尋ねられた際に、この男は何のつもりか『ちよつと躓いて転んだ先にテーブルが……………』などと答えたのです。

——男のくせに。

それを盾に取って、この部屋に居座ろうものでしたらまだ可愛げもあつたでしょうが——。

「さて、それじゃあ……………」

そう言うと、彼は部屋のすみにある段ボール箱から着替えを取り出すと部屋を出ていこうとし——

「お待ちなさい。どちらへ行くつもりですか？」

「え？ いや、オルコットさんは俺の事嫌いだろうか？ だから出てい

こうと……」

と、こんなことを言うのです。

これでは、わたくしがただ駄々をこねる子供のようにありませんか！

「……お待ちなさい。確かにわたくしの敵であるとはいえ、怪我人を放り出すなどとオルコットの名を汚す様な真似を、あなたはこのわたくし、セシリア・オルコットにさせるつもりですか？」

「え？ ……それじゃあ？」

「ええ。非常に不本意ではありますが……あたなの同室を、このわたくしセシリア・オルコットと同室することを、このわたくしの寛大な心で許可しましょう。……光栄に思いなさい。た、但し！ 不埒な真似をするようでしたら容赦は致しませんわ！」

「……そっか、ありがとう。それじゃ、これから暫くの間よろしく。オルコットさん」

……全く、本当に気に食わない、変な男ですこと。

まあ、良いでしょう。わたくしの実力の証明も先程の制裁も——全ては、来週の決闘で。その間位は……せめて穏やかに過ごさせてあげられるのも、まあ、悪くはないでしょう。

ですが——その時が来たら。

容赦なく教えて差し上げましょう。わたくしに挑んだ愚かさど、ご自分の身の程を。

部屋に入ると、そこには……

「あゝ、おるるんだ〜」

なんか、喋る着ぐるみがいた。

え？ 何で縫いぐるみ……いや、着てるから着ぐるみ？ まさか、それ私服？ イヤイヤイヤ、流石にそれは無いでしょ私。しっかりしろ私。……でも現に着てるしなあ。って言うか、この子もしかして私のルームメイト？ マジで？ イヤイヤイヤ、気に食わない

ようなヤツじやなきやどんなのだって良かったけど、これには流石の織歌さんも予想外だよ。予想の斜め上行ってるよ。って言うか、サイズ合って無いじゃん。袖ダボダボじゃん。って言うか、それは狐？

狐の着ぐるみなの？ 素材がちっこいから、袖ダボダボなのも可愛くて似合ってるっちゃ似合ってるけど、この子女子高生だよ？ 女子高生でそのセンスってどうなの？ って、違う違う今重要なのはそこじゃない。あまりに予想外すぎて突っ込みどころが多いからって、今私は頭のなかで何回「って言うか」って言った……じゃ無くて。

「お……おるるん？ え？ それって私？」

「そだよ。おるかだから、おるるん。あ、もしかして、おるるんが私のルームメイトさんだったり？」

なんだろう。ファッションセンスも独特だけど、かなり性格も特殊らしい。人懐っこい子だな。

「や、まあ……一応、この部屋の住人なんだけど……私の事知ってるってことは、アンタ一組の子なの？」

「そーだよ。あれ？ おるるん、もしかして私の事知らないの？ せっかく自己紹介もしたのに？」

非難がましそうな目でこつちを……微妙に目が潤んでるし……小動物見たいで可愛いな。

「や、ごめん。基本的に私って他人の自己紹介とか聞かないから……で、アンタ誰？」

プクって頬つぺた膨らませて……多分怒ってるんだろうけど……全然怖くないどころか可愛いな。

「む……はあ。ま、おるるんはそんな人だと思ってたけど、思ってたけども……私は、のほけほんね布仏本音。本音で良いよ。

……今度は大丈夫だよ？」

「OK。これからよろしくね、本音。私の事もお」
「うんうん、これからよろしくね、おるるん」

……のんびりしてるだけかと思っただけど。結構、私の強い子なのかもしれない。言外に私の希望を却下してくるあたり。まあ、呼び方なんて好きに呼んだら良い。ずっとカラードのリンクスとか首輪付

きつて呼ばれるよりマシだ。多分。

「ああ、そうだ。本音はもうシャワー浴びた？ 私はこれから荷ほどきしなきゃいけないから」

「じゃあ、先にお風呂頂いちゃいます」

「悪いね。じゃあサクツと終わらせちゃいましょーかね」

まあ、荷物って言っても大して無いんだけどね。精々着替えと日常必需品とミュージックプレイヤー位だし。さっさと終わらせて歌でも聞こうか。

「~~~~~♪」

いやあ、本音がシャワー浴びにいつてくれて良かった。いたらこんな風に歌えないしねえ。好きな曲を聞いてるとどうしても歌いたくなっちゃうんだよね…ひよつとして私、お母さんに洗脳されてる？

……つと、どうやら本音が出てきたみたい。じゃあ、私もシャワー浴びる準備しようかな。

「あれ〜？ もう歌うのやめちゃったの〜？」

ヤバ。聞こえてたの？ 失敗したなあ…うるさく無かったかな？

「もつと聴いてたかったのに。おるるんの意地悪〜」

あら？ 意外と好評だった？ けど自分の歌を誉められるってなんか恥ずかしいな。まあ、悪い気はしないけど。

「いや、本音が出てきたなら私も入ろうかなって」

「あ、それじゃ仕方ないよね。じゃあお風呂上がったらまた聞かせて〜」

「え？ いや、それちよつと、かなり恥ずかしいからやめて」

「ええ〜？ おるるんの歌声、綺麗で優しかったし〜恥ずかしがる事なんてないと思うけどな〜？」

「や、人前で歌うのはちよつと…てか、うるさくなかった？」

おい、何で私こんな素直に喋ってるんだ？

なんか本音と喋っているとペースが……布仏本音、恐ろしい子。

「ええ〜？ そんなことないよ。もつたない〜」

「や、勿体無いつて言われても…」

……何でそこで瞳を潤めるの!?　べ、別に今知り合ったばかりの子が、泣こうが喚こうが私の知ったこつちや無いし!　で、でも何なの、この妙な罪悪感は……?」

本音………なんて恐ろしい子。

「……………あゝ……………じゃあ、一曲だけ。それで良い?」

「やったゝ。おるるん大好きゝ」

人懐っこい不思議な子だなあ……………。正直、ちよつと……………いや、こういうタイプには初めて会ったけど、かなり苦手かも。

「そう言えばゝ、さつき歌ってたのは何て曲ゝ?」

「……………タイトルは『キミの記憶』。私の、お気に入り」

それだけ言つて、入浴準備を終えた私はバスルームに逃げ込んだ。だって、なんか気恥ずかしいし。本音はちよつと苦手かもだし。

でもまあ……………本音がルームメイトだったつてのは、悪くなかったかもね。

「おるるんの歌声……………とつても綺麗で優しかったけど……………とつても悲しそうだったなあ……………悪いことしちゃったかな?　でも聴きたいし……………むむむむうゝ。あんまり気にしちゃうのも……………おるるんに悪いし……………折角だし……………純粋に堪能させてもらおうゝ♪」

そう、本音が呟いた言葉は、バスルームにいた織歌には聞こえなかった。

Extra mission01 アナタの名前は？

…どこだ、ここは？

私は…生きているのか？

…くそ、頭が割れそうだ。何だ、この痛み…AMSに負荷がかかりすぎたか？

何だ、この知識は…インフィニット・ストラトス？

篠ノ乃東？

白騎士？

織斑千冬？

——遺伝子強化試験体？

そんなもの、私は知らない…クソ、やめろ！

なんだこの情報は！ 一体、何が起こっているというのだ!?

私はあの場で、リンクスとして死んだはずだ！

これ以上、私に何をさせるつもりだ…

そこで、意識は途切れた。

ある日、某国某所にあつた研究所が何者かに襲撃され、跡形も無く消滅すると言う事件が起きた。研究所で行われていた研究が生命倫理に関わる非人道的な内容であつたこと、某国自体もその存在をもて甘し疎ましく思っていた事も加味され、その事件は決して陽の目を浴びること無く、秘密裏にその研究所が存在していた事実ごと世界から

抹消された。

そして後日。某所にある研究所、所内。

「ね—ま。どう—ら目を—れた——」

こ…え？ 声…か？

誰の…？

「おおお!! ホン——く——ん？ たば——んもすぐ——ちいくよ
！」

二人…？ ここは…どこだ？

そうして、私はゆつくりと目を開けた。眩しい——それが最初に感じた事だった。

……何だ、これは？ 液体？

今、私は液体の中にいるのか？

ゆつくりと手を前に出す。差し出した手はゆつくりと水の抵抗を受けながら前に進み…見えない何かに阻まれた。恐らく、ガラスか何かか——そして、もう一度当たりを見回すと、私は液体の満たされた円筒形の容器——カプセルの中で、仰向けに寝かされている事を理解した。口元にはマスクのようなモノを装着させられ、そこから一本のチューブが私の頭上へと延びていた。恐らく、これで私に酸素などを供給しているのだろう。…しかし、どこだ、ここは？

円筒形の容器の外を、注意深く観察して見れば、いくつもコードやパイプやら配線の類いが縦横無尽に部屋を埋め尽くしている…研究所か。しかし何処の研究所だ？

しかも、私を治療し、奴等に何の得がある…？

プシュツ

突然研究室の扉が開いた。入ってきたのは二人の女。

無表情な銀髪の方は取り合えず置いておくとして……なんだ、この

頭から触覚を生やしたイカれた格好の女は？

馬鹿なのか？ 羞恥心と言うものがないのか？

『おおー！ 起きてる起きてる！ ねえねえ！ 皆のアイドル束さんだよー！ キミ、束さんのことわかるなー？ ねえねえ、なんか言おうよー。折角、束さんがキミのこと助け出したんだからさー』

イカレ女は私が收容されているカプセルに近付くと、一人で勝手に喋って捲し立てている。鬱陶しい。しかし、今コイツはコイツが私を助けたと言わなかったか？

と言うか、答えられる訳がないだろう。少し考えれば、私が喋れない事にも気付くだろうが。貴様、考えることさえ放棄したか、このやかましいイカレ女め。

私は黙って口許に指を持っていき、口に装着されているマスクを指差した。

『おお、ごめんごめん。流石の束さんもソレには気付かなかったよ。すぐ出してあげるからちよつと待っててね〜♪』

何が流石だ。貴様、脳ミソまでカビたか？

……ちよつと待て。貴様が今、その手に持っているのはなんだ？ 私にはハンマーか何かのように見えるんだが？

普通、こう言ったものを開ける場合、スイツチ一つで中の液体を抜いてから、ガラスが開いていくものでは……おい、何を思いつき振りかぶっている？

まさか貴様、それでこのカプセルを叩き壊すつもりではないだろうな？

冗談では……！ おい馬鹿やめ——

バキツ！バシヤアアアア……

「ハア、ハア……ば、馬鹿か貴様は？ どこに医療用カプセルを物理的に壊して開ける馬鹿がいる！ 脳ミソまでカビたか、貴様!？」

「いやー、ゴメンゴメン。なんか、キミの顔を見てたらイライラしてきちゃって…普通に開けるのが嫌になったから叩き壊しちゃった、ぶい♪」

なんだ、コイツは…予想以上のキチ○イ女ではないか！

つい私は頭を押さえる…本当に頭が痛い…二つの意味で。

取り合えず…何なんだ、このキチ○イ女は…何故私を助けたか…ソレだけでも確めなければ。

「それで…貴様は一体何者だ？ 何故私を助けた？ 放っておけば私はアルテリアで勝手に死んでいただろう。何故、私を助けた…貴様達企業連はまた私を利用するつもりか？」

「……………」

「何故、助けた？ 何故、あのままりンクスとして死なせてくれなかった…。——さて、そうだ。クローズ・プランは？ クローズ・プランは、成就したのか？ …アサルト・セルは取り払われたのか？

人類は…宇宙への道を切り開けたのか？」

イカレ女は何故か黙ってこちらを見ている。それも興味深そうに。一体、何を考えている？

「……ねえ？ 起きたばかりのキミに聞くのも変な話だけどき…：篠ノ之束、本当に知らない？」

ようやく返ってきたのは全く意味の分からない質問。そんな名前、私を知るはずが——。

「——待て。今、貴様は確かに篠ノ之束と言ったな？ 知らないが——確かに知っている。……どういう事だ？ 篠ノ之束などという名前、私の記憶が確かならば会ったことも聞いたこともないはず——インフィニット・ストラトスの開発者？ 無限の成層圏とは…：大層な名前だがそんなもの聞いたことも…：いや、待て。なんだこれは？ 大気圏外での運用を想定したパワードスーツ…：女にしか扱えんこんな欠陥品が、何故軍事利用されている？ ネクストやアームズ・フォートの方が遥かに性能は上だろうに…：いや、なんだこの知識は？」

次々と脳内で再生される知らないはずの言葉の数々。それだけではない。私を知る歴史とは違う——いや、似かよった部分もあるが、確かに違う知らない歴史。

まるで無理矢理詰め込んだ様な……自分のモノである実感がまるでわからない、他人のモノである様な知識。

「なんだ……？ 一体、何が起こっている？」

「脳への直接的なデータ送信による短期強制学習システム……全く、不細工な発明だけでもまさか成功してるなんてね……やっぱリアソコは潰しておいて正解だったねー」

「貴様……一体、何を知っている？」

「あえて言うなら……何もかも？」

「貴様が私に何か施したのか!？」

「いやー？ 束さんがやったのは精々、キミを造った研究所の抹殺とキミの治療と……キミの記憶を覗いた位かな？」

この女……今さらつと飛んでもないことを抜かしたぞ。私の記憶を覗いただと？

イカレているとは思っていたが予想以上のイカレ具合だな。

いや、それ以上に——。

「今——貴様は、研究所を抹殺したと言ったな？ 私を造った研究所を——と、確かに、そう言ったな？」

イカレ女……篠ノ之束は、私の言葉を聞くと不敵に笑った。

「言ったねえ。確かに言ったよ。じゃあ、何処から説明しようか？」

遺伝子強化試験体から？ ああ、それよりも前に……キミってさ、パラレルワールドとか転生とか信じる？ つて言うか知ってるかな？？」

そうして、篠ノ之束から聞き出したのは、目の前のこの女以上にイカレた事実。私は遺伝子強化試験体などと言う試験管ベビー……俗にデザインチャイルドなどと呼ばれるものらしい。つまり、遺伝子強化試験体とは、生まれる遙か前、卵子と精子が結び付くよりも前から遺伝子に手を加え、加え続け、かつ状況に左右される不安定な母体という不確定要素すら排除した完全人工出産——正直、出産という

表現すら憚れる強化人間製造法、ソレによつて生まれたもの——いや、造られたモノを指す。

もつとも、私の場合は付け加えて過剰なナノマシンの投与などで最早遺伝子強化試験体と呼ぶのすら生温いらしい。

具体的に例を挙げるなら……肉体の最適化および変質、脳への致命的なダメージと大幅な欠損以外はほぼ再生可能な再生能力。活性化された脳細胞による驚異的な記憶力、人間の限界を超えた反応速度、病気（細菌及び精神的な疾患含むほぼ全て）・薬物全般に対する耐性と肉体の劣化の克服。しかも、そのナノマシンの一部には自己進化機能が搭載されている——らしい。

まあ、早い話が体の良いモルモットと言うわけか、私は。

ただ当然デメリットもあり、この肉体はかなり燃費が悪いそうさ。何よりも過剰に投与されたナノマシンが暴走した場合、何が起きるかはこの女も、私を製造したも達でさえ想像がつかないらしい。ふん……造れたからからと何でもぶち込めば良いというものでもあるまいに、変態科学者供め。

——しかし、まあ最早どうでも良いか。

そう、この世界での私の出生など、もはやどうでも良い。

私にとつて、もつとも重要であることは——言うまでも無く、最後のORCAへと託したクローズ・プランの成否。そして、あの世界の人類は、果たして——宇宙への途を、切り開けたのか。

その結果は、最早私には知るよしも、知るすべすら無い。

この世界へ、転生してしまった私には……。

全てが、空虚だ。他に言い表しようがない。

私を造り出した者達を嫌悪し、侮蔑する事はあろうと憎悪も、一片の怒りすら抱けない程には。

「……どんなに取り繕おうと、所詮は大量虐殺の扇動者か。ならば——これは私に対する罰か」

「さあ？ それは流石の束さんにも分からないよ。それで、キミはこれからどうするつもり？」

私の独り言を、この女はどう受け取ったのか……どちらでもあり

それで、どちらでも無さそうなその返答。

——それこそどうでも良い話か。

私は篠ノ之束に視線すら向けず、ただありのままに、素直に無感情に自分のこれからについて答える。

「……別に。何もするつもりはない。貴様の好きにすれば良い。貴様の話によれば、私はこの世界で偶然、奇跡的な偶発で造られた『三人目の男性IS操縦者』なんだろう？ 解剖して調べるなり、勝手にやれば良い」

「え？ ホントに良いの!?!」

答えを聞いた篠ノ之束は、子供のように目を光らせて私を見つめている。やはり、所詮科学者など何処でも同じか……この下衆め。

——だが、まあ良い。リンクスとして逝けなかった事は心残りだが……最早、自身の命などに未練はない。

だが、次に篠ノ之束の口から発せられたのは、予想外の言葉だった。

「じゃあ、じゃあじゃあ、キミには束さんが宇宙に行くのを手伝って欲しいな!」

「は……? なんだと?」

今——この女は宇宙へ行く手伝いをしろと言ったのか?

この——私に?」

最悪の反動勢力ORCA旅団の団長にして、最低の扇動家である、この私に?」

「束さんはキミを助けた。かつての絶望的な世界で宇宙への途を切り開こうとしたキミを。そう、宇宙に行きたい束さんが! これはもう、運命ってヤツじゃないかな?」

そう言っ手て手を差し出してくる篠ノ之束。私は、この手をどうするべきか——。

「ならば、結果も知っているだろう。世界を敵に回したあげく……結局、私は最後に敗れ——結末すら見届けられずに託す事になった。その最低の結末を」

「分かっているないねえ。束さん、キミはもうちょっと賢いと思ったんだけど……だからこそだよ。ハッキリ言って、私は世界全てを敵

に回してでも宇宙へ行きたい覚悟がある。そんな私を応援してくれる友達のためにも。何より、世界全てが相手でも勝てる自信がある」

「ならば、私など貴様には必要ないだろうか？」

「そんなことない。世界に一度負けたキミだからこそ、東さんを手伝うのに相応しいんだよ。……良いかな？ 東さんにはキミが必要なんだよ。人の事を理解できない私にはキミのその知識と、何よりもその経験が。篠ノ之東では決して得がたい、その敗北の経験が」

決して得がたい、敗北の経験とはな……。どれだけ自信過剰なのだ、この女は。しかし、この女の言うことはあながち嘘ではないのかもしれない。しかし、だからこそ脆い。そう感じる。

——そして、私はフン…と鼻で笑う。

宇宙——か。そう言えば……。何処かの戦闘狂が言っていたな。

『アンタら人類の黄金の時代のため、とか御大層な 事を抜かしてるけど、語ってる時はまるで、夢に恋するガキ見たいに目を輝かしちゃってさー♪』

まさか——私もあの時はこの女のような目をしていただけだろうか？

だとするなら、確かに彼女が言っていた言葉にも頷ける。確かにこれは——夢見る子供のソレだ。

「ククク…そうか。随分と恥ずかしい顔をしていた訳か、私は」

「ッ!? へえ…キミはそんな顔も出来るんだね？ 東さん、ちーちゃん達に会ってなかったらイチコロだったかも。で、ソレはなんの話？」

「なに…随分と昔の話だ。気にするな。それよりも貴様…いや、東。分かっているだろうな？ 私がその手を取るこの意味を。下手な悪魔との契約より質が悪いぞ？」

「アハハハハ、キミは冗談も上手いんだねえ♪ 悪魔？ ソレはキミと東さんどつちがかな？ ちなみに悪魔程度とは、東さんは契約なんて結ばないし、結ぶつもりはないよ？」

「悪魔程度とはな。悪くない認識だ。つまり、私のことを悪魔以上には見てくれている…という訳か。気に入ったぞ、天災東」

「うふふふふ♪ 東さん、誉められちゃった♪ ソレで？ キミ

のことはなんて呼んだらいい？ カラードのランク1？ それとも史上最悪の反動勢力の団長？」

そう言って笑っている束の手に、私は手を伸ばす。

これで——契約は成立だ。かつてのランク1でも、ORCA旅団の団長でもない、ただの一人のリンクスでしかない私と。

「オツツダルヴァも、テルミドールも既に死んだ。ここにいるのは——」

そして、私は私の新たな名前を告げ、束の手を取る。

「そう、ここにいるのはただのリンクス……レナード……レナード・ベルリオーズだ」

暫くして。

「く……なんだこれは!？」

「何って……くーちゃんの手料理。美味しいでしょ〜♪」

「束……貴様、イカれてるイカれてると思っていたが、味覚まで腐って居たか、貴様!」

私たちは食卓を囲っていたのだが……だが。

「クロエ・クロニクル、貴様もだ! 貴様はこれを旨いと思っているのか? 見た目からして可笑しいだろう! そもそも、どう調理すれば味から素材の原型すら無くせる。天然食材を使って、よくここまでのモノを作れたな、貴様。調理場に迷い混んだ素人か、貴様? 貴様には下働きが似合いだ。料理人を名乗るなよ、クズが」

全く、なぜこんなモノを……平然と食える二人の味覚はさぞぶっ壊れていることだろう。これを完食だけはした自分を褒め称えたいところだ。

「全く……酷いよね、くーちゃん。くーちゃんが端正込めて造ったものなら、束さんは何でも食べられるからね〜だから束さんはどんな味でも平気だよ〜♪ くーちゃんの愛情が最大の調味料だから、なくんて言ってみたり♪」

おい、さりげなく止めを刺したな貴様。クロニクルが泣き始めたぞ。

「フンツ………貴様の味覚に巻き込まれるのはごめんだ。明日からは調理場には私が立つ。クロニクル、貴様は手伝いでもしながら勉強してもらうぞ。……まあ、手伝いなど、空気でも構わんがな。貴様には料理の現実ってヤツを教えてやる」

しかし、その後。結局私はクロニクルに家事全般を叩き込むことになった。

t u r n o l

『家政婦 の 生まれた日』

E N D

mission 8 幼馴染みと気になるIS

翌朝、IS学園グラウンド——その片隅。

そこで顔を会わせる俺達四人——額にデカイ絆創膏を張った俺と、なんかくたびれた感じの一夏と、微妙に気まずそうな箒と、心なしか疲れてる様なオルカだ。

……ドイツもこいつも何があった？

オルカと箒はともかく……一夏、お前はまたなにかやらかしたのか？

「なあ」

「一夏」

「絆」

「何があつた？」

取り合えず……俺は自分の事情を説明した。ちよつとだけ事情を省いて。いや、躓いて転んでテーブルの角に頭をぶつけたのは事実だから、嘘は言っていない。オルコツトさんと同室だって事は伏せたが。

そしたらオルカのヤツは腹を抱えて爆笑し始めた……いや、分かってたよ。分かっているんだけど、それと実際に目にしてムカつくのは別物だよな？

さて、次に一夏の事情を聞いたんだが……。

「いや、その……俺は箒と同室で……」

「OK、分かった。もう皆まで言うな。把握した」

「だーから箒も何か気まずそうだったのか……このラキスケ一夏」

「ゲブハッ！」

一夏に痛恨のダメージ。

「……」

箒は顔を赤くしてうつ向いている。……コイツら分かりやすすぎるだろう。

「……だから箒もいたのか。でもまあ、ちょうど良いしペアに別れ

てまずはストレッチから始めるか」

「オーケえ。そんじゃ、私は箒と組むよ」

まあ、無難だな。じゃあ俺は一夏と…………。

「……………んなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい、箒さんごめんなさいノックしなかつた俺が悪かつたのでもう木刀は勘弁してください何で木刀で木製の扉貫通できるんですか俺は鞆のなかの竹刀を取ろうとしただけなんです下着まで抜き取る気は無かつたんですごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……………ブツブツブツブツ」

……………恐らく、昨日の事がフラッシュバックしたんだろう。一夏はハイライトを失った焦点の合っていない目で何処とも分らないところを見つめてひたすらブツブツ呟いている。まずい、早く一夏をこっちに呼び戻さなければ。

「おい！… しっかりしろ、一夏！… おい！」

俺は一夏の肩を強く掴んで前後にブンブン振り回す。

「ごめんなさいごめんなさい……………ハッ！ わ、悪い絆。も、もう大丈夫だ」

良かった、普段の一夏だ。目の焦点も戻ってるしもう大丈夫だろう。

「一夏、昨日何があつたかは聞かないでおくし、忘れろとも言わない。だけどな、共同生活するんだからノック位しろ、な？」

「あ、ああ……………そ、ソレで今何やってんだ？」

「ペアに別れてストレッチだ。取り合えず一夏は少しでも体を動かして気分を変えろ。な？」

「お、おう……………」

こうして俺達の朝の日課は始まった。

「できあ？… 結局、一夏に何されたわけ？」

私は箒の背中をゆつくりと体重を掛けるように押しながら、何があつたのか聞いてみることにした。いや、大体分かるけどやっぱ気に

なるじゃん？

「……………いい、一夏に裸を、み、見られた……………」

「やっぱりかあ…ホントにアイツはどうしようも無いなあ……………」

「い、いや！ その、だな。い、一夏だけが悪い訳では無くてだな……………」

「へ？」

「私も同室の者はてっきり女性だと思っていたからな……………そ、その……………ついバスタオル一枚でシャワー室から出てきてしまつてだな……………」

「あ……………なるほど。それで欲情した一夏に押し倒されたと？」

箒がその言葉を聞いた瞬間ガバツと体を起こして振り返つてきた。

……………いや、冗談なんだけど。一夏にそんな度胸無いしね。でも、やっぱり箒のこの反応は見てて面白いな。

「お、おし!? 押し倒……………ば、馬鹿者！ いいいい、一体何を……………」

首まで真つ赤にしちやつて…可愛いったらありやしない。

「あははは♪ 冗談、冗談だつてば♪」

「じよ、じよじよじよ冗談!？」

「そ。一夏にそんな度胸あつたら箒も苦労しないだろうしねえ。……………」

それに、ホントのとこ言うところとちよつとガツカリしたんじゃない？」

「ソレは……………まあ、確かにな…。これでも多少は自信があるつもりなんだが……………一夏の意気地無しめ…つて、おい！ お、おる織歌!？」

何を言わせるんだ!？」

イヤー、ホント箒弄りは楽しいなあ。6年振りなだけに懐かしさよりも新鮮さを感じるよ。

「アハハハハ、ゴメンゴメン♪ ……でもさ、この際だから言うけど…ハッキリ告白しちやえば？ アイツは生半可な事じゃ多分箒の気持ちに気付かないよ？ アイツの朴念仁っぷりはもう筋金入りだから。箒が転校してからもアイツ凄かつたんだから。キズナと違って自覚なしに女の子の告白次々振つていつてさ……………あれは告白した子達が哀れだった」

「そ、そんなになのか!? し、しかし告白か……………ぐぬぬぬ……………」

あーあー……………真剣に悩んじゃつて。欲しいなら悩むような事じゃ

ないと思うんだけどなあ……………ま、見てて面白いし別に良いかな？

「まあ、頑張りなよ」

「う、うむ。ありがとう、織歌」

さて、あれから二時間くらい四人で日課のトレーニングを終えた後、私たちは一旦部屋に戻り、シャワーを浴びてから食堂に集まる事にした。

部屋に戻ると……………何と本音は起きていた。朝は弱そうなタイプだと思ったのに……………意外だ。

「あ、おるるんくお帰りく……………あれく？ それともおはようかなく？」

「……………ただいま、本音。それと、オハヨ」

本音は既に着替えていて、既に制服だった……………んだけど、制服の袖が余りまくってて手が完全に隠れているどころか、余剰分があるであろう位置から垂れさがて……………何て言うか幽霊？みたいな感じっていつたら分かりやすいかな？

いや、本音自体は別に幽霊っぽくないんだけど。

「おるるんはく朝早いんだねく。何やってたのく」

「……………日課のトレーニング」

「おく、おるるんは頑張り屋さんなんだねく」

「……………そんなんじゃないよ。ああ、そうだ。朝御飯一緒にいく？ キズナに筈と一夏も一緒だけど」

ずいぶん素っ気ない態度に誘い方だとは思う。だって……………嫌いではないけれど、なんかこの子苦手なんだもん。

「おおく！ ……いくいくくおるるんのお誘いじゃ断れませんかあく」

だって言うのに、本音は満面の笑みで喜んでるし。何て言うか本当にやりづらい……………喜んでるのを見て満更でも無い自分があるのが特に。

食堂に来ると既に一夏と筈が同じ席で朝食をとり始めていた。オ

ルカはまだ来ていないらしい。さて、俺は何を食べるかな……朝はバイキング形式なのか。……どこの高級ホテルだよ。まあ、適当に食べたいモノを乗せていくか。

「お？ 絆ーこつちこつちー！」

「分かってるから大声で呼ぶな！」

「……お前は相変わらずよく食べるのだな」

そう言っただけに顔をしかめる筈。……なんでだ？

「……そうか？ オルカもこれくらい食べるぞ？」

そう言っただけ俺は一夏の隣に座る。ちなみに俺の朝食メニューはごはんには味噌汁に塩鮭、冷奴に野菜サラダに温泉卵にだし巻き玉子にぎるそば、デザートにヨーグルトだ。我ながらバランスはいいと思う。ただ、惜しむらくはだし巻き玉子に温泉卵で卵が被ってしまった事か。先に温泉卵を見つけておけば卵焼きは取らなかったのに……温泉卵見つけたら取るしかないだろ？

「お待たせー」

なんて考えてたら後からオルカの声。振り替えると、オルカが見慣れない子を連れてくる。……何処かで見たとような気もするけど……誰だっけ？

「……ああ。この子は布仏本音。私たちと同じクラスで私のルームメイト。一緒に食べても良いでしょ？ ああ、それでキズナと一夏はもう知ってると思うから省くけど、そっちは篠ノ之箒。私達の幼馴染み」

皆の視線に気付いたのか、オルカに紹介された布仏さん。布仏さんが一緒でも別に良いんだが……オルカが出会って一日の人を誘ったって言うのに少し驚いた。一夏も、暫くは会っていなかった筈も少し驚いてるみたいだ。

「どくもく、ルームメイトのおるるんからご紹介頂きました、布仏本音だよ。本音って呼んで」

なんだか随分スローペースで……だぼだぼの袖に隠れた手で器用にトレイをもって……て、違う。今布仏さんなんて言った？

「「お、おるるん!？」」

ハモったのはもちろん俺と一夏と箒だ。いや、驚くだろう。オルカをそんな呼び方するなんて……怖いもの知らずなんだろうか？

いや、オルカは別に自分がなんて呼ばれようが気にしないタイプの人間だから、呼び方一つで怒ったり……なんて事は心配してない。心配しては無いんだが、オルカは……何と言うか、纏ってる雰囲気は獯猛な獣を彷彿とさせる。だから、昔からオルカを初見の人間は第一印象で余り近付きたがらない。例外と言えば、箒とあの子くらいか。

そんなオルカにいきなり懐いてる布仏さんに俺達は驚いている。いや、確かに慣れれば頼りになる姉貴分の様なヤツなんだが、それでも会ってそう時間が経っている訳でも無いのにここまで懐いてるなんてな……箒はなんか少しだけ嬉しそうだが。

「ふっ。おるるん……おるるんか。布仏……いや、本音。織歌は昔から人付き合いが下手でな。私は同室の者と上手くやれるか心配だったんだが……うん、これからも織歌と仲良くしてやってくれ、本音」

「オツケ、任されたくしののん」

「し……しののん?」

「アンタは私の母親か。それと箒には人付き合いが苦手とか言われたくない。あんたは私より人付き合いが苦手だったでしょうが」

「グツ! そ、そんなことは……」

「おやあ? 四六時中不機嫌そうに仏頂面でクラスからずっと浮きっぱなしでしたのは何処のドチラさんでしたかしらあ? ねえ?」

ミス・ブシドー?」

「ぐぬ……ぐぬぬぬ……ふっ。確かに今までの私ならば言い負かされて居ただろうが……フフフ、随分と可愛らしいあだ名ではないか。なあ……『おるるん?』」

「ヤ・メ・ロ『しののん』」

織歌も箒もにこやかに微笑みながら、互いに相手に視線をぶつけている。なに下らないことやってるんだ、コイツら。

「まあまあ、落ち着けて二人とも。折角の料理も冷めるし、のほぼ

……のほほんさんも困って……無かったけど、取り合えず座ったらどうだ？」

ナイス、一夏。けど、お前今布仏さんの名前噛んで、あだ名にして誤魔化したろ。ちなみに布仏さんはオルカと箒を見て笑ってる。

「二人はく仲良しさんなんだね。良いなあ、羨ましいなあ、おるるんもくしののんもく」

「……」

織歌はそれを聞いて黙って席につく。若干その顔は赤いような気がする。箒も若干赤い。布仏さんは今のを見てて仲が良いって言えるのか。凄いな。うーん……本質が見えてるのか？

……だからこそ、オルカに懐いたのか。

「まあ、これからよろしく。布仏さん？」

「本音って呼んでく」

「OK。よろしく本音」

「うん、こちらこそくきつちー」

「き……きつちー？」

取り合えず、この子のネーミングセンスはかなり独特だと思う。

「けど……きつちーもおるるんもくよく食べるよねえ……？」

「え？ そう？」

ちなみに、オルカの朝食はトースト三枚、スクランブルエッグ、ベーコン、ミートボール、ハンバーグ、ウインナー、唐揚げ、フライドポテトにサラダにミネストローネ、デザートにパンケーキ。……やけに茶色が多い気がするが……まあ、量としては俺と同じで普通だと思う。やっぱ食えるときに食つとかないな。食えなくなつて後悔しても遅いし。

「何でそれでお前達は……」

「お前ら、ホンツト昔からよく食べるよな……」

「私もお菓子は食べるけど……凄いな」

何で皆微妙な顔をするんだ？

俺もオルカも不思議な顔で見つめあい……。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻者はグ

ラウンド十周だ。遅刻しようものなら覚悟しておけ！」

千冬さんの良く通る声が食堂に響き渡った瞬間、周囲がざわめき始めた。見れば、周囲の生徒達が慌てて目の前の料理を口に運んでいる。……当たり前か。この学園のグラウンドは一周五キロはある。それを十週なら駅伝並みの距離を走ることになる。体力を着けるには最適かもしれないが——それで授業に遅れてしまったら本末転倒だ。少しだけペースを上げるか。

「ごちそうさまでした」

「はやつ!?!」

「や、仕方無いだろ？ 俺のだって本当はもう少し味わって食べたかったんだけど」

「んじゃ、皆お先い〜♪」

そう言つて俺とオルカは席を立つ。

「お、お前ら！ 良く噛んで食べないと体に悪いんだぞ!」

「あ、あり得ん……あの量を二十秒足らずでか！」

「ま、待つてよ〜おるるん〜きつち〜」

背後からかけられる言葉を一切気にせず、俺達は食堂をの出口まで歩いていく。因みに、上からジジ臭い事を言ってるのが一夏、良くわからないがなんか驚いてるのが箒、最後の呼び止めてるのが本音だ。悪いな、現実是非情なんだ。

「喋つてて良いのか？ 遅刻したらグラウンド十周が待つてるぞ?」

「喋つてる時間なんて要らないよねえ〜。それで食べるって言うならさ〜?」

二人で振り返つてそれだけ告げると、俺達は食堂を出ていった。背後から慌てて料理をかつ込む音と、なんかむせるようなくぐもった声が聞こえた気がしたが、きつと気のせいだな、多分。

さて、今は授業の合間の休み時間。一夏達もどうにか授業に間に合い、授業中は何事も無く開始された。途中、山田先生がISの生体補助機能を、男子の俺と一夏が居ることを忘れてブラジャーに例えて説

明してくれた時にはちよつと教室の中が気まずい空気に包まれたが。

だが、それよりも俺の興味を引いたものがある。それはISには意識の様なものがあり、それによって操縦時間によってIS自身が操縦者の特性を理解してより性能を引き出せる——つまり、ISにはいわゆる自己学習型の高性能AIと自己進化機能の様なものが付いている点。山田先生によれば、ISは道具ではなくパートナーの様な存在らしい。相互理解を深めることによって、ISは自身を操縦者により適した状態に最適化させる。そんなモノはネクストにさえ搭載されていないかつた機能だ。興味を引かれるのも当然、ある意味ではISはネクストを超えているんじゃないか？

確かに、兵器としての側面ではネクストの方が圧倒的に優れているだろう。対価に人体改造と自分の寿命とかなりの苦痛を支払う事になるが、ネクストはAMS適性さえあれば男女問わず操縦でき、低くても操縦技術や経験等によって補う事も出来る。GA社の最高戦力であるあの人も、低いAMS適性でかつては粗製と嘲られたそうだが……いや、あれは絶対嘘だ。あんなに強い人が粗製と言われてたなんて誰が信じるんだ？ むしろ、あの人を一番最初に粗製と言ったヤツの顔が見てみたい。きつととんでもない勘違い野郎だろう。

……いけない、話が逸れた。

だが、それでも。例えば女性にしか操縦できないと言う致命的な欠陥を持つていたとしても、ISがネクストに劣っているとは思えない。何て表現したら分からないが……ネクストが完成された兵器である事は間違いない。対してISは……未完成の兵器……と、言ったら良いんだろうか？

未完成であることが、兵器にとって最悪のレッテルであることは他ならない俺が良く理解している。だけど……果たしてISをただの兵器として捉えて良いのか？

むしろ、兵器として捉えること自体、間違っているんじゃないか？ 十中八九、製作者である束さんからしてみれば、兵器としてしか捉えられない事は侮辱でしかないのかもしれない。オルカも、この件に関しては何にかしら思うところがあるみたいだし。一応現在、建前上

はアラスカ条約でISの兵器への転用は原則として禁止されている。だが、さつきも言ったがそんなのは所詮は建物出しかない。兵器としての転用が禁止されていながら、軍用IS何てものがある矛盾。

なら、ISの性能しか見れない世界は——俺は。

「ねえねえ、織斑くんと絆くんさあ——」

「……あ」

思考の海に沈んでいた俺を、誰かの声が掬い上げる——そして、ふと気が付けば。

「はいはい、質問しつもん！」

「今日の昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

「二人の好みのタイプあってえ、どんなタイプ？」

無数の女子達クラスメイトに囲まれていた。

どういう状況だ、これは？

「いや、そんないっぺんに質問されても……」

明らかに昨日よりも積極的な女子達に、目を白黒させながらもどうにか返答しようと心みる一夏だが……回りの女子達は一夏の返答を聞きがあるのかどうかすら疑わしい位に盛り上がっている。これはあれか、もうプライドは抜きだ！みたいな展開なのか。それにしても明らかに人数が多すぎるだろう。まるで見覚えのない顔もいくらか混じっている……ふと、視線を教室の入り口に向けてとチケットだか整理券だか分からない紙切れを配っている生徒がいる。有料で。そう、有料で。……随分景気が良さそうじゃないか。頭が痛くなってきた。

「千冬様って自宅ではどんな感じなの!？」

また頭が痛く(物理)なるような質問を……たまたま一夏と目が合ったので、このままでは素直に喋りそうな一夏の為にアイコンタクトで視線を教室の入り口に向ける。一夏も俺にならって視線を教室の入り口に向けると……先程の紙切れを販売していた生徒の頭に出席簿を落とす、今話題の冥王様の姿が。

(……分かってるな?)

(分かってる。助かった、絆)

「あ、もうじゆぎようはじまるみたいだから、みんなせきにもどったほうがいいんじゃないかー?」

わ、わざとらしい、何て酷い棒読みだ。流石と言うか、やはりと言うか、こんなおざなりな説得では納得いかないのか、大半の子が渋っている。

が。

「ほう? 殊勝な心がけだな、織斑。貴様達も少しは見習って、さっさと散れ。休み時間は終わりだ」

予想外の方向から援護があつた。見れば一夏が冷や汗を流している。流石千冬さん、プレッシャーが半端ないな。

「ああ、そうだ。織斑、お前の専用機だが用意するのにもう少し時間がかかる」

専用機……だつて? 誰に? 一夏に?」

「へ?」

「予備機がない。だから学園で用意するそうさ。少し時間はかかるがな……どうした? 少しは嬉しそうにしたらどうだ?」

「俺に……専用機」

不適に笑う千冬さんと、噛み締める様にその言葉を、事実を受け止める一夏。

ああ、良かったな……一夏。お前はずっと力を欲しがってたものな……あの時から。

「ふん……本来、専用機は国家あるいは企業に所属する者にしか与えられない。しかも、国家代表候補生でも専用機を持つことのできない者さえいると言うのに、世界に467個しかない貴重なISコアの内の一つが、ISを動かして間もないペーパー以下のド素人である貴様に貸し与えられるのだ。この学園や政府にしてみれば、ただのデータ取りの為の機体かも知れないが……その事実をどう捉え、どう活用するかは織斑、貴様次第だ。……せいぜい覚悟を決めて臨むことだな」

純然とした事実を一切の脚色も、気休めも抜きに突き放すように語る千冬さん。その些か厳しすぎるともとれる言葉には、力を持つことの意味と覚悟と決意、そして得たことで満足せず修練に励むよう一夏

に促そうとしているのがわかる。

「ただど——。」

「ツハイツ！」

そんなもの、一夏にとつては意味がない。千冬さんの言葉に一夏は決意と覚悟の籠った返事と毅然とした表情で応える。

現在、ISのIS足らしめる主要機関であるISCコアはアラスカ条約に加盟している国家が管理する467個しか存在していない。ある時を境に世界で唯一ISCコアを製造できる束さんがそれ以上のISCコア作成を拒否しているからだ。つまり、束さんがコッソリISCコアを造る……なんて真似をしなければこれ以上ISCコアが増えることはない。それを踏まえれば、これがどれだけ重大なことか分かるだろう。

決意と覚悟を新たにしたその一夏の表情を見て、自然と自分の顔が緩むのがわかる。

今はこの親友を祝福しよう。俺の僅な嫉妬なんてものは、きつと些細な事だから——。

「あ」

と、感慨に耽っていると、オルカがふと何かを思い出したように声を上げて、こちらに振り返ってきた。

「そうだ。ねえ、キズナの専用機の事なんだけど」

「「……は？」」

何だ？ 専用機って？ 俺そんな話聞いてない。俺も一夏も千冬さんもポカンとした顔をしている。クラス中も静まり帰って食い入るようにオルカの言葉に耳を傾けている。

「……あれ？ キズナとちーちゃんに言わなかったっけ？ アライアンスの技術開発部の主任にアンタの事話したら、是非ともキズナのISを用意させて欲しいって。クラス代表決定戦の事伝えたら、なんか凄く燃えてたよ？」

あんまりにも唐突な話に、千冬さんもちーちゃんと呼ばれた事を気にしていない。

「……いや、初耳だし。そもそも俺の意思は？ 政府とか学園の許可

は?」

「いや、アンタの意思とかそんなもん無いようなもんでしょ? 許可は確か……主任の話だと、政府の方でもアンタのIS用意させるつもりで色々考えてた所に、アタシの使ってるのと同タイプのISを双子のアンタに使わせたらデータの比較も楽しかったって、強引にねじ込んでらっしゃるよ? ちょうどたまたま使っていないISコアが一個余ってるから、それもキズナ個人に貸与して開発するからって強引に」

「……学園への申請はどうした?」

「ああ、それは私の方から学園に申請を……」

即座にポケットから携帯端末を取り出してどこぞへ連絡を取る千冬さん。ここだけ見れば良くできるOLだなあ。私生活は壊滅的だけど。

「ああ、すまない。織斑だが、至急確認をとって欲しい事があってな。烏丸絆の専用機の申請に付いて調べてもらいたい。………そうか、初耳か。では、書類などの提出もされていないんだな? ……分かった、仕事すまなかつたな。……織歌、事務局の方でも初耳だそうだが?」

「……………テヘ♪」

スパシツ!

「おくるくか? 何が、舌を出して、テヘッ♪だ、キサマア……それと、出席簿から、手を、離、さんか……! ギギギギ……」

「ご、めえくん♪で、も、ちよーつと、手を、離すのは、無理、かな? ……だって、私、そういう趣味、無い、し。ねえ、いい加減、諦めようよ、ちいいいーちゃああん! グギギギ……」

「織斑先生と呼べと、言ってるだろうが、馬鹿者がああああ……!」

神速とも言える速度でオルカの脳天に出席簿をうち下ろした千冬さんと、回避が間に合わずに真剣……いや、出席簿白羽止めでそれを止めたオルカ。二人ともそのままの体勢で力を込め続け睨み合っている。凄まじい拮抗状態だ。……酷く下らないけど。うん、凄くどうでもいい。

あー、しかし俺の専用機か………どんなのだろうな……。楽しみ

だなー……なんかオルカを見てると不安になってくるけどねー
……はははは、俺の専用機はオルカに申請忘れられる位だしなー
……はあ。

「き、絆くん？ ど、どこを見てるんですか？ ちよ、ちよつと絆くん
戻ってきて下さいー！ お、織斑先生も織歌さんも授業を始めましよ
うよー！」

そんな山田先生の声が聞こえてきた気がしたが……きつと気のせい
だろう。

mission9 打倒、代表候補生！絆と一夏と秘密の特訓計画!?

「安心しましたわ」

そう言っただけ来たのはオルコットさん。それにしても唐突だな………そもそも、安心して何に？

「結果が見えていた………とは言え、訓練機を専用機で一方的になぶるなど、ネズミをなぶる猫の如き醜悪な行為………その様な行いでオルコットの家名を汚さずにすむのですから」

ああ………そう言うことか。専用機………完全に自分に調整された機体。それをある程度自由に使えるって言うのがメリットが大きいって言うのは分かる。分かるんだが………そこまで訓練機と専用機で性能が違うとは思えないけどな。ネクストとノーマル位の性能差があれば話は変わってくるだろうが………自分用に調整されているか、いないかの違いはあれど少なくとも同じIS同士なら、そこまで戦力に差があるように思えない。

「うーん………オルコットさん。ちょっと聞きたいんだけど」

「………なにかしら？」

俺が話しかけた途端、若干顔をしかめるオルコットさん………分かってたけど、分かりやすすぎじゃないか？

「いや、専用機と訓練機ってそんなに差があるものなのか？ 確かに、自分用に調整されてるって言うのは大きいんだろうけど………同じISだろう？ 俺の考えじゃいつ届くのか分からない専用機よりも、多少は乗って使い慣れた訓練機の方がマシなんじゃないかと思うんだけど」

俺の言葉を聞いて、オルコットさんは頭を抑えてため息を一つ。妙に様にはなってるが………俺はそんなに変な事を言ったような記憶は無いんだけど。

「あなたは………本当によく分からない方ですわね。一見、それなりに知的なのかと思えば………あなたは先程の山田先生の授業、聞いてい

たのでしよう？ まあ……良いでしょう。このセシリア・オルコットが庶民であるあなたに教えて差し上げましょう。ISには学習機能がついているのは……先程の授業でご存知ですわね？ それで自身を常に操縦者にとつて最適な状態へとアップグレードしているのです。つまり、乗れば乗るほどISは扱いやすくなるのです。ですが、訓練機にはそれがありません。考えてもご覧なさい……不特定多数の生徒が搭乗するものに特定の人間の癖をつけてしまつては、訓練機の意味がありませんもの。……お分かりいただけで？」

なるほどな……けれど、結局ISに乗りなれていない俺と一夏には専用機だろうと訓練機だろうと変わらない気がするが……。

「……どうやら、まだ納得していないと言う表情ですわね？」

だから何でこう、俺の心が読めるんだ。これでも元傭兵だから多少はポーカーフェイスには自信があつただけだなあ……。

「確かに、与えられたばかりの専用機と訓練機とは大した差は無いように思えます。ですが、それでも専用機と訓練機の間には確かな差があるのです。自分のためだけに調整されたIS——ソレとの一体感後は自分で専用機に乗つて、直接確認した方が良いでしょう」

「……なるほどな。ありがとうオルコットさん。けど、どうして俺に塩を送るような真似を？ 下手したら俺は専用機じゃなく訓練機で闘いに臨むつもりだった。その方がそつちにとつては……」

……おかしいな。オルコットさんがだんだんイライラしてるように見える。いや、俺はおかしな事は言っていないはずだ。

「先程言ったことをもう忘れまして？ これだから男性という生き物は……一週間後の代表決定戦はわたくし、セシリア・オルコットの實力を示す絶好の機会なのです。既に結果は見えているとは言え……その相手がISの事も分からないようなド素人ではわたくしの實力を示す所か、ただの弱い者虐めの謗りを受ける事になりかねません。よつて、わたくしはあなた方に塩を贈る事も辞さないのです。お分かり頂けまして？」

相変わらずすごい自信だな。……つまり、俺と一夏は随分と舐められてるみたいだな。面白い。

「ああ、よく分かった。オルコットさんが俺達を舐めてるって事は」
その一言の何が可笑しかったのか、オルコットさんは手を口元に当てて不敵に笑い出す。ソレに対して、俺も出来うる限り好戦的な笑顔をオルコットに返す。

「フフ……舐めるも何も……純然たる事実でしょう？ まあ、理解できたのなら精々努力することです。このわたくし、セシリア・オルコットが叩き潰すに値する程度には。その努力ごと叩き潰してこそ、わたくしの勝利もより映えるのですから。試合が終わった後も、そんな表情が出来るのか……楽しみにさせていただきますわ。それでは、ご機嫌よう」

そうして優雅に髪を払い、一礼してから去っていくオルコット。いちいちそういう動作が様になつてるのが面白いなあ……。

ああ、本当に面白い。面白いなあ、セシリア・オルコット。きつと彼女は一週間後を楽しみにしているんだろう。なら、思いつき期待に応えようじゃないか。

——見せてやるよ、元傭兵リンクスの実力を。

「おーい、絆ー。いつまで座ってるんだー？一緒に飯食いに行こうぜー？」

……一夏が居ないと思ったら、あの野郎すっかり逃げてやがったな。

さて、ところ変わって学食。凄い混みようだなあ……これは。けど、どうにか五人揃って昼食は取れそうだ。もちろんメンバーは俺、オルカ、一夏、箒、本音だ。注文は全員日替り定食だが、俺は追加で月見山菜天ぶらうどんを、オルカはチャーシュータンメンを頼んだら、回りがぎよつとした顔をしてこつちを見てくる。一夏と箒と本音は揃って苦笑いを浮かべて……謎だ。

なんだか物凄い視線を集めながら、俺達は食事を食べ始めた。

「……でさ？ 正味勝てると思ってるの、アンタら。セシリアの実力は知らないけど相手は腐っても国家代表候補生、ソレも専用機持ちだ

よ?」

「うむ。絆も珍しくやる気になっているようだが、勝算はあるのか?」

へえ…… 流石は六年は会ってないとは言え箒は幼馴染みだな。流石に分かるか。どうせ長い付き合い合いで誤魔化したって分かるなら、隠したってしょうがない。だったらここは正直に言うか。

「無い」

「……え?」

一夏とハモった。しかし、俺の言葉に気付いた一夏がぎよつとした顔でこつちを見てきた。……なんだ? 俺が勝てるでも言うと思ったのか?

「何でお前が一番意外そうな顔をしてるんだよ……考えても見ろ、俺がIS動かした経験はお前と同じだぞ。何でその俺が勝てるって断言できるんだよ?」

「や、ま、まあ、確かにそうなんだけどな……」

「ソレでよくあんな啖呵を切れたものだな、お前たち……」
「けど、二人とも専用機貰えるんだしく、ちよつとは希望が見えてきたんじゃない? 二人とも羨ましいなく」

ニコニコしながら話に入ってきた本音。袖に隠れた手で器用に箒を使ってるな……どうなってるんだ、あれ?

「まあ、勝機なんて無くても、ドーセ勝ちに行くんでしょ、アンタ達は」
「勿論。俺達を誰だと思ってる? まー、勝つのは俺だけだな」

「絆も言ってくれるよなあ……でもな? オルコットにもお前にも俺が勝つ」

「何か出来ることがあれば手伝うぞ一夏。それと絆」

「俺は一夏のオマケですか、そーですか。……はあ、まあ良いや。一応ありがとう箒。じゃあ、明日から実戦形式で一夏とひたすら戦って欲しい。二人つきりだ」

二人つきりでの部分を思いつきり強調して、最後にボソリと他の人間には聞こえない声量で「箒の望み通りにな」と付け加える。ククク、さつき俺を置いて一人でさつきと逃げ出した罰だ。精々箒にしばかれる、一夏。

「い、一夏と……？ う、うむ！ しよ、しようがないな！ ならば私
がやるしか無いな！」

「ああ、箒。容赦なく一夏をシバき倒してくれ」

案の定、篠ノ之箒大先生は大いにやる気を出してくれたようだ。目を輝かせて視線で然り気無く感謝を伝える箒に、俺は親指をグツと立てて小さなサムズアップを返し……。ちよつとだけ罪悪感に包まれた。うん、ちよつとだけ。幼馴染みの純情を利用して一夏に然り気無く仕返ししてる俺がなんかこう……。すみません本音さん、お願いだからそんな無垢な笑顔を俺に向けないで。罪悪感がマツハになるから。

「ええ!? ちよ、待った！ そ、その前にちよつとでもISのトレーニングした方が良いんじゃないか？」

「な、なに!? い、一夏！ わ、私と二人つきりで稽古するのが不服なのか!？」

「い、いや！ そう言う訳じゃないけど、ちよつとでもISの操縦に慣れといった方が良いじゃないかと思つてだな、俺は！」

「そう言うと思つてな。ほれ」

そう言つて俺が取り出したのは、二枚の紙切れ。

「訓練機の貸し出し使用許可証だ。俺も少しでもISの操作に慣れておいた方が良くと思つてな。昨日の放課後、部屋で頭かち割つた後に申請してきたんだよ。ただ、訓練機の貸し出しもかなりの人が申請してるらしくてな、生憎と毎日乗れそうつて訳でも無いんだよ。で、だ。一つオルカに聞きたいんだけど……」

「ズルズルズ……ふあに？」

せめてモノを飲み込んでから喋ってくださいよオルカさん。てか、最初に話を振つたのはお前だろ！ 何で話を振つた本人が他人事のようにラーメン食つてんだよ！

「……色々突っ込みたい事はあるけど置いておいてだな……。オルカ、ISの操縦は自分の体を直接動かす感覚とそう大差ないって俺は見てるんだけど……。その辺りはどうだ？」

「ズルズルズルズルズルズル……ふん、ふあいふあいひよんふあひゃん

ひひやひやあ？ ひやあ、ひよっひよひひやいひやふあふあふあふあふあふあ

いや、何て言ってるのか分からん。頼むからせめて飲み込んでから喋ってくれ。ソレ、スゲエ汚ねえから。

「全く……せめてモノを飲み込んでから喋れ。下品だぞ、織歌。全く、この辺りの悪癖も昔から変わっていないとはな……まあ、代わりに私でも良ければ答えよう。答えはその通りだ。多少、細部に違いはあるがな。……だが、それがどうしたと言うんだ？」

「OK。それじゃ、話を戻して一夏の質問に答えよう。箒は知らないと思うから説明するけど……箒と別れて、中学上がってからこの三年間、一夏は一回の組手どころか一回の素振りさえもしてない」

「……ッ！ 何だど!? それは本当か、一夏！」

ガタツと音をたてて立ち上がり、一夏を睨み付ける箒。そんなに意外だったのか。だが、このままじゃ話が進められない。

「まあ、そんなに一夏を攻めないでやってくれ。中学上がってから、こいつは千冬さんの負担を少しでも減らそうとずっと放課後はバイトに明け暮れてたんだから」

「そう……か。ソレでは……仕方がないか」

「おりむくはお姉さん思いなんだね、私もくなんとなく分かるな」

納得してくれたのか渋々座り直す箒。本音の、多分嘘偽り無いだろう笑顔で言った感想に、俺もつい表情を崩してしまう。

「納得してくれたか？ まあ、俺達と朝のトレーニングだけは殆んど欠かさずやってたから体力面での心配は無い。無いんだが、如何せん一夏が忘れた剣と立ち合いの感覚を箒には一夏に思い出させてやって欲しいんだ。立ち合いでの感覚だけだったら俺とオルカでもどうにかなるんだけど……」

「ズルズルズル……ゴクンッ。あー、確かに、剣術は無理だね。だって、私も絆も剣術はからっきしだし」

「そう言うことだな。つまり、箒以上に適任は居ないって事だ。そう言う訳で……かなりハードスケジュールで一夏にはキツイと思うけ

ど、これから一週間の放課後は訓練機に乗れる時にはISの基本的な操縦を。乗れない時には箒と剣術の稽古。さらにそれと平行してISの——」

「ねえ？ 君達が噂のコ達かな？ 確か、代表候補生のコと決闘するとか聞いたけど、ホント？」

人が話してる最中に割り込んできて：終るまで待てなかったのか？ それに噂もなにも……IS学園に通学している男性操縦者とか俺と一夏しか居ないんだから確認取るまでもないだろう。しかも、決闘するって話はもうかなり広まつてるのか？ リボンの色を見るに……：三年生か。IS学園では一年生は青、二年生は黄、三年生は赤とリボンの色が違う。確かに、見ればクラスメイトの女子達より大人びた雰囲気を持つてるが……人が話してる最中に話しかけてくるなんて、最低限のマナーも守れないのか、上級生のくせに。その小動物みたいな人懐っこい顔で何もかも許されるとか思うなよ。

「はい、そうですけど」

突然の乱入者に戸惑いながらも律儀に返事を返す一夏。なんか、話に割り込まれた事にちよつと……：そう、ちよつとだけ腹を立てた俺が、まるで心が狭いみたいじゃないか。

「でも、君達って素人だよな？ IS稼働時間はどれくらい？」

「……大体、二〇分位だと思えますよ。俺も一夏も」

「それじゃ無理よ。ISって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？ だったら軽く三〇〇時間はやってるわよ。……でさ？ 私が教えてあげよつか？ ISについて。それなら勝てないまでも、結構イイ線行けると思うよ？ ……：どうかな？」

ああ、ダメだこの人。

多分、この人に悪気は無くても、善意で言ってくれてるんだろう。きつと、この人自身もいい人なんだろう。

でも、最後の一言だけは余分だ。

勝負に絶対なんてない。確かに、一般的に見れば代表候補生にド素人二人が挑む何て、結果は火を見るより明らかなのかもしれない。でも、それでも——。

「おは——」

「すみません、先輩。お話はありがたいですが、結構です」

断ろうと思つて声を出した俺の言葉を遮つて、一夏がキツパリと先輩の提案を拒絶する。

「確かに、俺達が代表候補生に挑むなんて無謀な事かも知れないですけど……それでも、勝負の舞台に立つ以上は勝つぞ！つて気持ちは忘れたくないんです。だから、先輩の気持ちは嬉しいですけど……すみません。それに、教えてくれる人ならもう三人もいますんで」

そう、キツパリ言つた一夏の姿を実に楽しげに見つめるオルカ。箒は箒で一夏を頬を染めながら誇らしげに見つめていた。

六年ぶりに再会した幼馴染み達。

その中の私の初恋の相手——織斑一夏。

親友との誓いだと言うことも勿論あつたが——共に学んだ彼との絆だと思つて励んできた剣の道。

去年の全国剣道大会で優勝した事を、昨日は我が身の事のように祝福してくれた一夏。自分が剣の道を歩き続けた事が無意味ではなかつた、一夏との確かな繋がりであつたんだと、間違いではなかつたと言つてくれるようで素直に嬉しかった。

だからその分、さつき一夏が剣を置いたと聞いた時には衝撃的だつた。

私の一方的な思い込みだというのに、それでも、まるで——裏切られた様な気持ちになつた。

だが、それも私も尊敬している彼の姉——千冬さんの為だと聞いたときには、幾分か溜飲も下がつたし、あの優しい一夏はあの頃のままなんだと、安心もした。

私にも尊敬している姉がいる。色々と問題のある姉ではあるが……だから、尊敬する姉の負担を少しでも減らしたい一夏の気持ちもよく分かる。

何よりも、一夏の今の言葉。当時は生意気な光を宿した眼が印象的だった私の初恋の幼馴染みは——今はその眼に強固な意志の輝きを宿して、より男らしく、格好良く成長していた。私はそんな一夏が誇らしい。私を頼ってくれた事が——嬉しい。

「……でも、あなた達一年生でしょ？ 勝つつもりだったなら、なおさら私の方が教えられると思うけどなあ」

話しかけて来た上級生は顔を赤く染めて、なおしつこく食い下がろうとしている。自分の好意を無下にされて怒っている……とは私は思わない。きつと、今の一夏の言葉に惹かれたのだろう。だが——。

「ふうくん？ そんなこと言っちゃうんだく？ アライアンスのテストパイロットやってるんだけどなく、私？」

「え？ じゃ、じゃあ……あなたも専用機持ち？」

さも面白い事があったように言う私の親友が、挑発的で好戦的な笑顔を私に向けてくる。

ふっ……織歌、お前に言われるまでも無い。私の一夏を誰かに渡すつもりなんてさらさら無い。なら、きつと今が——。

「……私は、篠ノ之束の妹ですから」

——闘う時だ。

「篠ノ之つて……ええ!?」

尊敬する姉の名前に頼る自分を未熟だと、卑怯だと私自身も思う。

だが、それがどうした。

これは——既に闘いだ。

今は未熟だ、卑怯だと、そんな誇りは甘んじて受けよう。

「ですので、結構です」

「そ、そう……それなら、仕方ないわね……」

自らの敗北を認めたのか、上級生は背中を丸めて去っていった。

ふと織歌を見れば、織歌が満足そうに私を見て笑っていた。

織歌、今はまだ姉さんの名を借りなければ闘いにも勝てない未熟者だが——いずれ私は千冬さんも越えてみせる。その意思をありったけ込めて、私は織歌に不敵に笑って見せた。

「一夏、早速今日の放課後からお前に剣を基礎から叩き込んでやる。

——覚悟しておけよ？」

「おう！ 臨むところだ！」

まずは——この想い人に、一週間後の決闘で勝てるように、稽古をつけるところから始めるとするか——！

そう決意して。

「あー……その約二名。盛り上がってるところ悪いけど、今日の放課後はISの操縦訓練だから」

「……はい」

その幼馴染絆の一言で、急激に落とされた。

絆、お前はもう少し場の空気を読んでくれても良いだろう！

「で……そっちはどうだ、一夏？」

「まあ、その、……どうって言われてもな」

「……………」

放課後。今は第三アリーナに俺達はある。

当初は俺と一夏、それにオルカと箒と本音の五人で集まる筈だったんだが……………」

「きゃー、見て見て！ 織斑おとづらくんの引き締まった体！ あの露出してるお腹回り！」

「絆くんは……何で織斑おとづらくんに比べて露出が少ないの!? もうちよつとサービスしてくれても……………」

「でもさ……………見てよ、あのISスーツのライン。ISスーツ越しでも分かる線の細さに鍛えられた肉体。何よりあのウエストの細さ！」

「眼福めがね眼福めがね」

「二人とも打鉄うちがねが似合ってるわよねえ……………また、二人の物憂ものうげな表情がなんとも……た、たまらん！」

「打鉄の白い装甲が……………もう、何て言うかイイツ！」

「創作意欲が……………高まるう……………溢れるう……………ウ腐腐腐」

「し、視界からリビドーが逆流するううううう！」

逆流せんでいい。あと高めるな、間違っても溢れさせるな。どいつもこいつもそんなモノは纏めてゴミ箱に捨ててくれ、頼むから。あと、本音さん。然り気無く喧騒に混ざって眼福とか言わないでくれ……ISのハイパーセンサーで聞きたくなくても聞こえてるんだから。

「……………はあ」

俺も一夏も顔を見合せて、げっそりした顔で溜め息をつく。何でこんなにギヤラリーが増えてるんだよ……………。大方、昼休みの俺達の会話を聞いてた子達から広がったんだろうけど。

「……………一夏、もう諦めよう。これも集中するための訓練だと思って」「そう思わなきゃやってらんないな……………はあ。で、打鉄を展開したのは良いけど……………これからどうするんだ?」

今、俺達が展開、装着しているのは、世界第二位のシエアを誇る日本国産の量産型第二位世代IS打鉄だ。打鉄は昔の日本の武將を彷彿とさせる甲冑のようなフォルムをしており、肩少し離れた所に左右一つつつ特殊繊維で束ねられた装甲板——物理シールドが直接取り付けられずに浮いている。非固定浮遊部位と言うらしい。そして、腰回りを覆うように展開させている装甲……………フォルムに関して言えばこんなところか。

性能面では防御に重きを置き、継戦能力を高めた近接向きの汎用型。火力は今一で単独での運用は心許ないが、支援機としては優秀。何よりも整備性と扱いやすい事から、初心者向きの機体だ。

「——そうだな。取り合えず拡張領域内に入ってる使用可能な武装を確認して、一通り武器の展開と収納の反復と基礎的な機動……………かな」

ISは拡張領域と呼ばれるデータ領域に、粒子化された武装を収納し、操縦者の意識によって自由に展開、収納が出来る。これによってISは幅広い戦術を取ることが出来る。……………正直、幾らなんでもオーバーテクノロジー過ぎるだろう。ネクストにこんな機能があれば、ネクストの載積限界を気にせずに武装を収納して……………いや、やっぱ駄目か。確か拡張領域に武装詰め込みすぎとIS事態の情報処理速度が遅くなったりデメリットがあるらしいし。

さて、それじゃ使用可能な武装の確認でもするか……………

《展開可能武装一覽》

近接ブレード《葵》——展開可能

アサルトライフル《焰備》——展開可能

俺の意識に直接、展開可能な武装が表示される。俺はアサルトライフルを選択。目を閉じて意識を集中、手にアサルトライフルを持つているイメージをし——

「——少し遅いか？」

無事に展開出来た。意識内に直接表示された武装展開までの時間を見ると……………一、四五秒。意識を集中してこの時間じゃ……………駄目だな。実戦じゃ立ち止まれない。動きながらの展開を余儀なくされるから、下手すれば武装の展開をさせてもらえるかどうかも危うい。

「く、うぬぬぬ……………で、出来た！」

随分力んだ末にようやく展開出来たらしい。一夏が選んだのは近接ブレードか。

「こりゃ……………武装の展開は要訓練の必要あり、だな。このままじゃ俺も一夏も武装展開してる間に潰されるぞ」

「そうだなあ……………出来れば織歌にコツとか聞きたかったんだけどな」

その一夏の一言でふと気付く。そう言えば俺も今日の放課後に入ってからアイツの姿を見ていない。何だろう、凄く嫌な予感がする。

「……………オルカのヤツ、何処にいった？」

そう口に出した途端、俺の中で嫌な予感がよりいつそう強くなった。絶対、ロクな事にならないって言う予感が。

「あれ？　上空にIS反応……………？」

一夏が言った通り、ISのハイパーセンサーから送られてくる情報。そこには確かに、上空から急速に下降してくる一機のISの反応が。

（——まさか）

ズウウウウン……………と重い音と盛大な土煙を上げて、それは俺と一夏の前に着地した。

「——遅かったじゃない」

やがて、土煙が収まつてくるにつれ、ハッキリしてくるその姿。地上を駆ける獰猛な肉食獣を彷彿とさせる、細いが力強い脚部。

その脚部の膝の部分から突き出た、鋭い先端を持った近接物理ブレード。

「武装の展開まで随分待ったよ」

脚部と同じく細いが、獰猛さを感じさせる、肘が突き出た独特の腕部。

前面に突き出た、独特の形状の肩部。

レーシングカーを想像させる、背面に装備されたパーツ。

「もう——言葉は要らないよね?」

俺に——かつての愛機、A A L I Y A Hを彷彿とさせるソレ——血の様に暗い、冥い紅のI Sを纏って——オルカは俺達の前に姿を表した。

「いや、説明しろよー!」

「ちよ、一夏! 私折角気分を盛り上げようと、頑張つて演出したつてのに、そう言うこと言っちゃやうの、アンタ!」

はあく、やれやれだわー……。とか言いながらI Sの手で頭を抑えるオルカ。俺はオルカがやろうとしてる事に何となく気付いているので、オルカが展開している武装に注目する。

まず、右手に持っているのは、M O T O R C O B R Aに似た名称不明の銃。銃身下部が、鋭さを帯びていて、恐らく銃剣としても使用可能。次に背後に浮いている、長大な物体。これが問題で、左右の肩の後ろに浮いてるソレは、見た目は蟹の甲殻を中心で二つに分けたような装甲に包まれた、三つの銃身を持ったガトリング……。に見える。砲身が三つでは些か少ないように思えるが……。問題はその口径。三つ全部の口径が全部バラバラなのだ。恐らく、複数の弾頭を使い分けられるんだらう。しかも、下部にはスラスターらしき物が顔を覗か

せて……………何だろう、すごく嫌な気配を感じる。

だが、やつぱりソレ以上に俺が気になるのは……………左腕に直接取り付けられた、金色に輝き、冷たい光を返す凶爪。いや、俺にとっては凶爪と言うのも生ぬるい、死の象徴。

……………どう見てもMOONLIGHTにしか見えません、むしろMOONLIGHTそのものです、ありがとうございます。

「光が……………まぶしい光が……………バーって……………バーって……………ば……………」

「き、^{キズナ}絆ア!？」

「ちよ、ど、どーしたんだよいきなり!? し、しっかりしろ、絆あああ!」

「あばばばばばばあばばばばばばばばば……………レザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖いレザブレ怖い……………」

「き、キズナ、ご、ゴメン! 流石にもう大丈夫だと思って……………私が悪かったから戻ってきて……………って、キズナ? キズナアアアアア!?!」

気が付いたら、時計の長針が十分位進んでいて、ISを展開したまま棒立ちしていた。その間何があったのか覚えていないが、どうしてこうなったかは何となく分かる。

原因はオルカの専用機——名をクリムゾンヘイトと言うらしい——が、左腕に装備している高出力大型レーザーブレード《アテナ》を見たのが原因だろう。だって、この形状、どう見てもISサイズにミニチュアライズされたMOONLIGHTにしか見えない。

「いや、ホンツツツトゴメン! 流石にもう大丈夫だと思つててさ……………やつぱ、まだ辛い?」

普段は傲岸不遜を絵に描いた様なオルカが、顔の前で手を合わせて平謝りしている姿は何て言うか、新鮮だ。コイツがこんなにも素直なのは、生前俺を殺して下さつてトラウマを与えてくれたご本人様って

ご自覚がおありになるからだ、クソツタレ。

「絆……大丈夫か？ 一体どうしたんだよ？」

「ああ。大丈夫だ、問題ない」

そう言っただけで心配そうに顔を一夏が覗きこんでくる。俺達の事情を知らない一夏じゃ、何が起こってるか分からなくて心配するのも当然か。

……俺も、あれから大分経っていたからもう大丈夫だと思っただが……はあ、心の中で毒づいている場合じゃないな。

「いや、大丈夫だ。心配かけて悪かったな、一夏。気にしないでくれ。オルカも……確かに急だったからちよつと驚いたけど、もう大丈夫だ」

「……そう？ ……なら、もう何も言わないケド……」

「……今のはちよつとつて言うレベルなのか？」

「ああ。ちよつとだ。ソレ以下でもソレ以上でもない。ほんの、ほんのちよつとだけ驚いて取り乱しただけだ。大丈夫だ、問題ない。だから一夏もこれ以上気にするな。言いな、気にせず詮索もするなよ」

一夏にニツコリ笑って、笑顔で顔を近付けて強く言い聞かせる。すると一夏は首をコクコク降って、素直に頷いてくれた。うんうん、素直なのは良いことだ。

……まあ、言ったことは大嘘だけど。今だっと思いつくと膝が微かに震えてるのが分かる。オルカは何か言いたげにこつちを見ているが、何も言わない。今はソレが有難い。俺もいい加減、克服しないといけない。

——オルカに勝つためにも。

「ケド……どうしようかなあ……最初は二人と闘うつもりで来たんだけど……あ、そうだ。ソレじゃあ、三人でIS使って追いかけてこしようか？」

「……は？ 追いかけて？」

「そう、追いかけて。私とアンタ達二人で。でもこれだけだと捕まえられるだろうから……そつちは足止めに武器使って良いよ。

あと、も一個ハンデにそつちが二人とも瞬時^{イグニッションブースト}加速使えるようになる

るまで、私は瞬時加速は使わないでいてあげる。……IS初心者のア
ンタらにはレクリエーションを兼ねた良い訓練になると思うけど?」

内心で悪くないと、オルカの提案に頷く。今の俺の状態じゃ、オル
カ相手にまともにも闘うのは難しいだろう。ソレは恐らくオルカも望
むところじゃない。かといって、普通に訓練したんじや俺のトラウマ
は克服出来ないし、一夏の飲み込みも……一夏には悪いが、あんま
りよくはないだろう。むしろ、今の俺達にはこう言う遊びを兼ねた訓
練だと思えない訓練の方が向いている気がする。これなら、俺のトラ
ウマを克服するにはちょうど良いし、何よりISの基礎的な機動訓練
には最適だろう。俺達が馴れてきたら内容を少しずつ変えていけば
良いしな。

「けど……ホントに良いのか? 正直、無抵抗の女の子を男二人で武
器を持って追いかけるつてのは……なあ?」

甘い。認識が甘過ぎるぞ一夏。コイツは俺達と違ってもう二年く
らい前からIS乗ってるんだぞ。ソレに何より——

「もう忘れたのか、一夏。コイツはオルカだぞ? あの、オルカだぞ?

コイツとその辺の女の子を一緒にしたら、女の子に失礼だ」

オルカには悪いと思っただけど、一夏の認識を念を込めて訂正する。
ソコに若干、気を使わせてしまったオルカへの感謝を込めて、冗談
混じりに。

「アアン? キズナ、今アンタなんつったコラ? ……まあ、良いや。

一応、一夏に言っとくけど、武器は使わないけど無抵抗……だと
思ってるって痛い目見るよ?」

やっぱりな、と苦笑する。コイツはただ追いかけて喜ぶような
タマじゃない。

「武器は使わないけど、迎撃はするよ? あと、ISの手でタッチする
以外ノーカウントだからね? おーけえ?」

「OK!」

「じゃあ、最初は私の鬼から。IS展開して十秒立ったら追いかける
からね。じゃあ……おいで、『クリムゾンヘイト』!」

首に着けていた紅いチョーカーに触れて、ISを展開するオルカ。

こうして俺と一夏と、オルカを混ぜた初のIS訓練は開始された。結果は……ご想像にお任せする。

「まあー……初心者にしては頑張った方……かなあ？ キズナも一夏も……ホントはもうちよつと頑張ってたけど」

……くそ、今に見てろよ。トラウマを克服したら絶対に眼にももの見せてやる……！

mission10 クラス代表決定戦〜白と藤〜

「……なあ。オルカ？ 俺の専用機って……」

「もうじき届くんじやない？」

ここはIS学園第三アリーナのピット。俺とオルカはここで俺の専用機が届くのを待っている。因みに今は――。

「いや、もうすぐって……一夏達との試合まで、一時間切ったんだけど」

「……私に聞かれても分かるわけないでしょ。最悪、訓練機のラファールで戦えば良いじゃん。もしもの時のために学園側で気を聞かせて確保しておいてくれたんだからさ」

クラス代表決定戦、当日だったりする。

結局、この日まで俺も一夏も専用機は届かなかった。あげく、運が悪く訓練機の使用は中々申請が通らず、結局初日を含めて二日しか乗れてない。……同じ状況の一夏はどうしてるだろうか？ あつちはもう専用機が届いているんだろうか……。因みに、一夏も箒もここには居ない。一夏達は第三アリーナの反対側のピットで待機している。

理由は単純。クラス代表決定戦は総当り戦の形を採り、初戦は俺と一夏、次が俺とオルコット……。さん、最後に一夏とオルコットさんの順番で闘うことになった。単純に一番勝ち星が多い者が勝者となる。何故、俺と一夏が初戦に回されたかと言うと答えは簡単で、初心者の俺と一夏に配慮したそうさ。まあ、ここまでは俺の想定通り。唯一の誤算と言えば、未だに俺の専用機が届かない事か。

「大丈夫だよ、きつちー。きつちーならきつと訓練機でもうまくやれるよ」

本音の根拠の無い慰めも、今の俺には少しむなしい。

——と言うか、間に合わないの前提ですか。いや、もういつそ腹を括ろう。そう思うと、途端になんだかやれそうな気分になってくる。……多少の不安は残るが、やっぱり本音には感謝しなくちゃな。

「ああ、サンキュー本音。なんだかやれそうな気分になってきた。そもそも、使ったこともない機体でぶつつけ本番つてのも不安だったんだ。だったら、もう一日でも長く使ったラファールでいった方が良い。もう専用機なんか来なくたって——」

その時。

プシュツ、とピットの扉から気の抜け音がした。

「いやあ、ゴメンゴメン。ちよつと作業に遅れちゃってさあ！ ケドま、こんなのよくある話だし、問題ないよねえ？ ぶつつけ本番になつちやつたケド。じゃ、早速で悪いけど——フォーマット
フィッティング初期化と最適化景気よく始めちゃいますかあ♪」

突然開かれたピットの搬入口。そこから突然届いた声に、本能が警戒する。

ソコには白衣に身を包んだ、見るからに軽薄そうな長身の男が立っていた。その男は大柄で、焼けた肌に白く逆立てた短髪に無精髭が如何にもずぼらそうだ。そして唇にはピアスが一つ。

男はピアスを着けた唇にニヤニヤと軽薄な笑みを浮かべて立っている。

……誰だ、コイツ？

第一印象は胡散臭い男、ソレに尽きる。くたびれたワイシャツとネクタイ、スラックスは兎も角、白衣が非常に似合っていない。

「あ、君がキズナくんかなあ？ イヤー、オルカちゃんから話は聞いてたけど、ホントソツクリだよねえ、外見がさあ！ イヤ、よろしく頼むよお世界に二人だけの男性操縦者くん。なんつたって、俺が開発したストレイドはウチの野心作だから。イギリスの専用機なんかケチヨンケチヨンにしちゃってよねえ！」

白衣の男はフランクに俺に近寄ると、俺の手を握って楽しそうにブン振り回してくれている。……握手のつもり何だろうか。てかストレイドって……もしかして俺の専用機なのか？

開発したって……この見るからに怪しいおっさんが？

オルカの知り合いなのかと視線を送ると、オルカは心底気まずそうな——まるで会いたくなかったという様なしかめっ面で男を見てい

た。

「ああ……直接来たんだ、主任」

「お？ ソコにいるのは我が社の誇る専属パイロットのオルカちゃんじゃないのお！ いやあ、久しぶりい、元気してたかなー？ IS学園に入ってからスツカリ連絡もくれなかったからねえ、会いたかったよ！ てか、いい加減俺のこと名前で呼んでくれたって良いでしょー？ もう結構な付き合いになるんだしさあ？ って、ああ、そうだそうだ！ ソレよりも頼まれてたISが完成したからねえ、ソツチ見てよ！ ——きつと、ご期待通りの出来の筈だ。御要望通りの……ね。ま、ちよつと時間は掛かっちゃったケドさあ！」

……ん？ 今この男何て言った？ やけにハイテンションに話すものだから若干聞いてなかった。いや、でも確かに言ってたよな。頼まれてたISが完成した——と。つまり、この男が——。

「頼まれてたって……俺の、専用機？」

「あ、ゴメンゴメン。ちよつと主役が置いてきぼりだったかなー？ ケドま、どーせ主役は俺の作ったISだしー、別に気にしてないよね。それじゃあ、お待ちかねのお披露目と行こうかあ？ あははははは♪」

「——主任。その前に、自己紹介をなさった方がよろしいかと」

そう言つて、さらにピットに入ってきたのは黒いスーツをピリツと着こなした冷たい雰囲気の女性。深い海のような紺色の髪を肩口で綺麗に切り揃えられたボブヘアが几帳面さを、眼鏡の奥の僅かに垂れながらも鋭さを宿した冷たい眼光が知的さを感じさせる。その瞳に危ういモノを感じ、一層警戒心を引き上げる。

「……あれ、そーだっけ？ まあ、別に俺の自己紹介とかどうでも良いと思うんだけど……それじゃ、時間も押してるし手短かにねえ！ アライアンス技術開発部主任でオルカちゃんファンクラブ会員のNO001と名誉会長やってまあす！ 名前はアンドリュー・アシモフってねえ！ ……こんなもんで良いよね、キャロリン？」

「……申し訳ありません。何分、この方は少々気紛れなもので……申し遅れました、主任及び社の外部交渉を担当する、キャロル・ドー

リーと申します。以後お見知りおきを。さて、それでは主任は作業準備に入って下さい」

「え？ イヤイヤイヤ、その前にまずはパーアーとお披露目をさああ!?!」

「時間が押していますので。その間、私は彼——烏丸絆さんに話がありますので。そんなものは後でお願いします。それでは絆さんはこちらへ——」

言いつがるアシモフさん……主任さんをバツサリと切り捨てて、ドリーさんは俺をピットの脇に備え付けられた作業台に誘導する。随分と主任さんの扱いに慣れているようだ。

「……それで、話って言うのは？」

「ええ、簡単な内容ですので身構えられずとも結構です。まず、貴方に貸与されるISですが……表向きは当社からの貸与という形になり、貴方がISを運用して得られたデータは我々の企業、アライアンスと貴方が所属されているIS学園を通じて日本国及びIS委員会で共有する事になります。勿論、我が社とIS学園に日本国及びIS委員会には得られたデータの守秘義務が存在し、またそれは貴方にも適用されます。まあ、その辺りの細かい条項はこちらに記載されていますので、後程適当に目を通していただければ問題ありません」

「……そんなに適当で良いんですか？」

「……おや？ もしや、貴方はご存知ありませんでしたか？ 質問に質問で返すのは失礼ですが、オルカさんからどの様な話を伺っております？」

「いや、ご存知もなにも……突然オルカにアライアンスにISコアがたまたま余っていて、俺のデータが欲しいからそちらで専用機を用意したいと伺っただけなんです」

その言葉にドリーさんはちらりと周囲を見渡して、周囲に誰も居ないことを確認すると、その口を開いた。

「……なるほど。織歌さんは貴方にもまだ何も教えていらっしやらない様ですね。では……そうですね。我々が知っている範囲で良ければお話ししましょう。まず、織歌さんは当社に貴方の専用機を開発し

て欲しいと依頼されました。貴方のデータ——貴重な男性操縦者のデータ収集と、出所不明の未登録のＩＳコア一つを手土産に。まさかとは思いますが、貴重なＩＳコアの一つがたまたま余っていたなどと言う話を鵜呑みにされていた訳でもないでしょう。……思えば去年、我が社で織歌さんを採用した際にも、同じように出所不明の未登録コアを持参した上で『これを貸してやるから私の専用機を用意してテストパイロットとして雇え』……と。あの時は我々も驚いたものです」

そう言つて過去を思い出し、僅かにドーリーさんは微笑んでいる。しかし……なんだそれ、イミガワカラナイ。メチャクチャするヤツだとは前々から思つてたけど、なに、その完全上から目線。それに何より。

「えーと……今さらつと未登録のＩＳコアつて言いませんでしたか？」

「ええ。出所が不明の……ああ、勿論彼女を採用し、機体を託すにあつて色々と調査させて頂きましたが、あなた方は中々面白い人脈をお持ちのようで」

そう言つてニツコリ微笑んでいるドーリーさんは、恐らくもうそのＩＳコアの出所について粗方予想出来ているんだろう。

と、言うかＩＳコアなんて個人がそう易々手に入れられる物ではないし、それも未登録となればなおさら入手は困難………と言うか、マトモな常識があればまず手を出さないだろう。

条約でもＩＳコアの取引なんてものは当然の如く禁止されているし………何より、未登録のＩＳコアとかどこの国も企業も喉から手が出るほど欲しい筈だ。

例え条約を侵す事になろうとも。

なにせ、何に使つても足のつかないＩＳを保有できるんだから。まあ機体やパイロットを調べれば話は別だが、その二点を隠蔽する事が出来ればどうにかなる。最悪、機体から足がついてもパイロットを切り捨てて機体自体は盗まれたとか言い逃れれば良い。こんな持つてるだけで国家や企業から狙われるようなモノを誰が好き好んで……そもそも、現存しているＩＳコアが全て登録されているなら、未

登録の I S コアなんて新しく生産するしかないわけで。

そして、I S コアを製造できる人間なんて、当然限られてくる——
と言うか、一人しか居ない訳で……あの人は確かに天才だけど、やる
ことなすことぶっ飛びすぎだろう。

I S の産みの親『篠ノ之 束』。天災の異名で呼ばれる彼女が独力
で製作した I S。その I S を I S 足らしめる為に必要な主要機関で
ある I S コアは、その複製どころか解析が完了したと言う話も未だに
一切聞かない。

つまり、I S コアを製造できる人間は、未だに束さんしか居ないこ
とになる。昔から身内鬣屑どころか、人に対する好き嫌いが激しいと
言うのも生温い位苛烈な人だったが……ふつう、ここまでやるか？

そんなだから、天災何て言う名誉なのか不名誉なのか判断の付きづ
らい異名で呼ばれるんですよ……。

「まあ、我が社としては優秀なテストパイロットと自社所有の I S コ
アを消費せずに我が社の製品の運用データが入りますので渡り
に舟でしたが。ああ、それを使って悪用等と言う事は我々も考えてい
ません。今、彼女を敵に回すのは余りにも部が悪いです。まあ、し
かしそれでも流石に未登録のコア所有者に機体を貸与しているなど
余りにも体裁が悪いので、織歌さんは我が社のテストパイロットに、
貴方には日本国への要請を通してと言う形で、当社から I S コアもろ
とも機体を貸与している……と言うのが表向きの理由になっていま
す。機体はともかく、実際はコア自体の所有権はあなた方にあります
ので、あなた方は実質史上初のフリーランス I S 操縦者と言うことにな
るのでしようが」

そう言つて彼女がニッコリ微笑んでいるのを見てみると、この人も
中々イイ性格をしているんじゃないかと思う。恐らくこの人は話を
聞いて、事態の面倒さに頭痛と胃痛を感じてる俺を見て他人事のように
に微笑んでいるんだろう。……本当にイイ性格をしてるよ。

ただ、いまの話聞いていて惹かれなかった部分も無い訳じゃない。
フリーランス……実に良い響きだ。実際は色々制約はある
だろうが、生前独立傭兵街道まっしぐら立った俺には非常に馴染みぶ

かい。

「ご理解いただけただけの様で何より。それでは契約内容の確認へ戻らせて頂きます。我々は企業です。企業の所有物を外部に貸与するにあたって、なんの対価も無く貸与するなどあり得ません。我々が貴方……いえ、あなた方に要求することは二つ。一つは言うまでも無く操縦中の身体情報も含めたIS運用データ。そして、もう一つは——」
僅な溜めを作って、改めてドーリーさんは真剣に俺を見つめてくる。

「——強者であること。当社製造のISを使用する者が強者であれば、それだけで社の広告となりえます。この二つが叶えられ続ける限り、当社はあなた方への惜しみ無いサポートを約束しましょう」

強者であること……か。そんなことは言われるまでもない。元々俺も、弱者でいるつもりなんか更々無い。

「——良い条件ですね。何よりも分かりやすいって言うのが何よりも良い」

「では——取り合えずは契約は成立と言うことで。後は『証明』して下さい。貴方が、真に強者足る可能性があるのなら」

「……良いでしょう。試合の結果を楽しみに待って下さい」

「貴方のご健闘を心よりお祈りしています。それでは——主任？ 準備の方はよろしいですか？」

「あはははは！ 勿論だよお、キャロりん♪ それじゃキズナくん、こっち来て乗って貰えるかなあー？」

そこに用意されていたのは、オルカのクリムゾンヘイトと同じだが——色が真逆の、淡い青。藤色の機体が俺を待っていた。

これが俺の機体。俺だけの、俺の為の専用機——。

「うちの会社の試作第三世代型ISの二号機、ストレイドverウイスタリアグリーン。オルカちゃんのクリムゾンヘイトを射撃戦特化型にした感じかなー？ まま、取り合えず説明は置いといて、ちやちやっとなら装着してみちゃってよ」

言われて、俺は開いた装甲の中に入り込み——触れた瞬間に頭の中にこの機体の情報が流れ込んでくる——。

「……へえ？ 大分親和性高いみたいで何よりだよ。じゃ、そのまま機体に体を任せといてねえ？」

言われた通りに体を委ねるように、機体の中に入り込み、全体重を預ける。すると、気の抜けた音とともに装甲が閉じていき、ISと『繋がる』。

特訓で、乗った打鉄ともラフアールとも全く違う一体感。俺とウィスタリアグリーフの境界がひどく曖昧に思える程の。

それと同時に、すべての感覚が数段階UPしたような感覚。だが、それも決して不快じゃなく、とてもクリアで、ずっと前から知っていたような馴染み深さ。

——いや、これを俺は知っている。これとよく似た感覚を。

AMSに接続した時に似ている。……が、あつちは酷いものだった。何せ、接続する度に痛みが走ったし、AMSが馴染むまでは気持ち悪かった。

だが——それを乗り越えた先にはこれと同じ感覚が広がっていた。ISのセンサーで拡張された感覚が周囲360度の情報を、全て教えてくれる。数値化された情報を、ISのサポートにより違和感無く理解できる。

——確かに、こいつは訓練機とは全くの別物だな。

オルカが愉しそうににやけているのを、本音が若干心配そうにこつちを見ているのが、見えなくても分かる。

「……きつちー、行けそう？」

「ああ。コレと……いや、コイツとならオルカにだって勝って見せるさ」

不安げな本音の言葉に、俺は自信を持って返答を返す。友人の不安を払拭出来るように。

「キズナも面白い冗談を言うようになったねえ？ でも、そう言う事はまず——いや、今は良いや。リベンジ……楽しみにしてるよ」

オルカが前に回って、笑顔で拳をつき出してくる。俺はその拳にウィスタリアグリーフの拳をつき合わせて、笑い返す。

——待ってるよ、オルカ。

「うんうん♪ ハイパーセンサーの感度も良好みたいだねえ！
じゃ、後はISが勝手にやってくれるし……機体説明といきましょう
かねえ！ まあ、ホントはIS自体が教えてくれるだろうけど……
ま、念のためねえ！」

ここまでの流れをガン無視して、相変わらず何処かテンションが
ぶっ飛んでる軽薄な口調のまま、主任は俺たちの会話に割り込んでき
た。

「では、武装から。まず、初期装備プリセットとして銃剣付きアサルトライフル
《ネフティス》が二挺、銃剣付きハンドガン《セクメト》が二挺。次に
背部に装備された非固定浮遊部位可変型レーザーキャノン《ハトホ
ル》。こちらの武装はチャージを行い射程・威力・弾速を強化できます
ので、戦況によって上手く使い分けて下さい。そして、肩部両脇に浮
遊しているのが肩部シールドも兼ねた散弾射出兵装《ムト》になりま
す」

ドーリーさんが説明してくれた兵装の数々を聞いて、俺はかつての
愛機を思い出していた。見た目もさることながら、武装までここまで
似通っているとは。まあ、武装に関してはオルカのオーダーのお陰だ
ろう。

しかし、オルカのクリムゾンヘイトもそうだけど、このウイスタリ
アグリーフもなんか複合兵装が多いな。きっと趣味なんだろうが、強
度とか大丈夫だろうか？

因みにウイスタリアグリーフの見た目はオルカと同じAALIIY
AHから腕部、脚部、肩部、背部を外して生身に装備したような感じ
だ。そこに両手にAR—O700をISサイズにミニチュアライ
ズしたようなライフルを持ち、肩部両脇に浮かんでいる逆さにした二
等辺三角形の装甲板が浮遊していて、背部には巨大な円筒形の物体が
二つ浮いている。……ただ、背面に浮いている円筒形の物体——《ハ
トホル》の形状が対称シンメトリーで無いのが無性に気になる。右背面に浮遊し
ている筒は太くはあるが、非常にスマートだ。一見、問題無さそうに
見える。その反対側、左背面に浮遊している方は……右より若干太
く、砲身下部に決定的な違いがある。

なんか、無数のパイプみたいなのがゴテゴテ取り付けられているのだ。非常に嫌な予感がする。

「因みに——バススロット拡張領域とはある兵装とシステムによって殆ど埋まっておりますので……後付けイコライザ装備は取り付けられませんのでご注意ください」

……え？ バススロットが埋つててイコライザがつけられない？
つまりプリセットのみで闘えと？

いや、まあ……それはネクストの時で慣れてるが……色々な武装を詰め込んで見たかった俺としては少し残念だ。しかし、そのバススロットを殆ど占領しているって言う兵装とシステムに、余計俺の中で嫌な予感が強くなる。

「ちよつとちよつと！ 酷いじゃないキャラりくん。俺の台詞殆ど持つていかないでよねえ！ 俺にも説明させてくれないとさあ！
じゃ、バススロット拡張領域の大半を占めてる兵装とシステムの説明しちゃうねえー！ 実はソレこそがこのストレイドを第三代にしているイメージ・インターフェースを使ったシステムと武装なんだけど——」
話を聞きながら、俺は思った。

この男はアホかと。
バカじゃないのかと。

なんてモノを搭載してるのかと。
イメージ・インターフェースを使用した主要システムに関しては兎も角、それを使用した第三代兵器に関して言えば、完全な欠陥品だと思う。

有澤やトーラスが普通の企業に思える位の変態っぷりだ。

「——って、ワケだからあ……ぜー……ぜー……ぜー……ぜー……
からねえ？ どーしても使いたいわってなったら、しようがないから是非使つて良いけどさあ？ 一応……一応、使っちゃダメだからねえ？
期待してるよ。どーしても使いたくなったら……しようがないけどねえ！」

「もうメチャクチャだよ！ てか、あんたは使わせたくないのか使わせたいのかどっちなんだよ！ 後、期待つてなに!? もし使用する

るって意味だったら、絶対に使いませんから安心してください!!」

もう、やだこの会社……………変態過ぎるだろ？

オルカのクリムゾンヘイトにも、同じシステムと似たような装備が搭載せられてるそうだ……………戦闘狂だがオルカもバカじゃないから、多分安易には使わないだろう……………多分。

「コレが織斑くんの専用IS『白式』です！」

純白の白があった。

装甲を展開し、俺を待ち焦がれるように光を照り返す、白いIS。コレが、俺の———そう思い、俺は知らず知らずのうちに手を触れていた。触れる———ただ、それだけの動作で理解できる。コレが俺のために、俺の為にだけに用意された事が。

初めてISに触れたときの、膨大な量の情報が流れ込んでくる……………なんていうことは無い。ただ、機体から、触れた場所から馴染むような暖かみを感じる。

「背中を預けるように……………そうだ。ただ座る感じで良い。後は機体が勝手にやってくれる。……………とは言え、時間が無い。フォーマツトとフィッティングは実戦の最中に行うことになる。……………出来なければ負けるだけだ。分かったな」

「分かっているとは思いますが……………一夏、相手はあの絆だぞ。正直……………」

後から、箒が真剣な顔で話しかけてくるのが見なくても『分かる』。周囲360度の情報をISがハイパーセンサーを通して教えてくれる。

分かっているさ、箒。アイツ、普段は織歌より自分の方が大人しい様に言うけど……………実際のところ、火が着けば絆も織歌とどっこいどっこいだ。今のところ俺が知ってる人間で割りと本気の千冬姉と戦えるのなんてあの二人位だ。それで、多分今回は火の着いた絆が相手となれば……………IS操縦歴が俺と殆ど同じって言っても油断して良いような相手じゃない。何より、結局二日しか取れなかったIS操縦訓練でも、絆の方が上達するペースは早かった。

——全く、俺もとんでもない幼馴染みを持ったもんだよ。

そんな絆が本気で来るとなれば、箒だつて真剣になる。……もつとも、箒の場合いつでも真剣そうに見えるけど。

「——ああ、正直厳しい闘いになると思う。けど、やれるだけやってみるさ。この一週間、俺の特訓に付き合ってくれた箒の為にもさ」

「こ、この馬鹿者が！　だ、男子たるもの勝ってくる位言ってみせろ！」

……顔を真っ赤にして怒られてしまった。確かに、勝つって断言出来ない俺は情けないと指摘されれば情けないとは思うけどな……：……：幾らなんでも厳しすぎるだろう。何も真っ赤になって怒らなくても良いと思うんだ、俺。

《戦闘待機状態のISを確認。操縦者、烏丸絆。機体『ストレイド』名称『ウイスタリアグリーフ』。全距離対応射撃型。特殊装備を確認》

俺の意識にISのハイパーセンサーが確認した絆の機体が表示される。準備万端で、アイツはもうアリーナで俺を待ってるらしい。

知らず、口角がっり上がるのを感じる。

きつと、この白式ならアイツとも互角の闘いが出来る。絆には……：アイツらには、世話になりっぱなしだ。この一週間も、ソレ以前からも。千冬姉にも、ずっと。

俺は色んな人達に世話になつてる。ソレは、コレからもきつと変わらないんだろう。それでも、少しずつでも返していけたらと思う。だからまずは。

「……そうだな。じゃあ、勝ってくるよ、箒」

一週間付き合ってくれた、箒と絆に返そう。

俺に出来るだけの、自信を込めた笑顔で箒に返す。

「……………う、うむー」

……何だったんだろう、今の間は。未だに顔真っ赤なままだし、突っ込んだら怒られそうだから、そつとしておこう。

「大した自信だが、精々無様な敗北だけはしないよう心掛ける事だ。

……行ってこい、一夏」

全く、こんなときでも鬼教官しなくたって……とも思うけど、呼び

名がプライベートになつてる。それに、声が若干震えている。ISのハイパーセンサーを通さなければ分からないほど、微かな声の震え。全く、千冬姉も素直じゃない……

「無様に負けた時は……たっぷり補習をしてやろう。なあ、お・り・む・ら？」

……コレはきつと千冬姉なりの照れ隠しのはずだ。いや、そうに違いない。心の中を読まれたとか、そんなことはきつと無いはずだ。多分。

「下らん事を考えてる暇があつたらさっさと玉砕してこい」

……多分。いや、もう考えるのはよそう。このままだと闘う前に俺の精神がマツハで蜂の巣になりそうだ。

「……じゃ、千冬姉、行つてくる！」

俺がアリーナに躍り出ると、目の前には淡い青色に身を包み、瞳を閉じて悠然と佇む絆の姿があつた。

「白式……か。何て言うか、お前にピッタリな機体だな」

ゆつくりと目を開いて、俺に語りかけてくる絆。精神的なコンディションは絶好調見たいだ。それに、俺も自然とテンションが上がる。

「——待たせて悪かつたな、絆」

言つて、俺は拡張領域内から展開できる唯一の名称不明の近接ブレードを展開し、構える。

——装備が刀一本だけつて言うのは、流石に偏り過ぎだと思ふけど。

……まあ、この一週間、剣の修練が殆どだったんだ。俺には分かりやすいコレでちょうど良い。

「いや、別に？ 丁度、俺も今来たばかりだしな？」

絆もライフルを展開するが、構えは取らない。柳生新陰流の無行の位……じゃないな。銃だし。

「ハハッ、それは良かった。しかし、変なもんだな……俺達がISを操縦して、こうして向かい合つてるなんてな。藍越学園の受験勉強して

たときは想像もしてなかった」

ああ、本当に想像すらせずに諦めてた。

俺の家族を、大切な人達を守りたい。

その願い。その思い。鍛える事は続けたけど、どこかで諦めていた。

「ああ、全くだな。本当に——一夏と居ると飽きないな。俺まで巻き込んでくれて……………なあ？　けど、まあ……………これに関しちや感謝してる」

言つて、漸く絆もライフルの銃口を俺に向ける。そろそろ始めるつもり見たいだ。

——ああ、そうだな。始めるか。

俺はもう守られるだけは嫌だ。

もう、守られるだけでいた現状から抜け出そう。

俺だつて、誰かを守れるつて証明しよう。そうだ。まずは——。

「俺も感謝してる。だからまずは——お前に勝つて、俺はこの一週間の借りを返す！」

「それでこそだ、一夏ア！」

そして舞台は動き出す。俺は前へ、絆は後へ。

俺にはこの名称不明の刀一本しか無い。なら、もうやることは一つしかない。

——距離を詰めて、斬る！

絆は木の葉が舞うようにゆらゆらと揺れる様に、緩やかな円を描きながら後退、両手に持ったライフルで『出鱈目』に弾幕を張っているためになかなか接近出来ない。

出鱈目に撃っているライフルの弾を、体を振って避ける避け……………!?

突然、ゾクリ、と。

背筋に言い様の無い悪寒が走り、その直感に従って動きを止める。動きを止めた事で、ライフル弾が何発も白式を叩く。

だが、そんなことよりも。

俺の真横を眩い輝きを放つ一筋の青白い光条が抜ける。

「……………良く気付いたな？」

絆の声にそちらを見れば、ウイスタリアグリーフの背中に浮かんで居る巨大な筒が二つ俺の方を向いていた。

しかも、左側のは未だに砲身が青白く輝いて――

瞬間的に、本能が鳴らす警鐘に従って、急いで右に逃げる。

その直後、青白いレーザーがさつきまで俺がいた空間を焼きながら貫く。

「ッー」

レーザーを回避し、安堵する暇も無く、突き刺さる何かを感じて、更に横へ。

「……ッー」

ライフル弾の一斉射撃。それが回避した後も執拗に俺を追い掛けて来る――！

「……絆くんって本当に素人なんですか？」

「？ それは……どういふことですか、山田先生？ 初心者ならばまだ分かりますが……素人、ですか？」

山田君の言葉に疑問を持ったのか、箒が訊ねる。……無理も無い。今の絆が使った技術は箒にはまだ理解できないだろう。

「そうだな。アレは無駄に勘の良い一夏だから避けられたのだろうが……そうでなかったら一発目のレーザーでS シールドエネルギー Eを大幅に削りとられて、その次のライフルの射撃で終わっていただろう。そうだな……… 囧、と言えば分かり易いか？」

「……… 囧、ですか？」

「ああ、そうだ。最初のライフルによる一見大雑把に見える射撃………アレは一夏の回避方向を限定させる為の囧だ。ただ、丸つきり囧と言うわけでもないがな。当たらない射撃では囧にはならん。そうして回避方向等を限定した上で、本命を撃つ。ただの予測射撃よりも相手を誘導している分、より難度は高いだろう。相手が自分の予想通りに動くとも限らんからな。剣道経験のあるお前なら、多少は分かるだろう。それをアイツは剣道とは違う、銃で、かつ中距離でやった

というだけだ」

言うのは容易いが、実際にやる難度は高い。至近距離で打ち合い、かなり動きが限定される剣道であっても、ソレが出来るのはある程度の上級者だ。だと言うのに距離があり、選ぶうる選択肢が多い射撃戦で相手を誘導することが、どれ程の至難か。

まあ、近接ブレード一本しか武装がない一夏だからこそ、こうまで嵌まったのかもしれないが。

(お前といい、織歌といい……………)

あの二人とは古い付き合いだ、幼い頃から妙に達観していた事と言い、子供とは思えない身体能力。

更には乗って間もないISでこの動き。いや、動き自体はまだまだ拙いが、それを忘れさせる程のいやに堂に入った戦闘機動に戦術。一体、何があの二人にそこまで力を求めさせるのか。

(ISを動かした事といい……………お前らと付き合っていると驚かされてばかりだ、全く)

「しかし……………織斑くんも頑張っています……………幾らなんでも相性が悪すぎじゃありませんか？」

山田君の声で、思考に没頭していた意識が引き戻される。まあ、ただの杞憂だろう。

「相性が悪かろうと、どうにかできなければ織斑が負けるだけです」

「……………せめて、最適化処理と一次移行が終わってくれば……………」

先程から一夏は果敢に絆に接近戦を挑もうとするが、一向にその距離を詰められずにいた。絆の張る弾幕が、一夏が近付く事を拒む。

だが、近付けないだけであればまだ良いが、白式のSシールドエネルギーEはじわりじわりと削られて居る。

ISの鬨いとは、言わばSEの削りあい。

通常、ISには二種類のシールドが搭載されている。

シールドバリアーと絶対防御。

シールドバリアー・絶対防御共にISに標準装備されている不可視

の防壁で、これがISと通常兵器とを隔てている大きな要素の一つであると言える。シールドバリアーは常時展開されている防壁で、ISを包むように三六〇°に展開されており、あらゆる方向からの攻撃を防いでくれる優れものである。ただ、シールドバリアーも完全ではなくある程度の攻撃を受けると貫通されてしまう。そう言った時に発動するのが絶対防御だ。シールドバリアーが貫通され、操縦者の生命に危機があった場合に発動し、理論上はあらゆる攻撃を防ぐ絶対の盾。ただし、シールドバリアーを貫通しても生命に別状がない場合には発動しない。

さて、ここで先程の説明に戻るが、SEはシールドバリアーで攻撃を受ける度に消費され、絶対防御は発動する度に大量のSEを消費する。

他にISの機動や一部の攻撃する際にもSEは消費されているが、最もSEを消費させる方法としては、やはりシールドバリアーを貫通させ絶対防御を発動させる事だろう。そうして、攻撃をヒットさせていき先にSEがゼロになった方の敗北と言うシンプルルール。

SEを格闘ゲームにおけるHPやLPに置き換えてもらうと分かりやすいかもしれない。

未だにクリーンヒットは貰っていないとは言え、一夏の操る白式のSEはじわじわと削られ続け、既に半分以上消費している。どうにか近付きたい一夏ではあるが、近付こうとする度に進路上に弾幕を築かれ妨害される。

それを絆は涼しい顔で淀みなく、まるで手慣れた作業であるかのようには繰り返す、一夏を近付かせまいとする。

そう、決め手であるはずのレーザーキャノンだけは一度も被弾していないと言うのに、それでも動じた様子も見せずに、だ。決定打を悉く避けられ続けければ、普通であれば多少なりとも焦れてくるだろう。だが、絆にはそれはない。

それが一夏の心を余計に焦らせる。

もう、十分は回避し続けて居るだろうか。

初心者でありながら十分間避け続けている一夏を褒めるべきか、そ

れとも十分間も涼しい顔で一夏を手玉に取っている絆の技量を褒めるべきか。

(……不味い。このままじゃじり貧だ。いつそ、多少の被弾を覚悟で突っ込んでみるか……?)

戦場に初めて出た者が、勝ち、生き残る為に迫る弾幕の前に身を投げ出すことに、果たしてどれ程の覚悟が必要なのか。それは、ともすれば破れかぶれのやけっぱちと紙一重なのかもしれない。だが、どちらにせよ動き出さなくては勝ちはない。

その決断を一夏が下そうとした、まさにその瞬間。

「いやあ、オルカちゃんもそおーだったけどさあ、とてもじゃないけどIS乗り始めて一週間の人間とは思えない動きだよねえ、彼も。まあ、君らの幼なじみ君も頑張ってるほーだけどねえ？」

あい変わらず軽薄な主任の言葉を黙って聞き流しながら、私は視線をモニターに向けていた。

昔とまるで変わらない、私の記憶に焼き付けられたその動き。……とは言っても、昔はもつと隙も容赦も無かったけど。まあ、ネクストとは勝手が違うし、乗り始めたばかりだからだろうって言うのが理由かな。

だが、その詰め将棋を見るかのような戦術を見ているとつくづく思う。

本当に、えげつないと。

今戦ってる一夏には同情してあげても良いかもしれない。今頃、一夏の内心はかなり焦れて来てる筈だ。そろそろ破れかぶれの特攻でも画策してそうだなあ……。

「ほへえ……」

隣で見てる本音も、予想外の結果だったのかただただ感心してモニターを眺めていた。だけど。

「あ、あれ〜？ きつちーもしかして……弾切れ〜!? ま、不味いよ〜おるるん〜！」

本音の言葉通りにモニターの中で、絆が銃口を一夏に向けて何度かトリガーを引くが、ライフルはウンともスンとも言わない。

「うわぁ……」

その光景を目の当たりにして、まるでどうしようもないものを見た様に顔をしかめた。

モニターの中では絆がライフルを白式に向かって投げつけ、これぞ好機と見た一夏が全力で白式のスラスターを吹かして、ウイスタリアグリーフにここぞとばかりに突撃してる。

「これで終わりかなあ……まあ、もった方かな、うん」

(今しかない！)

未だに名称不明のブレードで、投げ付けられたライフルを払いながら、全速で絆の駆るウイスタリアグリーフに肉薄する。

「チツ……させるか！」

新しくハンドガンを二丁一夏に向けて射つものの、一夏は被弾を恐れずに前進する。その一夏の気迫に押されたのか、ハンドガンでの射撃は散漫としか言い様のないもので、当たらない弾丸もちらほらとある、正に今までの嫌らしい射撃が嘘だった様に乱雑なものだ。

それを、絆さえ予期せぬ弾切れだったと捉えた一夏は、近付くほどに上昇していく被弾率とシールドエネルギーの消耗すら意に介さずに、駆け抜けろー遂に一夏はこの試合で初めて自分の間合いの内にウイスタリアグリーフを捉えた。

「キィィィズナアアアアアア！」

一夏は雄叫びを上げ、肉薄した勢いのまま、唯一の武装である近接ブレードを両の手で天高く振り上げる。

この一刀に全身全霊、必勝の意志を込めて。

「……一夏」

白式がブレードを振りかぶり、己に降り下ろさんとする正にその刹那。

「それじゃダメだろ？」

絆は笑った。

その直後、ウイスタリアグリーフの肩部に浮かんでいた装甲板——ームトが跳ね起き、内側を白式に向けると同時に内側の装甲を展開。

一夏が身の危険を感じ取り反応するも、既に攻撃に意志を割いていたため行動が一泊遅れ。

装甲板内側に潜んでいた無数の鋼弾は無慈悲に、一斉に一夏と白式を襲った。

至近距離で発射された散弾を漏れ無く全身で受けた白式は、その衝撃で数メートル吹き飛ばされ、更にそこに絆は追い討ちとしてチャージされていたハトホルのレーザーキャノン二発を撃ち込み、二丁のハンドガンセックメトの銃口を油断なく白式へと向けて——

『試合終了。勝者——烏丸絆』

「きつちーく、お疲れ様〜」

ピットに戻ると、労いの言葉と共に近付いてきた本音とハイツタツチを交わし、続いてオルカ、主任さんにドリーさんも上機嫌でこちらに近付いてきた。……いや、オルカだけは苦笑いを浮かべている。——いや、まあ、理由は何となくわかるけどな。

「いやいやいやいや！ 絆クウン、キミもなかなかやってくれるじゃないの〜！ で、どうだったあ？ オレの造ったウイスタリアグリーフはあ？」

「良い機体です。正直、予想以上ですよ。これで拡張領域に色々装備を詰め込めれば言うことなしかったですけど」

「あつれえ〜？ もしかしてキミってロマンとか理解できないタイプ？ そう言えばさっきの試合でもアレ、使ってなかったしねえ」

「あんなモン、アリーナでの一対一での状況下じゃ使えませんよ！ それに戦いにロマンとか求めないでください！」

主任は残念そうな顔をしているが、戦いにロマンとか求められても

困るし。そもそも、あんなモンをサシで使えるか。色々リスクがかすぎる。

「お疲れ様でした。まあ、機体の相性的にも当然の結果だったと言えるでしょう。対戦された織斑一夏さんにはお悔やみ申し上げます。むしろ、次の対戦カードこそ本命……そちらの方であなたの実力を拝見させて頂く事にしましょう。わが社が支援するに相応しい方であるか……ご健闘をお祈りします」

……ドリーさんはドリーさんで、その、笑顔で容赦ないな。一夏、お前ドリーさんの中で完全に前座扱いされてるぞ。いや、まあ、確かに近接ブレード一本しか装備の無い白式とじゃ相性は悪いんだけど。

……って言うか、初心者に近接特化型、それも装備がブレード一本しか無い機体を渡すって……一体、制作者は何を考えているんだ？

「相変わらず、えげつない戦い方をするねえ………絆も」

「……さあ？ なんの事を言ってるんだか、俺には分からないな」

苦笑を浮かべながら他の人間に聞こえない様に言ってきたオルカに、俺は惚けて見せた。

「あの弾切れ……わざとでしょ？ 一夏が突っ込んで来やすい様にお膳立てして、しかもご丁寧に動揺したフリまでして、一夏の気が変わらないように適度に外して……ホント、昔っからイイ性格してるよねえ？」

……まあ、やっぱりオルカには全部お見通しか。実はアレ、弾が切れてた訳じゃなくて、ISを通してトリガーをロックしてただけなんだよな。勝負を一気に決める為に。いや、武装が近接ブレード一本しか無い白式だったからこそ使ったが、他のマトモな射撃武装のある機体相手じゃこの手段は使わない。近接ブレード一本しか無い白式だったからこそ、こうまで上手くいったわけだし。

「素人相手に卑怯だって怒るか？」

ニヤニヤ笑いながら、俺はオルカに訪ね返す。俺がニヤニヤ笑ってるのは……まあ、コイツがどう返すかなんてだいたい予想できるからだ。

「いいや、変わってなくて安心したよ。むしろ、素人だからって手を抜いてる方が失望したし」

「ハハ。やっぱ、お前もイイ性格してるわ、オルカ」

そう言っつて、俺とオルカはお互いに手を掲げーっーパイアアアン！と、ピットに小気味良い渴いた音が響いた。